緑のオリンピア

池波正太郎



講談社文庫



緑のオリンピア

池波正太郎



講談社文庫

緑のオリンピア

池波正太郎

講談社

目次

はじめに……。 5
眼（め） 9
緑のオリンピア 91
木葉微塵（こっぱみじん） 175
のどぼとけ 197
ひとのふんどし 219
解説　常盤新平 246

はじめに……。

今度、講談社文庫の一冊としておさめられた、この五篇の小説のうち〔ひとのふんどし〕の一篇をのぞいて、他の四篇は、いずれも直木賞を受ける前の、まだ私が三十を出たばかりのものばかりで、読み返すと大巾に手を入れたいおもいがしたけれども、あえて、わずかな部分の手入れにとどめた。

それというのも、若いときには、それなりのよさもあることだし、ことに〔緑のオリンピア〕の一篇は、イギリスの妖精を登場させることによって、一人の若いスポーツマンの青春を象徴したもので、こうしたものは、若いときでないと書けないような気がする。この小説を書いたとき、日本が誇るベルリン・オリンピックの三段跳・優勝者である田島直人氏から、いろいろとおはなしをうかがった。小説に登場する牧野平一郎は田島氏がモデルといってよい。それと若い三段跳の選手からも取材をさせていただいたし、私自身もフィールドへ行き、三段跳の練習をしたものだ。

〔眼〕は直木賞の候補になった小説で、これも主人公・井上吾郎と同じような盲目の大学生や、そのヘルパアから取材をさせていただき、懸命に書いた。あらためて、みなさんに御礼を申しあげたい。

ともかくも、五篇の小説は、私にとって、おもい出の深いものばかりで、当時は自分に合った

文体を探りつつあった時期だったのだろう。

私の場合、文体は頭の中というよりも、自分の肉体から生まれて来るようにおもえたし、なればこそ、スポーツ小説に心をひかれたのではあるまいか……。

昭和六十二年春

池波正太郎

緑のオリンピア

眼（め）

激しい疲労と虚脱が、井上吾郎を、むしろ快ろよく痺れさせていた。

三年の間、やるときは薬でと決めていたのだが、今は、それも念頭になかった。吾郎は近寄って来る国電の響音に、ふらりとさそわれ、今夜はわけもなく、その凄まじい車輪の回転の中へ溶け込めると感じた。

吾郎は冷えきった両掌を本能的にこすり合せ、ステッキを握ってプラットホームのベンチから立上り、ゆっくりと歩き出した。

この駅のホームは、なだらかな傾斜で線路に向って伸びている筈だった。何時だったか一度ステッキで探ったことがある。

夜更けのプラットホームは、深閑と静まり返っている。ステッキの音に呼吸を合せて近づいて来る響音が、明るい緑色の、ふわふわした形になり、暗く閉ざされた吾郎の瞳孔にひろがり、吾郎は、その緑の絨毯へ両腕を差しのべるようにして、全身を投げかけた。

だが……体は動かなかった。

首のあたりを強く引張られて、振り放そうともがいたとき、緑の絨毯は消え、響音は風を巻い

て彼の鼻先を通り過ぎ、駅へ滑り込んで行った。

急に、体が宙に浮き、吾郎は何もわからなくなってしまった。

気がつくと、吾郎の体は、誰かの大きな体に抱き込まれていた。生温い息と一緒に、太いくせに変に物柔らかな男の声が耳元で聞えた。

「気がついたかい——大丈夫。知っているのは俺だけだよ」

体中の血が空に吸い込まれてしまったような疲労で、吾郎は口もきけなかった。

響音がまた聞えてきた。まだホームのベンチにいるらしい。男がまた言った。

「あんた眼をやられているんだね」

身を竦めて逃れようと焦る吾郎は強く押えつけられた。

「俺の弟は、先天盲（生れつきの盲人）と同じだったが、あんたは何歳のときから？」

この男が、盲人の肉親だと知ったとき、すらすらと返事が出た。

「三年前、二十一のときです」

「お父ッさんやお母さんは？」

「いません」

「一人きりかね？」

「え……」

男は沈黙したが、息苦しい一瞬が過ぎると吾郎の肩をつかみ、

「さ、行こう」と言った。

その声には、どうしても逆うことの出来ない力と重味があり、男の大きな厚い掌には、細い吾郎の腕が痛むほどの握力があった。

駅の階段をゆっくりと降りながら、男は、

「俺は、稲垣邦男といいます。二十五歳だから、あんたより一つ上だね」

昭和二十五年——あの朝鮮戦争が始まった年の、冬のことだった。

点字

1

上野公園に近い、寺院と坂の多い高台の町で、井上吾郎は生れた。

父親の重吉は、明治初期の武者絵で著名だった尾崎竜平という画家と吉原の芸者との間に生れた。庶子としての苦痛に耐え、中学を出てからM物産の社員見習として入社した。

冷静で着実な勤務への精励と、苦学で習得した英語によって、アジア方面へも出張を命ぜられるようになり、着々と地歩もかため、吾郎の生れた翌年、大正十四年の春には、新しく設立された紡績会社の購売部長に引抜かれた。このポストは余得が大きく、吾郎も子供の頃、盆暮になる

と家の床の間に、会社へ出入の商人達が届ける品物が、山のように積まれていたのを、よくおぼえている。

母親の律も、重吉に負けない利殖家だった。

変動の激しい時代に〝他人には決して迷惑をかけない〟という独立自尊と〝他人には少しでも迷惑をかけてはもらいたくない〟という冷ややかさが一緒になり、この夫婦は着々と財産をふやしていった。

吾郎が小学校へ上る頃になると、新婚当時の理想だった一万円の貯金（当時は二千円位で、小綺麗な家が建てられた）をはるかに越えた額が銀行にあったし、数ヵ所の土地や家作も得た。

仕事上の交際以外には冷淡で、数少い親類達も何時とはなく離れて行き、孤独ではあったが、この夫婦は仲が良かった。そして、一人ッ子の吾郎を溺愛したのである。

母は父の家へ出入りしていた経師屋（きょうじや）の娘で、父は自分の処世に苦もなく従うだろう性格を見込み、痩せて小さな、顔立ちも平凡な、この娘をえらんだのだ。二人の新婚生活は、毎日、豆腐の汁を飽くことなく三度の食事に添えることによって始められた。

結婚後五年目に吾郎が生れた。諦めかけていただけに喜びも大きく、夫婦は、彼等にとって最も貴重な財産を少しの風にも当てまいと気を配った。

ことに母親の律には度を越えた潔癖さがあり、吾郎に食べさせる野菜なども神経質に何度も熱湯をかけて調理しなくては気が済まず、近辺の駄菓子屋などへ小遣いを持たせてやることなどはもっての他で、町内に散在する長屋の子供達……活力に満ち泥にまみれて遊び廻っている子供達

との交際も許さなかった。

もともと、ひ弱に生れた吾郎は、肉体にも、精神にも、そのひ弱さを増大させつつ、温室の暖気と清潔な空気に包まれ、やんわりと育ち上っていった。

下町の職人の家に生れた律は、庶民の暮しには似合わぬ、こうした生活を保持する経済力にあこがれ、強く、これを得ることを念願していたのだ。

昭和五年に、父親の重吉は会社の汚職事件に巻きこまれて辞職した。川崎にある会社の工場の争議事件が一緒になり、会社側でも、何とか処置をとらなくてはならず、重吉は、うまく立廻ったつもりだったが数人の同僚と共に退職を勧告された。退職金は予想以上に出た。

それからの重吉の毎日は、財産の増加計画と、吾郎の教育に向けられた。

吾郎には、何も彼も最上等の衣類、学用品、玩具があたえられた。

或とき両親の留守中に、兼という女中が焼芋を買って来て吾郎にもくれたことがある。

「おいしいなア。おいしいねえ、兼や。このオイモおいしいねえ」

そのとき、兼が、じっと、こっちを見て、

「可哀想ねえ、坊ちゃんは――」と呟やいたのを、今でも吾郎は覚えている。

それから、しばらくの間、焼芋や、ドンドン焼と称する屋台の食べもの、駄菓子などを、密かに兼が吾郎に饗応した。

或日。退職後は、芝居見物や旅行を楽しみ始めた両親が、歌舞伎座の切符の日附を一日間違えて引返して来たことがあり、焼芋饗応の現場を見つけられてしまった。兼は律に激しく叱りつけ

られたが、このとき、信州松代在から女中に来た兼は、たまりかねたように律へ喰ってかかったのである。

「奥様は、汚い食べものに黴菌が附いているとおっしゃいますが、チブスの予防するのでも、わざわざ黴菌を注射して、体の抵抗をつけるンでございます。わ、私は、駄菓子屋のネジリン棒や飴玉に黴菌が附いてるとすれば、奥さんがお求めなさるH堂のケーキにも黴菌が附いていると思います。今に坊ちゃんが兵隊さんにでもなんなさいましたら、他の百姓や職工上りのお仲間達と一緒に、どんな物でも召し上らんわけにはまいりませんです。そんとき、苦しむのは誰でもございません、坊ちゃんでございます」

言うだけ言わせておいて、律は冷めたく言った。

「郷里へお帰り、今夜の汽車で。お給金は今月の分を全部あげよう」

やがて世界には血なまぐさい風が吹きはじめ、日本は軍国として欧米の勢力から孤立した。飽和状態に達した日本の産業と国内に溢れる物質。それに手も出ない不景気と失業に包まれた庶民の生活——しかし、井上一家は重吉と律の緩急よろしきを得た利殖の舵とりで、いわゆる文化生活を享受していた。当時は、まだ物珍しかった電気掃除器や電気冷蔵庫を買込んだりしても気はゆるめず、重吉は吾郎の将来と日本の将来とを結び合せ、旧知の重役達を訪問しては、吾郎をM重工業に就職させる運動を始めた。

それだけに、昭和十五年の歳末となって、明春に中学を出る吾郎が、美術学校入学を申し出る

と、重吉は大いに動揺し、すぐにはねつけた。吾郎はこのときに限り、なかなかあきらめようとはせず、卒業のときが近づくにつれて執拗に美校入学をせがむのである。

重吉も律も、千人に一人、万人に一人位の成功率しかないのだからと言って、画家志望の並々でないことを説き、口を揃えて翻意させようと計った。

少年時代から画が好きだったので「うちの吾郎は趣味が良いじゃないか」などと安心していた迂闊さを今更に悔んだが、重吉も断固として承知せず、終いには吾郎の部屋の絵道具一切を持出し、放り捨ててしまった。吾郎は、精撰された栄養と、清潔な文化生活に守られた、色白のふっくりした頬に血をのぼらせて反抗した。今迄の甘えたおねだりの調子ではない。

「とにかく許さん。お父さんは先の先まで、世の中のことを見通した上で、間違いのない道をお前に歩かせようとしているんだ」

「吾郎、何です、我儘な。お父さんのおっしゃる通りになさい」

「でも、どうしても僕は、画を勉強したいんです」

「よし。じゃこの家から出て行け。お前一人でやれるものならやってみろ」

重吉は、自分の権力と財力に絶対的な自信を持つ、最後の切札を出した。ひ弱い息子の精神を見通しての上ではない。吾郎は萎れてしまった。温室咲きの花は厳しい外気に向って咲き続ける手段も勇気もなかった。重吉は満足した。

吾郎は、父親の撰んでくれた大学の入学試験に落第した。中学の成績が良かっただけに安心していた重吉は、何故、事前運動をしなかったのだと律に泣いて責められた。

やる気のない試験が受かる筈はない。父母から責められて、吾郎は発病した。

重吉も律も仰天して温室治療に熱中し、吾郎の病気も癒えた初夏の或朝のことだったが、律に連れられて病後の運動がてら墓参に出かけた息子の部屋の点検を久しぶりで行った重吉は、机の引出しを合鍵で開け、まだ封を切ってない睡眠薬の包みを発見して息を呑んだ。

日記を開いて見ると、画家になれない失望が、めんめんと書き綴られてある。吾郎は感傷的に死をもてあそんでいただけなのだが、自分の子供のことになると重吉も律も眼がくらんで狼狽し、その夜あらためて美校入学を許した。

重吉が、数日後、机の引出しから睡眠薬が消えているのを確め、太い溜息を洩らしてから間もなく、日本はアメリカとの戦争に飛込んで行った。

吾郎は志望を果したけれど、彼が自分の衣類や部屋の装飾にまでも、好んで使用した緑の色……あの吹き出したばかりの緑の芽の、柔らかく明るい色彩感覚を豊かに実らせるにはあまりに不適当な、あまりに苛烈な時代がやって来たのだ。

学徒動員体制実施に続いて兵役年齢が満十七歳に引上げられ、その頃から始まった本土の爆撃に、井上一家は谷中の家へ知人の戦災者を留守番に入れて、埼玉のA町へ逃げた。

翌年の春に、吾郎は、その疎開先の町から入営し、山陰地方の部隊に配属されて行った。

間もなく東京の家は焼けた。折悪く上京していた重吉は、庭へ飛び出すとたんに焼夷弾の直撃を受けて、呆っ気なく死んでしまったのである。

本郷に近い崖上にあった吾郎の家の附近には、爆弾や焼夷弾が固って落ちてきたのだという。律は、その年の晩夏に、山陰地方の基地の防空濠掘りで、痩せおとろえて復員してきた息子を、埼玉の家に迎えた。

吾郎は、殆ど死の一歩か二歩前だったと言ってもよかった。温室咲きの花は、かつて女中の兼が言ったより何層倍かの荒々しい黴菌を含んだ外の風に半年足らず当っただけで、もう一とたまりもなかったのだ。

吾郎の体力は、しぶとく回復しなかった。

律は息子の看病に専念したが、インフレの波濤と闇物資の横行の中では、彼女の経済観も戸惑いすることが多かった。律は、頼り切っていた良人の死と息子の重病の前に、必死で、戦前の良き時代に蓄えたものに縋りつき、高価な医薬を探し出すことで精一杯だった。

銀行にあった十万余の金は封鎖にあったし、もはや行先頼りになるものではない。その大半が下町に在った不動産の殆どは、灰になっていた。残された土地を活用し、何とか財産を増やしていくことも律は律なりに考えないではなかったが、彼女自身急激なショックを受け、幼時からの偏食癖で脂ッ気のない体力も気力も、一度に叩きのめされてしまったのだ。四十八歳の髪の毛は白くなっていた。

重吉の死後、出入りするようになった重吉の弟の平次郎に何かと律は用事を頼むようになった。吾郎のことだけでも手に余るほどだったのだ。

吾郎が、ようやく床から起き出せるようになったのは、昭和二十一年の夏のことだったが、縁先から外の田園風景を、ぼんやり眺めていると、視界の、自分の眼から一米ほど手前のところだけが、霞に包まれたように見えなくなっているのに気がついた。

このときは、すぐに元通りになったのだが、そのうちに徴候はハッキリしたものになり、売薬でも癒らないので母親と共に上京し、下谷の、眼科では著名な病院で診て貰った。

病名は〝飛蚊症〟というのであり、眼球の網膜血管が腫れ上っていて、何かのときにこれが破れると失明する、と軍隊帰りの若い医師に宣告された。勿論、律だけに知らされたのである。

驚愕と悲嘆と、息子に知られまいとする忍耐とで、律は苦悶にさいなまれた。

何度も医者を替えてみたが診断は同じだった。

律は思い切って、東京の家の焼跡に二間ほどのバラックを建てて戻って来ると、始めに診察を受けた下谷の病院への通院に全身の期待をかけた。吾郎の栄養を充実させる為には、少しの計算もなく、土地を、物資を売り払っては飲物と薬に替えた。平次郎がこまめにやって来ては用を弁じてくれた。

律は、激動する世相の混乱の中で、ひたむきに息子の失明を防ごうと全力を振り搾った。

病状は悪化するばかりだった。

そのうちに吾郎も自分の眼病がただならないものだと感じたらしく、恐怖と不安におののき始めた。律は懸命に励ました。

「癒るとも。きっと、お母さんが癒してみせる」

言い切って細心な看病に没頭する、まるで二十年も老け込んだような母の姿を見たとき、吾郎は生れて始めて、母親に激しい愛情を覚えたものだ。

二十二年四月の或朝、吾郎は起床したとき、壁に掛けてあるルソーの風景画の複製が殆ど見えなくなっている自分の眼に気がついた。

夢中で洗眼したり薬をさしたりしてみたが、薄く白いゴムの膜を眼一杯に粘りつけられたようで、その膜の底に微かにルソーの画の色彩が滲んでいるだけなのである。

「お母さん。お母さん!!　ぼ、僕、め、めくらになっちまった」

吾郎は、狂ったように泣き喚いた。

吾郎は失明した。

春から夏にかけて四回の手術をしたが、駄目だった。〝網膜静脈周囲炎〟という眼病は、腫れ上った例の血管が遂に破裂した為、網膜の外側の脈絡膜（光線を調節し、眼球に栄養を与える機能を持つ）と網膜（視覚を起させる機能を持つ）が離れてしまったのである。この眼病は、腎臓炎、糖尿病、結核などが主な原因になっているのだという。

「この眼病はね、国や民族の力が消耗したとき、体力の弱い人達の間に、よく起る眼病なんです」

と、院長は言った。

まさに、敗戦の傷痕の中から、栄養と医学の効能を探り出すことは困難だった。

三度目の手術後に、吾郎の両眼は、緑内障（右）白内障（左）を併発した。俗に青そこひ、白

そこひと呼ばれる眼病で、眼中の硝子体や水晶体が濁ったり膿んだりしてくるのである。失明への恐怖の凄まじさから極度の睡眠不足になり、昂奮も激しく、それが誘因となったのであろう。

痛みも強烈で、それに耐えかねて体を動かすと出血がひどくなり、病状は絶望的になった。最後の手術が行われた。電気メスで眼底に穴をあけ、網膜と脈絡膜の間にある淋巴液を除いて二つの膜をくっつけようとはかった。この手術も効果がなかった。

退院して数ヵ月ぶりに、谷中の家へ戻った夜は打ちひしがれて眠ることも出来ず、床に横たわったまま、吾郎は、焦点を失った瞳を空間に見張って青い蚊帳の匂いを嗅ぎつづけた。

夜が明けかかる頃、隣室の母親が、歯を喰いしばって泣き咽ぶのを聞いた。

2

「退院して家へ帰ったとき、僕は、机の上の絵具箱を障ってみたんです。埃が一杯つもっていました。あんなに綺麗好きで潔癖だった母も、もう家を掃除する気力がなかったんですね。僕のことだけに、自分の全部を投出して、集中して……」

「中途失明だけに、おッ母さんも諦め切れなかったろうな」と、稲垣邦男は呟いた。

あれから吾郎は、稲垣にみちびかれて、浅草の、其辺は奇蹟的に焼け残った一角にある稲垣の下宿へ連れられて来たのだ。

失明以来、その日は吾郎にとって始めての単独外出だった。発作的に自暴自棄となり無茶苦茶に街を歩いてやろうと家を飛び出し、上野公園から広小路の闇市の雑踏へまぎれ込んだ。

突き飛ばされ、転倒し、通行人の笑声と憐れみとを浴びながら、体中が綿のようになるまで歩き続けたのだ。何処をどう歩いたのか覚えてない。

ふと気がつくと、虚脱したような耳に、吾郎は国電の響音を聞き、その音に手繰り寄せられるように近づいた。駅へ近づくにつれ、彼の聴覚は、この駅が、病院へ通っていたときに乗り降りした駅だということに気がついた。そして吾郎は、プラットホームへ昇って行ったのである。

荒れ果てた庭に囲まれたバラックの家には、もう母親の律はいなかった。まだ二ヵ月とたたない昨年の暮の冬の冷雨が二日ほど降り続いた翌朝、五十歳の律は精魂尽きて死んだ。

近所の人に頼み医者を呼ぼうと、両手を掻き廻すように、泣き叫び、夢中でステッキを探りに行きかける息子の体を、床の上に伸び上って引止めた律は、

「無駄なことをするんじゃない」と叱った。

「だって、お母さん……」

「無駄だよ、もう……」と、弱々しい律の声がうるみ、

「生きられるだけ生きていておくれ。でも、無理にとは言わない。あ、私が、お前と一緒にのもうと思っていた薬が、茶箪笥の、右の引出しに入ってる」

律は、急に、狂おしく吾郎の手を、顔を、体を撫で廻した。その力も喘ぐ呼吸と共に弱まると、

「鼠入らずに、配給の、お餅が入ってるからね」

こう言ったきり、もう口をきいてはくれなかった。

盲人の弟を持つという稲垣への信頼から、吾郎は、この数十日間、一人ぼっちで闇を探っていた淋しさが、一度に吹きこぼれ、全身で訴え、嘆き、そして泣いた。

稲垣は、煙草屋の二階の自室で、熱い茶をいれ、進駐軍のチョコレートなどをすすめてくれた。

「俺は相撲とりでね。これはひいきの人から貰ったんだよ」

語り疲れた吾郎が、再び、孤独と絶望の中へ身を退いたとき、稲垣は、叔父に当る煙草屋の主人から借りてきた湯タンポを蒲団に入れ、吾郎を寝かしつけてやった。

稲垣は、この春に入幕したばかりの〝松風〟という渾名を持つ力士だった。ふだんは東両国にある親方の部屋に寝泊りしているのだが、子供の無い叔父夫婦が部屋を明けておいてくれ、たまには泊りに来てくれと言うのだそうだ。

稲垣も、この戦争で、両親と盲目の弟を失っていたのである。

両親は、盲目の次男を抱えて言問橋の方角へ逃げたらしく、その橋上で死亡したのだろうという。死体も遺品も、復員してから必死に探し廻った稲垣の前に現われてはこなかった。

稲垣は、翌朝になって、そんなことを少しずつ吾郎に話して聞かせた。

朝から冷めたい風が窓ガラスを鳴らしていたけれども、晴れ上った空から射し込む陽射しは四

帖半の部屋一杯に溢れているのが、吾郎の指先や耳たぶに感じられた。

昨日が春場所の千秋楽で明日一杯は休養出来る、明後日からは巡業に出るのだ、と稲垣は語って、「あんたに見せたいものがある」と、押入れへ首を突込み、何か持出して来た。

「一寸障ってごらん」

稲垣は吾郎の人差指をつまみ、そっと引張った。指に何か障った。紙だった。

「わかるかい？　昨夜、あんたは、まだ点字の本を障ったことがないと言ってたっけね」

「あ……」

「わかったかい？」

「て、点字ですか？　これが……」

吾郎は、その分厚い本を抱え込み、指を震わせながら、すべすべした厚い紙面を埋めている小さな粒の突起の上を夢中でまさぐった。

「弟の形見なんだ、その点字本は。小川未明って人の童話を、俺が読んでやり、弟が自分で打ったんだよ。この本一冊こしらえるのに、一年もかかったっけ」

この点字本は、稲垣の父親の知人の勤め先の女学校の倉庫へ疎開させておいた荷物の中に、点字器と共に入っていたのだと説明されたが、吾郎は失明以来味ったこともない感動に浸って声も出なかった。

だが、紙を埋めた点字の海の前で、吾郎の指は玩具の舟に過ぎない。

「よ、読めるんでしょうか？　本当に……」

「読めるさ」と、稲垣は間髪を入れずに応じてきた。それは自信に満ち、力のこもった明るい声だった。

「先天盲の弟さえ読んだんだ、二十を越してから失明したあんたに読めねえ筈はないよ。そうだろう？　そう思わないか？　そりゃ馴れないことをやるのは苦しくて、辛らいもんだよ。だけど、本が読みたけりゃまず読まなくちゃならないんだ。読む為には、この体も頭の中も、少しは痛めなきゃモノになりゃしねえんだからな。そうだろう？」

「……」

「読みたいかい。読むかね？」

迸しるように吾郎は叫んだ。

「読みたいです!!」

「俺は、明日一杯しか東京にいられないんだ。それまでに、点字の読み方を教えてあげるよ」

「ほ、本当ですか、稲垣さん」

「ほら……」と、稲垣は吾郎の指を持ち、点字の上へ持っていった。

「ね、これがツだ。こっちが夕だ。これがムさ。俺も点字は打てる」

急に稲垣の声が微かに震えてきて、

「弟の点字器が、あんたの役に立ってくれるなんてなア」

襖が開き、食器の触れ合う音と味噌汁の匂いが流れ込んできた。

「御飯だよ、邦ちゃん。お客さんと此処でおあがり」と、稲垣の叔母が言うのが聞えた。

3

点字は、一八二九年に、フランスの盲人ルイ・ブライユが考案したもので、世界各国が、この六点式点字を使用している。六点式というのは、縦三点、横二点の六つの音標文字の組合せによって成っているからだ。

このゴマ粒より小さく紙面に浮き出している点字を、指先の皮膚で読むというのは、吾郎のように肉体や精神の機能が常人の生活の上に固まってしまってからの中途失明者にとって、始めのうちは、失望と悲嘆のくり返しに過ぎなかった。

しかし、ぽつねんと一人で家の中に蹲まり、死ぬことばかり考え続けていた毎日に比べれば、ともかく吾郎は、点字本を指で探求するという〝目的〟を獲得したのである。

あの日、徹夜で「アイウエオ……」四十六文字の一覧表をつくり、読み方を教えてくれ、点字器の使い方を指導してくれた稲垣は、九州の巡業に旅立って行ったが、

「まず点字を覚えてから、後のことは二人で考えてみようじゃないか。失明者として飯を喰っていけるだけのことは、どうしても身につけなくちゃいけないしね」

「按摩になれっていうことですか？」

「現在のところ、失明者が自活する為には、そいつを覚えるより手はねえんだ。俺の弟も、死ぬまで両親の世話になってはいたけど、技術だけはチャンと身に附けていたよ」

しゅんとなった吾郎に、稲垣は言った。

「弟は、よく言ってたっけ。盲人にとって、眼が見えるようにならない限りは本当の幸福なんぞあるもんじゃない、ってね。だが新しい点字本を苦労して読んでいるときの、あいつの頬ッぺたには、パーッと血がのぼってきて、見えない白い眼が、こう大きく拡がってきてな、そのときだけは嬉しそうだった。俺が、あんたを此処へ連れて来たのも、その弟の姿を、まだ昨日のことのように覚えているからだよ。実を言うとねえ、あのとき、俺、ほんとの一時だったが、線路へ降りて行くあんたを、見ていて知らん顔をしてたほうが、いいんじゃないかと、そう思ったんだよ」

四十六文字の一覧表を探っては、また点字本の粒を拾う、このくり返しに全神経を指先に集中させていると始めのうちは三十分も保たなかった。地の底へめり込むような疲労に襲われるのだ。

また、一寸でも指先を離すと、今迄拾ってきた粒々の位置がわからなくなってしまい、始めからまた探り直すことだけでも、強い忍耐を必要とした。

そして、こんなたどたどしい馬鹿らしい真似をしなくては、一行も一字も本を読めなくなってしまったのだ、と思うと、吾郎は、誰もいないバラックの部屋中をのたうち廻り、号泣し、点字本も点字器も庭先へ放り出してしまったこともある。

母親が残していった劇薬の包を取り出し、何時間も石みたいに凝然と坐り込んでしまうことも

あったが……そのうちに、劇薬の包を握った彼の掌に、点字本の、あの粒々の感触がよみがえってくるのだった。そのたびに吾郎は、また薬の包をしまい込み点字本に取りついていくのである。

しかし吾郎は〝盲人の智恵〟を少しずつ体得していった。

たとえば、火の気のない全く冷え切った夜に点字を探ることは指の感覚が麻痺して殆ど不可能になることや、暖い陽射しを浴びて探っていても、中途で便所に立ち手を洗ってくると、もう指先の感覚が狂っていることや、指先を暖めていても点字本の紙面が冷えていれば、やはり同じ結果になるということなどを発見した。吾郎は太陽が部屋と自分の体を暖めてくれるまで、点字本を抱いて床にもぐっていることにした。

盲人の生活に火は禁物だった。吾郎は三度の食事を、坂を降りて二丁ほど離れた電車通りにある外食券食堂で済ますことにしていた。

死んだ重吉の弟の平次郎は酒の業界新聞の編輯長をしているということだが、食料の買出しや減る一方の不動産売買の相談や交渉をしたり、律の相談相手になっていた。律も、しっかりした女なのだが、あの災難の渦中に会っては、ただもう眼が廻るような思いがするばかりで、厭々ながらも平次郎を頼らないわけにはいかなくなっていたのだ。

平次郎は当初の信用を義姉に植えつけたとみると、巧みに立廻って頭をハネ出した。平次郎が出入りするようになってから駒込神明町の高台にある地所と下谷西町の地所を売払ったのだが、中へ入って平次郎は相当の利益を得ていたし、その上に律から礼金を貰うのだからこたえられな

い。律は、もう息子の看病に夢中で、あれだけ隙のない律が、終いにはもう平次郎の言うなりになってしまっていたものだ。

律の死後、平次郎の足は急に遠退いた。

たまに現われても事務的に用を済ませるだけで、愛想のよかった叔父の声までが冷やかなものに感じられ、吾郎は不安になった。

貯金通帳や不動産の書類なども、平次郎が預っているのだ。吾郎の身の廻りは、平次郎の差図で坂口富江という中年の女が三日目ごとに来ては世話してくれる。

手で探らずには何事も確められない習慣がつくと、吾郎の神経は厭でも研ぎすまされ、疑惑が深められていく。

或時、平次郎が、

「まあ、君も災難続きで、疲れているんだから、当分はゆっくりと静養するんだねえ」と話しかけたとき、吾郎は意地悪く切出してみた。

「僕、一人じゃ、とても不自由でやりきれないんです。叔父さんの家へ引取ってもらえないかな」

平次郎は沈黙した。

「一体これから先、僕は、どれだけ生きて行かれるんですか?」と重ねて突込むと、

「そりゃ、吾郎ちゃん、どういうことかね?」

「売れるものが、どの位残ってるかってことです」

「そりゃ、君……」と、平次郎の声が、押しつけるように重くなり、
「今までも私は、君や死んだ母さんの為に、身を粉にしてだね、やれるだけやってきたんだからね」
などと見当の違うことを言い始めた。
「そりゃ、よく分ってます」
「疑ってるのかい、私を。それなら預ってるものを此処へ持って来てもいいぜ」
早口に切返してきたが、今度は吾郎が黙ってしまった。「どうにでもなっちまえ」と面倒臭くなり、また〝死〟の影を追い始めたからだ。
「私のしてあげたことを、おろそかに思って貰っちゃ困るな。この忙しい世の中に、私は、この家のことで随分骨を折ってるんだからねえ」
そんな捨台詞で帰った切り、もう二ヵ月ほどになるが、平次郎は姿を見せなかった。
毎月の費用は坂口富江が届けて来た。
坂口は無口な女で、事務的に用を足しては帰って行く。叔父の事務所で働いている、ということだけしか分らなかったが、吾郎も、この女には殆ど口をきかなかった。常人と口をきくことは、盲人としての劣等感がつのるばかりで、哀しくなるからである。むしろ坂口の無口が有難いほどだった。
二ヵ月もかかって、吾郎の指先は、ようやく〔小川未明童話集〕の中の〝小さな針の音〟という一篇を読み上げることが出来た。眼で読めば恐らく十分とかからずに読める短篇である。

田舎の小学校の青年教師が上京して、立身出世をし、大会社の重役になったとき、昔、小さな教え子達が送別に贈ってくれた懐中時計に巡り合う。彼が古臭い型だと思って二十年も前に売り払ったその時計は、少しも狂うことなく正しい音を刻んでいた……という童話だったが、すっかり春めいた暖い或日の夕暮れ、これを読み終えたときには、吾郎も、

「読めた。とうとう読めた」と叫び、厳しい感動に身震いした。そして、

（僕の失明は、頼まれたものでも求めたものでもない。恥でも何でもないんだから、生きるだけ生きてみよう）という気になった。

すぐに、盲学校→按摩、鍼、灸の技術習得→自活——の線が頭にきた。冬を迎えて、慌しく食を漁る昆虫の本能と同じに、吾郎は居ても立ってもいられなくなり、坂口に頼んで、平次郎を呼んで貰うと、

「そりゃ、いいことだね。全部、私が手続きしてあげるよ」

「いや。僕、自分でやります」

「馬鹿言っちゃいけない。その体で、吾郎ちゃん」

「その方がいいんですよ、叔父さん。どっちみち、一人でやってかなくちゃならないんだから」

「そりゃ、どういう意味だね？」

「とにかく、現在、僕に残されたものを持って来て下さい」

「ひどいこと言うなア。まるで私がしてあげたことが馬鹿みたいと見えるねえ。盲目になると、こうも僻み根性が出るもんかな」

平次郎は、少し疼いた良心を薄笑いで消し飛ばした。

吾郎は屈辱に耐えた。いま叔父を怒らせることが、どんなに危険なことかを知ったからである。

数日して、また平次郎がやって来た。

残されたものは、この谷中の家と土地だけで、最後のサービスだからと思い、売り払ってきたと平次郎は告げた。後で近所の人に聞いたことだが、叔父は吾郎が食堂へ出かけた留守に、二度も買手の人を連れて来て土地を見せていたそうである。

盲人だからここまでも馬鹿にされなくてはならないのか、という口惜しさと怒りで、吾郎は夢中になり、叔父に飛びかかった。

「何するんだ!!」

「泥棒!!　叔父さんは、泥棒と同じだ」

「何イ、盲目の癖に生意気言うな!!」

「盲目だから馬鹿にするのか!!　盲目だから……」

体中で武者振りついたが、一度躱されると、もう見当が狂って駄目だった。

顔中を歪め、喚きながら、吾郎は両手で空を引掻き、畳の上を転げ廻った。

吾郎の体が茶箪笥にぶつかり、中の器物が音をたてた。吾郎は埃をかぶっている茶碗や小鉢を摑み出し、

「畜生。畜生……」

罵しりながら、やみくもにあたり一面へ投げつけ始めた。

結局、吾郎には三十五万円という現金が残されただけだ。まだ浅草の蔵前や下谷の二長町に残されていると思っていた土地も何時の間にか売り払われていたし、この谷中の地所も七十坪はある。あとで食堂の主人に聞くと、現在この辺りの地価は坪一万円は確かだと言う。とすれば、叔父は、坪五千円で売り払ってきたことになる。たまりかねて、吾郎は主人に平次郎の家に行って貰ったが、証書もキチンとしていて平次郎の言うことは隙がなく、この上は裁判に持込むより仕方はないだろう、と主人は気の毒そうに言った。そして、食堂の主人も近所の人もこれ以上、吾郎の味方になって面倒をみることは避けたい様子が感じられた。

屈辱と絶望とで夜も眠れず、吾郎は、憔悴し切ってしまった。吾郎は、触覚、聴覚、臭覚の三つを失っても、視覚……眼が欲しいと絶叫せずにはいられなかった。

暗黒の中で、自分の体と、手と足が探れる範囲のものしか盲人には分らない。そのもどかしさ苦しさは、成人してからの失明だけに、二重にも三重にも吾郎の神経や肉体を圧倒した。吾郎は、また劇薬の包を取出してみた。この中のものを呑み込んでしまえば、何も彼も片がついてしまうと思うのだが、あのときのように国電の響音を聞いて、無心にふらりと誘われる機会をとらえるのは難しかった。吾郎は「死」を望みながら頑強に抵抗する肉体の生命力につくづくと驚き、そして嘆いた。「死のう」と包を開きかけても、手の動きはピタリと止り、根強く躊躇するのである。自殺する人々は、どうしてあそこまでやれるのだろうか。こんな目に会いながら、俺には自殺する一片の強さも残されていないのだろうか。昼も夜も判らなくなり、吾郎は床にもぐ

りこんだまま、今度は何も食べず、ただ体力の消耗を待ってみた。だが、餓死は服毒自殺よりも尚、難しいものだということを、厭でも知らされなくてはならなかった。

稲垣邦男が帰京して、吾郎の家を訪れた。話を聞いて稲垣は激怒した。

「よし。あんたの叔父さんに会ってみよう」とすぐに出かけて行ったが、その夜遅く、戻って来て、

「裁判にしても容易じゃねえ。でも、やってみるかね？」

「もう、諦めてるんです。眼が見えなくちゃどうにもならない」

「月並ななぐさめ方はしない。だが、眼の代りに手や足や耳も、今までの二倍も三倍もの働きが努力次第で出来るってことも信じてもらいたいな」

「稲垣さんは、盲人じゃない。だから、そんなことを気楽に言えるんです」

吾郎はヒステリックに突ッかかった。

稲垣は一寸黙っていたが、やがて静かに、

「これからは眼開きの人に、一歩でも近づくことだけを考えてくれよ。世の中は盲人じゃなく眼開きの人間が造っている世の中だからね」

稲垣は無駄なことは言わなかった。彼は春場所の成績が悪く、また幕内から滑り落ちて十両に転落したと言ったが、半月後に控えた夏場所の激しい稽古の間を縫って、吾郎の盲学校入学に奔走した。その結果、入学期も過ぎたことだが学校側で了解してくれ、入学出来ることになった。

小さなバラックなどは無視して、土地を買取った人の新築工事が始まると、稲垣の叔父が来

て、吾郎の手を曳き、さっさと、自分の家へ引越させてしまった。

「私の処へ何故知らせなかったんですよ。今更言ってもだが、あんたの叔父さんがひどいことをする前に、もう少し何とか手が打てたかも知れない。ほんとに口惜しいねえ」

そんなことを、稲垣の叔父は吾郎に言った。

稲垣は夏場所を勝越し、再入幕の見込みがついた。

「俺は力もないし、体も小さいから勝つのに苦労するよ。だが、あの狭い土俵という制限があるので、どうやらやれる」

ラジオで聞いた稲垣の相撲ぶりは、目まぐるしい動きで、何時も猛然と相手に立向う有様が、吾郎を昂奮させた。場所中、吾郎は神に祈りたい気持で稲垣の勝利を渇望した。

稲垣が北海道巡業に出発する日も近い或日。吾郎は、稲垣に附添われて、文京区の、飯田橋の近くにある都立の盲学校へ入学した。学校に隣接している寄宿へ入ることになり、稲垣はリヤカーに荷物と吾郎を乗せ、軽々と、これを押して行った。

「学校の月謝は安いんだが、寄宿費を含めて、毎月三千円位だそうだ。金は叔父が預ってる。今度は大丈夫だ。あの金を使い果す迄に、自活出来るようになるんだ。いいかい、その意気込みで、必死に、必死になってくれよ、吾郎さん」

別れるときに、そう言った稲垣の声には、切ないばかりの、〝祈り〟がこめられていた。

彼は、自分が力になる、などという言葉を決して吾郎にかけなかった。

やがて吾郎は、東京都から〝身体障害者手帖〟を交付された。

戦後、憲法改正が公布されて以来、アメリカ側の指導によって〝社会福祉法〟も着々と改正、実施されるようになり、盲人の教育も、従来は小学三年程度までを義務教育としていたのが、一般の六三制実施と共に、これと同じに引上げられてきている。

吾郎は、国鉄の運賃減額、其他の特典を得る資格を与えられ、白塗りの鉄製の杖も貰った。この杖は管になっていて四ツ折りに畳み、ポケットへ入れることも出来る。拡げると、細い鉄管の中を通っているゴム紐の弾力で、半ば自然に管と管が密着し、一本の杖になるのだった。

理療師

1

「何と申しても駄目。永井さんは神社の裏だろ。いくらお前さんが慣れなくてもさ、往復二十分で充分。治療が三十分で合計一時間さ」

治療所の主人は、文字盤が浮彫りになっている盲人用時計に指を当て辛辣に言う。

「もう二時間にもなるぜ。大体、お前さん、時間がかかりすぎるよ。ヤミで稼いだんだろ？」

吾郎は反撥しようと首を上げたが、やめた。言っても無駄だったし、言えば、主人の盲人特有の疑惑を深めるばかりである。吾郎が黙り込んだまま、やり切れない苦笑を洩らすと、

「おや？　……笑ったね？　何が可笑しい。お前さん、笑ったね。笑ったじゃないか」

主人は忽ち感づいて喚きたてた。声もない微かな笑いを、どうして感じとれるものか。吾郎も失明七年になるけれども、前後の会話の雰囲気から、たまに相手の微笑を感じとることが、やっと此頃出来るようになった。しかし、この治療所の主人のように、五十何年も盲人生活を送って来ている先天盲人特有の記憶とカンの良さには、吾郎も驚くことがある。

「何処で、ヤミをして来た？　えッ、言いなさい」

主人が余り執拗に問い詰めてくるので、

「凝りがほぐれるまで揉んでいただけです。神経痛で、全身が凝っていたもんですから」

ポカッと唇を開けたままの顔を突き出し、唾を飛ばし、厭な口臭を吹きかけながら、主人は、

「按摩だって商売だよ。数でこなすようにしなけりゃ、おまんまが食えやしないぜェ」

「すみません」

謝るより仕方がない。住居と食を貰い、働きながら、四年間の盲学校で覚えた技術を実習させて貰っているのだから……。

四年前に谷中の家と土地を捨てて得た三十五万円は、まだ十数万円残っていて、稲垣の叔父が預っていてくれる。この金は吾郎にとって最後の切札と言ってもよい。習得した技術と、この金以外に頼るものはない。

吾郎は二百円の治療代を差出し、すぐに、その場で主人から八十円貰った。

昭和二十九年のこの春に、盲学校を卒業し、目黒の自由ヶ丘にある、この治療所へ住込みで働

くようになってから、もう半年余りになる。

〝山口治療所〟と看板をかけたこの家には、吾郎の他の理療師は住込みが一人、通勤が三人ほどいてなかなか繁昌している。

住込みの場合、客から貰う代金は四分六の割で分けられ、主人が取る六割のうちに食費も含まれているわけだった。

吾郎が、居室になっている二階の六帖へ入って行くと、仲間の理療師達が一仕事済ませて休憩していた。

彼等の垢じみた脂臭い体臭が、ムッと部屋一杯にたちこめている。

独身の失明者は肉体の操作だけで精一杯だし、常人に交じって銭湯へ行くことの苦痛は、なるべく避けたくなるし、洗濯も勢い面倒になるので、何時か不潔さに馴れてしまうのだった。

「井上さん、こっちへ来ない？　お菓子あるわよ」

白濁した瞳を向けて、甘えるように言う鳥飼キミに続いて、

「ひゃアー。凄え凄え」と、調子外れに、がなりたてる三井や、「いのうえさん。こっちへこないイ」と、キミの口真似をして卑しく笑う中年の片岡や「こっちィ来て、抱っこしてよゥ」と、臆面もなく騒ぎたてる若い西川の声が、次々に吾郎へ浴びせかけられた。

「うるさいねェ。黙って黙って!!」とキミは、すーっと立って来て、躊躇いもなく吾郎の手を摑んだ。この家の間取りには、手足も耳も慣れ切っているので、主人の細君だけを除いた全部の盲人達は、常人と同じに起居振舞をする。

キミは小肥りの体を擦り寄せ、吾郎を引張り廊下へ連れ出すと、息を弾ませて囁いた。
「今夜、私の下宿へ来ない？　御馳走するからさ」
「勉強があるんだ、今夜は」
「冷めたいんだね、あんた何よ、白ばっくれて……」
いきなり、キミは吾郎の腿を抓った。
「そんなとこでワンワンの真似しちゃ厭よウ」
「井上さんは固いから、おキミちゃんの歯が立たねえってさ」
「代りに俺じゃアどうかい？」
はやしたてる三人の盲人達は、キミと吾郎の、あのことをまだ知らないらしい。
暇さえあれば点字本に噛りついている吾郎は、理療師達の笑いものにさえなっている。
盲人の悲惨な歴史と現実に押し潰され、たとえ盲学校を出たにしても、一たん常人の為に造られた社会の片隅で、厳しい生活に直面すると、殆どの盲人達は絶望と諦めの底に転落してしまう。あとは食慾と性慾以外に何の慰楽も生甲斐もなくなるのだ。吾郎も、そうでなかったとは言えない。一度切りだったが、鳥飼キミの誘惑に抗し切れなくなったのも、そのためだった。
廊下に取付けてある呼鈴が三つ鳴った。キミの番である。キミは舌打ちして「今夜来なかったら殺すわよ」と囁き、部屋から白衣を取って来て羽織り、トントンと階段を降りて行った。
「ああァ、女盲目は得だよなア」
「凄え道具を持ってるからな。チップもたまるさ」

盲人達は騒ぎながら、舌を鳴らして旺盛に菓子を頬張り、賭事をやり出した。これは盲人独特のもので、長い綱に人差指ほどの竹のプレートを六本つけ、これを操つりながら、眼で見えなくても、お互いに勝負を確認出来る方法で金や菓子を賭けるのである。このルウルは実に複雑なもので盲人の恐るべき記憶力と強い疑惑の上に仕組まれたものだった。

繁雑な暗算でする勝負けの計算方法は、吾郎には複雑すぎて、さっぱり分らないが、先天盲の人達の記憶力は生れたときから、何事も記憶していなくてはやっていけないという訓練を積んでいるので、中途失明の、書く記すという習慣がまだ残っている吾郎などは、到底およぶものではなかった。

吾郎は、廊下の窓際に立ち、冷んやりと吹き込む微風に、高く澄んだ秋空の青さを知った。

この辺りは駅附近の商店街を離れた静かな住宅地で、近くの寺院の境内にある幼稚園から、オルガンの音が、ゆっくり聞えている。

久しぶりで、画が描きたい、と思うままに絵具を塗ってみたい慾望に駆られ、色と形への郷愁に耐え切れず、そして急死した稲垣邦男への追慕が、急に胸へ衝き上ってきた。

（母さんも、稲垣さんも、どうして、僕にとって大切な人ばかり死んじまうんだ。僕だけがどうして生き残らなくちゃならないんだ）

堪えかねて、吾郎は廊下に蹲まり、嗚咽し始めた。

2

稲垣が長野の巡業先で、力士には多い急性盲腸炎になり、急死したのは、まだ吾郎が在学中の去年の秋だった。吾郎が、あの煙草屋の二階へ馳けつけたときには、稲垣の遺骨は、もう何も語らなかったのだ。

巡業先での医者の誤診で二度も下剤をかけた為に、盲腸が破裂して、膿が腹中に溢れ出し、手術したときには手のほどこしようがなかったという。

稲垣は、盲学校へ入ってからの吾郎の変化を注意深く見守ってくれた。入学して、一年もすると、吾郎の顔には生き生きと血がのぼってきた。

「学校にいるうちに体を鍛えとけよ、吾郎さん。これから先、あんたの生きていく道に必要な土台は、全部、学校にいるうちに築いとくんだぜ」

稲垣は、よくそう言ってくれたものだ。

盲学校は明るかった。その底には、生徒の深い哀しみを堪えながらも、暖い協力と純心な労わりに満ちていた。

何よりも盲人達は、多くの仲間を其処に見出す。其処には盲人の為だけに造られた社会がある。だから盲学校へ入ると盲人達は〝死〟を忘れる。そして何時までも盲学校に残っていたくなる。盲人として生れ、家族に労わられ家に閉じ込められ、甘やかされて育った子供達も、学校で

は友達と安全な運動場を見出し、喜々として、その子供らしい明るさを取り戻すのだ。そこに悲劇の第一歩があるのだとも言えよう。

盲人達は、どの道、常人の社会へ飛込まなくてはならないことをよく知っている。そして絶えず、将来への不安と恐怖を、じっと胸に秘めている。

たまたま訪れる常人の参観者が、校舎や校庭を、全く常人と変りないほどに歩き廻り、唄い、運動し、遊んでいる生徒を見て、

「盲目の社会なんてものは案外、明るいもんじゃないか。慣れるということは恐ろしいもんだねえ」

などと洩らしたりするが、常人は、生徒達が、この特殊な島の中から現実の海へ泳ぎ出て行った後のことは少しも分っていないと言ってもよい。

常人には〝眼〟がなくなったという実感は決して摑めない。五体そろっていれば〝眼〟をつかっているときに他の体の器官が休養していることに気がつかないのだ。

〝眼〟を失ったが為に、全身の機能をあげて〝眼〟の代役をさせなくてはならない、その体力と気力の消耗は盲人の知能をみるみるうちに低下させずには置かない。あとは只、動物的な本能が残されるだけなのだ。

しかし、吾郎は、この苦痛の中から人間としての力を必死に取戻し、常人に劣らない仕事をやった盲人達のことも知った。

塙保己一やヘレン・ケラーや宮城道雄などという著名な人ばかりでなく、音楽や盲学校の教

師、点字図書館の館長。そして、それぞれの目的に向って、常人と共に高等教育を受けている人々がいることは、吾郎を力づけた。微かな希望の灯を自分に点じることが出来たのである。

吾郎は、はじめ高等部へ編入されたのち、専攻科で按摩、鍼灸の技術を習得した。

生徒は小学部から専攻部まで二百人ほどである。特殊教育だけに一級の定員は十人前後だ。吾郎の担任教師は友部房子という中年の女性だった。既婚で子供もいるということだった。

吾郎が物に憑かれたように点字の習熟に励むのをみて、友部先生は言った。

「井上さん。あなた、大学まで行ってみる気はありませんか？」

「盲目大学ってのがあるんですか」

吾郎はトゲトゲしく言い返した。丁度、鍼灸解剖学の点字書に引擦り廻されて精も根も尽き果てていたときだったのだ。

「こんなこと言って御免」と、友部先生は詫びたが、

「でも、あんたならやれるような気がしたから」

「大学へ行ってどうなるんです？　どうせ僕達は、按摩になるより仕方がないじゃないですか」

「でも、あなたみたいな、成人してからの失明者は大切だと思うな。失明者の社会については、昔からね、放任と慈善と、この二つの時代しかなかったんだけど、戦後になって初めて教育の時代が来たのよ。来たって言い切るのはまだどうかと思うけど、一般人と同じ、義務教育が与えられたし、この学校だって慈善経営から都立の学校になったんですものね。私ねえ、進駐軍が来て

憲法まで変ったけど……他のことは知らない。でも、衛生と社会福祉については、アメリカのしてくれたことに感謝してるわ」

「誰か、外国の盲人が言ったそうですね。月を見る眼はいらないが、月を撫でる手が慾しいって。僕ァ、社会福祉も何も要りません。先生、僕は、ただ眼がほしいんです」

そのとき吾郎は点字器を叩きつけ、一人残っていた教室を飛び出した。

「あッ。危いわよ、井上さん」

友部先生が叫んだが間に合わず、吾郎の昂奮した神経は平常の感覚を混乱させ、もろに教室の柱に打ち当り、不様に吾郎は引っくり返った。

盲学校では食事の運搬も生徒にやらせるし、身の廻り一切をする訓練も行う。吾郎は、初めて食器を抱えた二十四歳の自分が、寮母のポンポンと手を打つ音に誘導され、校舎の廊下を渡ったときの切なさを忘れることは出来ない。

小学部の子供達の中で、階段から転落する者が、かなりいた。盲人の殆どは貧困な家庭……つまり二階のあるような家に住んだことがなく、もう一つには家庭が甘やかして訓練をしないので、階段の昇降感覚に、全く馴れていない為だという。

寮母も予算の関係で、二十人に一人位しか附添えない為、浴場を便所と間違えて汚したり、火傷を負ったり、お互いにぶつかり合って喧嘩になり空を引掻き廻して罵しり合う姿を見るのも稀ではなかった。

そして、この島の地理の隅々にまで、手足、耳、鼻の感覚が慣れきったとき、生徒の顔は、の

びやかで柔和なものになってくるのだった。

一年、二年と過ぎ、吾郎の点字も進歩した。あの粒の一点一点が、緑色の字になって指先の進行と共に脳裡へ浮び上ってくる。そうなると途中失明者の字の形態を見てきた者の進歩は早い。

「あら。私はねえ、井上さん、点字がいぶし銀の色になって浮んでくるわ」と、そんなことを言った生徒もいる。

だが、点字は無表情だった。その一点一点には何のニュアンスもなく、冷ややかで乾き切った感触を、指先に強要した。

そして読む者は、全身の疲労と闘わなくてはならなかった。

点字を完全にマスターしている者は、全国十八万余といわれる盲人のうち、約四割ほどしかないと言われている。学校を出た盲人でも、理療師として生活に立向うようになると、点字などは放り出してしまう者が多いのだ。

しかし、吾郎にとって、やはり点字は彼の生命になった。亜鉛板を使って大量生産される教科書以外は図書館から借出して貪ぼるように読んだ。

新宿区諏訪町にある日本点字図書館は、篤志家の寄附金、共同募金や助成金などによって経営され、昭和十五年に創立されて以来、全国の盲人に郵送貸出しを行っている。在庫の一万数千冊は、全国に散在する千数百人の奉仕者が点訳したものである。

その奉仕者達の盲人達に向けられた愛情は、点字を読む者にとって実に生々しく伝わってくるものだ。吾郎は、指先を走らせながらも、何か得体の知れない力で、全身が竦み上るほどの感動

を受け「生きよう、俺は生きるぞ」と、声に出して呟くことがあった。

文学や哲学の文字の一点一点に、奉仕者の祈りをひしひしと感ずる度合いは、点字に熟達すればするほど燃え上ってきた。書物によって精神の糧を得ることは吾郎の進む路を少しずつ押し拡げてくれたようである。

吾郎は、フランスの飛行士で、多くの航空路の開発に尽したサン・テクジペリが書いたエッセイ（人間の土地）の点訳の第一頁に記された「僕等人間に就いて、大地が万巻の書より多くを教える。理由は、大地が人間に抵抗する為めだ」という文章を指が探ったとき、はっきりと理療師のみの世界に安住はしまいと決意したのだ。

その当時は、まだ元気でいた稲垣邦男に話すと、「俺は、体が大きかったもんで、ほらスカウトってやつさ。つまり世話をやく人にすすめられて相撲になったんだけど、でも、此頃、つくづく悪い商売じゃねえって気がするんだ。五体揃った俺が、あんたの前で言うのはどうかと思うけど、とにかく、俺っていう人間が、これっぱかしも混りっけのない俺一人の力を出し切って闘う。その力が弱まれば弱まるだけ、俺の生きる社会での俺の位置は低くなる。一時だってノホホンとしちゃいられねえ、その緊張の連続が、やっと此頃好きになれたんだよ」

稲垣は中学も出ていたし、いわゆる昔の相撲とりというものの匂いを少しも感じさせないキビキビした知性を持っていた。

「じゃ僕は、盲人になったことを感謝しなきゃいけないってわけかな」

やや皮肉めいて吾郎が笑うと、稲垣は鋭く窘めた。

「そんなことがある筈はない。心にもないことを言うなよ、吾郎さん」

そのとき、吾郎は、二ヵ月ほど前に服毒自殺を果した同級の青年が点字で打った遺書の中の（盲人であるが故に良いということは、只の一つもありません）という言葉を思い出し、ガックリとうなだれた。その肩を、稲垣はしっかりと摑み、

「で、吾郎さんは大学へ行って何を勉強したいんだ？」

「社会学か、心理学をやりたいと思ってるんだけど……」

「それで、どういう方向へ進む？」

「其処まではまだ……でも……」

「勉強しているうちに道がつくよ。そうか。そりゃいいことだよ。あんたがそういう気持になったってことは有難いな」

「でも、やれるか、どうか……第一、金が続きやしないしね」

「……」

「アルバイトしてやるつもりなんだけど……」

稲垣は、ゆっくりと一言一言を稲垣の耳へ沁みこませるように言った。

「按摩と鍼とお灸と、これだけの技術があって、やれねえ筈はないよ」

丁度、稲垣は小結の位置から転落したときで、自分の相撲に自信を失っていたのだが、吾郎さんの話を聞いて急に勇気が湧いてきた、と後になって語った。

それは、吾郎が卒業する一年ほど前のことで、稲垣はラクダのシャツやネルの寝巻、靴下など

を土産に、学校へ訪ねて来てくれたのだった。彼は死ぬ迄、吾郎の現在や将来に対して、金銭の援助をほのめかしたことは一度もなかった。

稲垣は、別れの挨拶を交すとき、必ず、吾郎の手を、しっかりと握って、しばらくは放さないのが常だった。

握手は日本人の風習に、まだ溶け切ってはいないが、盲人にとっては、声だけの別れ、というのは実に淋しいものなのだ。或時、吾郎が、

「稲垣さんが握手してくれるのは、僕、嬉しい」と言ったら、稲垣は、しんみりと、

「弟もそう言ったっけ」

3

「ねえ、井上さん。何を考え込んでるのさァ。私が折角買って来たこのケーキを食べてよ」

鳥飼キミは、吾郎の膝にもたれかかり、

「お茶、注ごうか？」

「うん」

吾郎は稲垣への追想を絶ち切られて、ぼんやりと菓子に手を伸ばした。

キミの住むアパートは治療所の近くにある。キミは二歳のときに盲目のまま、捨てられたので物心がつく以前のことは何も知らない。二十五歳になるのだが知能は低く、ラジオなどを聞いて

も理解が届かないらしい。眼から心に訴える情緒と記憶と思考の前には、先天盲の人達は全く無力なのだ。しかし、按摩の技術だけは中途失明者が及びもつかないものを持っている。骨の柔らかいときからの訓練がものを言って、按摩術に指が適応した形をそなえている。親指が第一関節からクルリと反り返って、指の腹で揉むのだ。

キミは食事を外で済まし、茶だけは、アパートの管理人に頼み、魔法瓶に入れて置く。

「これは苺のショートケーキよ。ちゃんと知ってんだからね、私」

キミが自分をもてなすために、菓子屋の店先で、このケーキを買っている姿を想像すると、吾郎は急に、キミがいじらしくなった。

「ねえ、井上さん、苺って赤い色ね？　林檎と同じ色だわね。そいから日の丸の色もそうだわネ」

「そうだよ」

「ねえ、色ってどんなもの？　あんたは中途からだもの、よく知ってるわネ」

「うむ……」

「どんなものって聞いても無駄か」と、キミは笑って、吾郎の首に腕を巻きつけ、ややまくれ上って歪んだ唇を吾郎の頬に、こすりつけてきた。

「キミちゃん」

「何さ、どうして逃げるのさ」

体を退く吾郎へ、キミは顔を斜めにかしげ、両手を突き出してむしゃぶりつき、

「あんた私から逃げたいの？　ねえ、一緒になろうよ。井上さん盲目だって、私は女なんだ。眼

開きの女と同ンなじ、女なんだ。ねえ。私、一生懸命稼ぐわよ。私だって、そりゃ処女じゃないけどさ。でも、そりゃ眼開きどもが悪いんだ。学校出たときには、私だってキレイなもんだったのよ。女按摩なんて客に嬲りもンにされるだけだものね。みんな、そうだ。女だってそうだけど、男の盲目だってロクなことはありゃしない。昔っから、盲目が眼開きに敵わないってこと位、あんただって知ってる筈だ。だからさ、あんたも点字なんかに噛りつくのやめちゃいなさいッ。夫婦で按摩して、それで一日一日を何とかやってったら」と、キミは狂おし気に泣き咽び、熱い息を吹きかけて、吾郎を掻き抱いた。

按摩という職業につきまとっている軽蔑観念は、常人にも盲人にも無意識のうちに根を張っている。常人が盲人に対しての〝憐み〟には、下位の者に対する〝施し〟と優越感に裏づけられていると、盲人達は確認している。だから、理療師とし、按摩、鍼灸を行うとき、客に対して生じた知識をひけらかしたり利巧ぶったりせず、客にへりくだって、客の優越感を満足させる、というのが、理療師達の常識となっている。その結果、この仕事の地位は高まることがないのだ。

そればかりか、戦後は、常人の理療師が激増し、盲人にとって唯一のこの職場を侵蝕しはじめてきている。常人は身綺麗だし、何よりも行動が自由だから、花柳界や温泉場のように、この職業が繁昌する地域では、迎えに行って手を引いてやる手数が要らない常人の理療師が問題なく歓迎されるのだ。だから此頃では「おめくらさんは何だか気味が悪くてね」と客が言うようになってきているのも事実だった。

ようやく戦後の混乱状態が納って、盲人の教育と社会福祉が、一歩高みにのぼっても、現実は

一層厳しいものになっているのだ。

「これからは失明者の職業の範囲をひろげ、失明したから按摩にならなくちゃいけないっていう通常観念を少しでも破っていかなくちゃね。それともう一つ、理療師さんとしての地位を高めることね」

と、何時かも盲学校の友部先生が吾郎に言ったことがある。

「今、全国で大学教育を受けて、その二つの道の先導になり、これを切り開いて行こうと苦労なさってる失明者の人達は四十人ほどいるそうよ。井上さんも、そのうちの一人になってくれるわね」

卒業の日に、友部先生に言われて、吾郎は、

「なります」と答えたのだが、稲垣の死や、いざとなって直面した理療師の世界の、陰惨な動物的な生態の前に、吾郎は絶望した。そのときの捨てばちになった感情は、鳥飼キミの誘惑に、ひとたまりもなく崩れてしまったのだった。

だが、点字も捨て切れるものではない。脳裡に浮ぶ緑色の文字はまだ鮮明だった。

点字の感触と、鳥飼キミの冷んやりと滑らかな脂の浮いた肉体の感触と匂いに挟み込まれ、吾郎は呻き続けてきたのである。

その夜。キミの慾情に危うく巻き込まれかけた吾郎は、キミの手を振りもぎって逃げ帰った。自分の慾情が女の体に慣れることに吾郎は恐れた。慣れれば慣れるだけ、吾郎の指先は点字の感触を忘れて行くだろう。

翌日、暇をとって稲垣の叔父の家へ移り、数日のうち神田三崎町に間借りの部屋を見つけて引越した。背水の陣をしいた思いで吾郎は貯金の一部をおろし、二万円の権利金を払った。附添って来た稲垣の叔父が、

「部屋代は二千円で安いけれど、この三帖は北向きだし暗いねえ」

「僕には、どうってことはありませんよ」と、吾郎は苦笑した。

吾郎は大学の受験準備にとりかかるつもりだった。となると、勉強の相手になり参考書を音読してくれる協力者に来て貰わなくてはならない。

差当って、謝礼金を出してアルバイトの学生にでも来て貰うより仕方がなかった。残った貯金額を考えると、ぞッとしたが、吾郎は、とりあえず友部先生を訪ねて、自分のアルバイトの口を依頼した。

幸いに十日ほどして、秋葉原附近の治療所へ通勤の口が決まった。此処では鍼も打てる人という注文だったが、吾郎はやってみることにした。学校では自分の体や生徒同志の体を使って実習してきたのだが、客に打つのは初めてである。さすがに吾郎も胸苦しい緊張を覚えずにはいられなかった。

仕事と、本格的な受験への勉強と……夜も昼もない、精魂を擦りへらすような毎日に吾郎は巻き込まれていった。

受験

1

「そりゃアねえ。無理ってもんじゃないかな。はっきり言ってですよ。この大学でも、他の大学でもですね。これア、あなたみたいな盲人の方につくられたもんじゃない、だから……」

「盲人には大学がないんです」

「だからさ。どうも困ったなア」

G大学の教務課の事務員は、吾郎の出した入学願書を拡げもせずに封筒へ納めにかかりながら、同僚を振り返り苦笑してみせた。

吾郎には、その苦笑が、すぐに感じられた。

失明以来、吾郎の右眼は左眼よりも大きく、瞳の半分ほどが白濁している。焦点の虚ろな両眼を伏せて、青ざめたまま、吾郎は、激しい劣等感に耐えた。

「とにかく、うちでは駄目ですから、他の大学へ行ってごらんになったら」

願書の封筒が、窓口に置いた自分の手の傍に微かな音をたてるのを聞き、吾郎はたまらなくなった。

「A大もW学院も、J大も、みんな断わられたんです」
「フム。他の学校じゃ何と言ってました？」
「やはり、附添いがないと……」
「そうでしょう。あなた一人の為に、大勢の人達に迷惑をかけるわけにはいかないんですよ」
事務員は、それでも、努めて物柔らかに、
「第一、試験するときでも単独試験ってことになるし、あなたも点字器でおやりになるわけでしょう。そうしたらいちいち、それを……」
「点訳の費用は、僕が払います」
「まア、そりゃ当り前のことだけど……それにしてもですね、これから何年も、そういう面倒を続けるんでは、教授の方も、学校としても……」
「出来るだけ御迷惑をかけないようにします。ですから、何とか……」
急に、苛らだたしくなった事務員の声が止めをさした。
「もうこれ位にしといて下さい。忙しいんですから」
校門を出ると、二月の鋭い風が、この数ヵ月の間にいっそう痩せこけて憔悴した吾郎の体を吹き飛ばしそうに鳴っていた。
神田の下宿から、山の手の、この大学までは省線と都電で四十分もあればいいのだが、吾郎は単独歩行して初めてのコースだったし、二時間以上もかかっている。
三度目に道を訊いた中年の男が手をとって停留所から校門まで連れて来てくれた。その男の体

からは機械油の匂いがし、空の弁当箱が音をたてていた。

「何時でも一緒に行きますから、知らせて下さいよ」

と、稲垣の叔父が言ってくれてはいるのだが、此頃の吾郎は、意固地に単独歩行をやる。

（出来るだけ、一人でやらなくちゃいけない。出来るだけ……）

街の騒音と、飛び違う自動車に立竦み、絶えず自分の姿に集中される歩行の人の眼と微かなざわめきに唇を噛みしめ、努めて平静を装い、白い杖一本に全身を託して行く不安と恐怖は、四年間の盲学校生活から出て、まだ一年そこそこの吾郎に克服出来るものではなかった。

校門前の坂を降り、商店街へ出ると、また腹が痛み出してきて、吾郎を狼狽させた。〝下痢〟だけは……と慎重に注意して、幸いに、この一年、その失敗はなかったのだが、何と言っても去年の秋から半年近い間、昼のアルバイトと夜の受験勉強で、体は綿みたいに疲労し切っていても神経が昂奮して不眠症にかかり、二日ほど前から下痢を起していたのである。

生理は失明者にとって一番怖ろしいものだ。

下痢のときの外出の苦痛は、盲人仲間から厭になるほど聞かされている。

恥しさに耐えて、公衆便所を聞き、やっと入っても勝手がわからず便壺へ落ち込んだ、などという例はいくらもあるのだった。

青ざめて脂汗に濡れた吾郎の額には血管がふくれ上り、白い杖は慌だしく路を探った。

（早く、早く下宿へ帰らなくては……）

懸命に平静を保っていた感覚が混乱し、吾郎は顔面に衝撃を受けると一緒に、いきなり突き飛

ばされた。
「痛い。気をつけろ」
怒声を浴びせられ、よろよろ立上ると、
「何だ、めくらか」
舌打ちと共に若い男は去ったが、通行人のざわめきや囁く声から逃がれようと焦りながら、吾郎は両手で鋪道を掻き廻した。
顔面を守る為にとかぶっていた学生帽が跳ね飛んだのである。
誰かが黙って拾ってくれ、手に握らされた。
そのとたん、背中を氷で撫でられたように感じ、吾郎は便意を押え切れなくなっていた。

2

タクシーに送られて神田の下宿へ着くと、吾郎は三畳の自室へ転がり込み、自分で、鍼を足関節のツボへ打ち、蒲団へもぐり込んだ。
（よかった。ほんとによかった）
排泄するということの、常人には何でもないことに、気が狂うかと思うばかりに必死で、駅前にあるだろう公衆便所へ杖を鳴らしながら進み出した自分の狼狽ぶりは、道行く人々の眼にどう映ったろう。無我夢中だった。

急激なブレーキの音を聞き、
「危い!!　気をつけないかッ」
怒声を浴びせられた吾郎は、よろめきながら、
「タクシーですかッ？　タクシーですか？」
「タクシーだよ。何だね、あわてて。危いじゃないか、あんた――」
まだ若い運転手らしかったが、
「神田まで行って下さいッ」吾郎が言うと、飛び降りて来て車内へ抱え込んでくれた。さすがに尋常でないものを感じたらしく「どうしたんです？」と聞くのへ「その前に駅の公衆便所へつけて下さい。下痢を起して困ってるんだ。早く、早くッ」
吾郎は、体裁も何も忘れて一気に叫んだ。
あのとき、駅前の公衆便所へ屈み込んだときの（間に合った！）という安心と歓喜を思いだすと、哀しく可笑しかった。
まだ夕暮れには間があり、窓から見える鏡のように冴えた空から、風は唸り声をあげて窓ガラスを揺さぶっている。
この下宿は、老夫婦と、何処かへ勤めている息子が一人いて、二階の四部屋を貸している。吾郎以外の者は、みんな勤めに出ているので、家の中は静まり返っていた。階下のラジオが長唄か何かをやっているのが、低く聞えた。その三味線の音色が、まるで夢のように聞えて、吾郎は数日ぶりに、いや数ヵ月ぶりに泥のような眠りに引き込まれていった。

それにしてもあんなにひ弱かった吾郎の体が、一人ぼっちの過酷な生活に耐えているのは意外なことに違いなかった。これはやはり盲学校での四年間が体力を蓄えてくれたと言ってよい。

卒業以来の一年間に、しかし吾郎はこの蓄積を、ずるずると引出していくばかりなのだった。神田の下宿へ移ってからのアルバイトは、やはり、前の治療所の生活と大同小異である。まだ通勤だけに孤独の時間を持てるのが救いだった。しかし、下宿へ帰れば、目前に迫ってくる大学受験の勉強と取組まなくてはならない。吾郎は心理学を専攻するつもりだった。目的はまだ漠然としたものだったが、盲人としての自分が身につくような学問だと直感されたからである。

アルバイトの方は朝から夕方までだから、以前の治療所に居たときよりも実収は少い。引越しその他で貯金も減った。食事は近くの外食券食堂に頼み、アルバイトの大学生に始めのうちは毎日……二ヵ月ほどしてからは一日置きに下宿へ来て貰い勉強した。その大学生も今までに五人ほど変っている。常人の勉強を手伝うことの何倍かの忍耐と努力を必要とするだけに、吾郎がようやく協力者の声に馴れたかと思う頃になると、口実をつけてはやめてしまうのだ。

月謝を払った翌日から、ピタリと来なくなった学生もいる。

参考書を読んで貰っていても、明らかに協力者が、うんざりしてしまい、何度も念を押し、点字器でノートを取っていく吾郎を見ている表情が手に取るように分るとき、吾郎は相手を撲りつけたい衝動に駆られ、それを押える苦痛だけで、もうその夜の勉強はメチャメチャになってしまうのだった。

ただ不思議に死ぬということが念頭に浮ばず、むしろ徹底的に自分を苛め、がむしゃらに受験の日へ自分の体をもって行く昂奮が変に快適だった。半分は自棄になっていたのかも知れないが、按摩や鍼に全神経を凝らして失敗を避け、一日一日と、実習した成果が向上して行くことは嬉しかった。

「あんた、眼が見えないのに、よく、きれいにしてるわね」

治療先の、小伝馬町の商家の細君に、そう感心されたことがある。

亡母に躾けられた潔癖が、失明して一人になってからは吾郎の習癖になった。母親ほど徹底したものではないが、肌着についた体臭で汚れがすぐに分り、吾郎は暇があると洗濯をはじめた。下宿の老夫婦が、たまには「出しておきなさいよ、井上さん」と言ってくれることもあるが、

「まあ。なんて、キレイに洗うんだろう。おめくらさんだなんて言えやしないねえ」

老妻が、物干しの洗濯物を見上げて近所の人に話しているのを、吾郎は聞いたことがある。

「こう言っちゃ何ですけれども、井上さん、どうして汚れの落ちるのがわかるんです？」

とうとう老妻が訊いてきたので、吾郎は苦笑して答えた。

「石鹸の泡立ちですね。その手ざわりで分るんです」

答えたが淋しかった。常人に盲目だということを指摘されるのは、どんな場合にでも淋しさが影のように自分を包む。

去年の暮からR大の心理学を専攻している堤という学生がアルバイトに来てくれることになり、苦渋に満ちた吾郎の勉強は、かなりスムーズに進みはじめた。堤は、第一日目に、

「僕、井上さんのことは聞いて知っています、この前の前に来ていた山田ってのは僕の友人なんですよ」
「そうだったんですか。何しろ、僕はこの通りだもんだから、嫌われちゃってね」
吾郎が捨鉢に言うと、堤はサッパリと、
「そりゃ無理ないんですよ。話を聞いただけでも骨が折れそうだからなア」
「じゃ、君は、どうして来たんです？」
思わず吾郎もトゲトゲしく、
「からかいに来たんなら帰って下さい」
「失礼。怒らんで下さいよ。実は、僕、金が慾しいんです。二月一杯、あんたの受験迄、続けてやります。それで、二千円の月謝を五千円にしてくれませんか。そのかわり毎日来ます。時間も四時間にして、絶対に途中でやめません。全力をつくすつもりですがね」
受験の日まで、約二ヵ月しか残っていない。吾郎は藁をつかむ思いで承知した。
堤は約束を守った。声も明快だったし、同じ心理学をやっているだけに指導もうまく、一ヵ月もすると、やや吾郎にも自信がわいてくるようになった。
「しかし、受験させてくれるかどうか、こいつは難しいですよ。大学に特別なヒュウマニズムがあるわけじゃないですしね」
などと、ズケズケ言いながら堤は、一日、四時間の協力だけは疲れも見せずにしてくれた。
最後の月謝を払うとき、

「あなたもお困りのようだけど、約束だから貰います。井上さん、僕としては全力をつくしましたよ」

「有難う。よくわかってます」

「勝手ですが、これでやめさせてもらいます」

「僕も、一ヵ月五千円の月謝では続かない」

「皮肉ですか、それは」

「いや……」

「五千円もらっても、もう来られません。僕自身の勉強があるしね」

「そのお金、何につかわれるの？」

「女が妊娠しましてね。おろさなきゃならんので……」と、堤は溜息をつき、

「しかし、僕もあんたのヘルパアをやって得るところがありました。成功を祈ります」

さっさと帰って行った。

呆れもしたが、しかし堤がいなかったら、これだけの準備は到底出来なかったろう。入学願書の用意にかかりながら、吾郎は、よく自分の体力がつづいてくれたものだと思った。

泣き、喚き、何度も失望しつつ、ともかく一つの目的に向って遮二無二進んで来た精神の緊張は、粗食と、寒気に痺れる指先の反抗と、白い杖を圧迫してくる大地の抵抗の中で、少しずつ吾郎の、人間としての機能を目覚めさせ、これに力をあたえつつあったのである。

誠意のこもった吾郎の治療が喜ばれて、名指しの客も、かなりつくようになり、下宿代と食費

位は、アルバイトで何とかやっていけたが、でも貯金は心細くなってきた。もし、入学出来るとすれば、入学金其他で、三、四万は要る。

だが、堤の言った通り、大学には、一人の失明者の為のヒュウマニティはなかったのだ。

3

「よろしい。大学でも一人位、君みたいなケースがあった方が面白い」

山崎教授は吾郎を見据えて、

「私は、このB大に三十年勤続している。まア、君の受験を大学に承知させること位はできるつもりだ。でもねえ、君。特別あつかいはしないよ」

「はい。有難うございます」

歓喜に吾郎の瞳孔は一杯に見開らかれた。

あれから半月もの間、彼は、何をして暮してきたのか、よく覚えてはいない。発熱し、床の中で呻き続け、そのうち稲垣の叔父夫婦や、盲学校の友部先生が枕頭に集ってくれ、医者が呼ばれた。

「何故、黙ってたのよ。何でも一人でやろうとするからいけないのよ」

涙ぐんで友部先生が叱ってくれた。そして先生の伝手を求めての活動が始まったのだった。

東京都に勤めていた友部先生の良人の友人がB大の卒業生で、雑談の折に吾郎の話が出ると、

その友人が「山崎教授なら引受けてくれるかも知れんぜ。仲々政治家だけど、親分肌の人だから」と早速交渉に出かけてくれたのである。

とにかく会ってみてから……ということで、もう受験が始まっているB大学へ出向くと、吾郎の過去を聞いた上で教授は承知してくれたのだ。

私立のB大学は神田の高台の町にある。下宿からも近かった。吾郎は友部先生に、

「僕はもう諦めません」

「何をよ？」

「生きるってことをです。僕みたいな者にでも、こんな幸運が廻ってきてくれるんですから」

素直に言えた。苛酷な運命だと呪い、暗黒の人生に悲嘆し続けて来た吾郎は、稲垣はじめ、その暗黒の闇に点々と灯をともしてくれた人々の自分への愛情が、このとき泉のように胸一杯にひろがってくるのを覚えた。

「失明者は愛ってものがなくちゃ生きていけない。決して生きていけないんですね、先生。僕、それが、今、よくわかりました」

吾郎の試験は、それから二週間ほどして、山崎教授の部屋で特別に行われた。

国語と英語。それに社会問題のうち、吾郎は日本史を撰んだ。

試験官は山崎教授ではなかったが、ゆっくりと、二度も問題を読み上げてくれ、吾郎は、これを点字器で写したものを探りながら答案を点字で打っていった。時間は常人のそれと変りがない

ので、吾郎は、かなり焦った。問題を点字に写すだけでも余計な時間がかかるのだし、あわてて点字を打つと前に打った箇所へ重ねて打ってしまい、その箇所が読めなくなることもあった。

熟考している暇はない。頭に閃めいたまま夢中で点字器にかじりつき、答案を打った。

試験がすみ、とても駄目だろうと哀しくなり、二日ほどアルバイトにも出る気がしなかった。

合格発表の当日は、稲垣の叔父が朝早くからやって来て附添ってくれた。

騒然とした校内の雰囲気を感じ、誘導する稲垣の叔父の足が「此処だ此処だ」と止ったときには、頭がすーっとして、体が宙へ浮上るような気がした。

「あったあった。あったよ、井上さん」

躍り上って叫ぶ稲垣の叔父の声を耳にしたときにも、吾郎は、ボーッとして立ち竦んだままだった。

白い杖を握った手がわなわなして、涙が、どッとふき上ってきた。

「よくやったねえ。ほんとに、よくやった」

稲垣の叔父も涙声で、

「ビリの方じゃない。半分から一寸下ンとこだ」

「そ、そうですか……」

「邦男の奴、生きてたら、どんなに喜こぶかなア」

「僕も、僕もそう思って……」

稲垣邦男の、太い暖い声と、鉄のように固い二十七貫の肉体と、厚い掌の感触が、ラジオの実

況放送に一喜一憂した想い出が、吾郎の耳や手に、いや体中に音をたてて、よみがえってきた。

その瞬間に、吾郎は、自分の進むべき道が明確な形に、と言っても、それは瞳孔一杯の緑の色彩となって見えたように思った。

（稲垣さん。僕は他の動物には出来ない、人間だけにしか出来ないことをやったよ。認めて下さい）

吾郎は心に叫んだ。

入学祝いに、友部先生はラジオを、稲垣の叔父夫婦は学生服と学帽を贈ってくれた。

協力者（ヘルパア）

1

冷めたい鯉の肉片の新鮮な歯ごたえと、酢味噌の甘酸ぱい香りが口中にひろがると、思わず吾郎は、

「うまいなア。僕、鯉のあらいなんて食べたの初めてですよ」

「そう、このうちはね、確かその庭の池に一杯飼養してる筈なんだわ」

と、手塚敏子はガラス障子を開け放って、

「暖いから開けときましょうか。いいわねえ？」
「ええ。二月だっていうのに、毎日暖い。僕は、お蔭で、助かるんだけど……」
「ごめんなさい。試験で忙がしいのに、こんな処へ連れ出しちゃって。こっちに野菜の鉢があるわ。よくって」
敏子は、申し分なく、ふくらみ伸び切った腕をあげて、吾郎の手もとへ鉢を引寄せてやり、
「この料亭には、私、以前、亡くなった父に連れて来て貰ったことがあるの」
「古い店らしいですね？」
「分る？」
「そういう匂いがしますよ。湿り気があって、何となく落着いているもの」
東京から一時間ほど私鉄に乗って、吾郎と敏子が、この飯能の町へ着いたのは、まだ昼前だった。
小春日和の暖い陽射しに、うっとりと眠っているような町を抜けて、標高二百メートルほどの天覧山という山へのぼると、比企丘陵に囲まれた町が一望に見渡せる。
赤松と桜の林道を縫い、敏子に手を曳かれて行くと、吾郎は、感動して、
「ああ、本当に画が描きたいと思いますねえ。何年ぶりだろうなア、樹や土の匂いを嗅ぐのは……空気がまるで違うんですね」
手に触れる限りの樹や草の名を敏子に聞いては、その方の知識には疎い彼女を困らせた。
手塚敏子が、吾郎の協力者になって勉強の相手をするようになってから、半年ほどになる。

そして、吾郎は大学生活一周年を迎えようとしていた。
素朴な山菜や川魚料理で食べさせるT亭は、この山腹にあった。
桜樹に囲まれた池畔に、古びた小さな部屋がひっそりと並び、ウイークディの昼飯を食べに寄る客もない様子で、女中達は、モダンな、チェックの外套を着た敏子が、吾郎の手をとって入って行くと、眼を見張って、びっくりしていた。
「島村さんも誘えばよかったですね」
吾郎が汁の椀をとりながら言うと、急に敏子は黙った。
「どうかしたんですか？　先刻から言おうと思ってたんだけど、今日の手塚さん、少し変だな。こんな処へ僕を連れてきたりして……」
「そりゃ、だって……あなたが一度郊外へ行ってみたいって、熱望してたからよ」
「いや、そんなことじゃないでしょう、原因は」
適確に向けられた吾郎の見えない眼の焦点を逸らせて、すぐに敏子は、
「思い切って言うわ。私ね、結婚するの」
「なあんだ。じゃ、島村さんも喜んでいますね」
微笑したけれど、すぐに不安が衝き上ってきた。
結婚しても敏子は協力を続けてくれるだろうか……。
「島村とじゃないのよ、井上さん」
「え？」

「試験前で本当に済まないんだけど……でも許してこれで……もう、私、ヘルパアやめなきゃなんないの」

問い返そうと思ったが、吾郎は突嗟に口を噤むことが出来た。失望というものには、慣れていた。でも敏子に去られることは、此際、舌打ちしたくなるほどの痛手には違いない。

（やめるならやめるで、何故、もう少し前に……）

数日後に迫った試験の準備はヘルパアなしに到底出来るものではない。と言って、急に無償で夜遅くまでの協力をしてくれる人を見つけることは難しかった。

吾郎には、もう貯金はない。学費と生活費のギリギリのところを午後から夜にかけての治療で稼ぐのが精一杯だ。

「後を引継ぐ人も見つけないで、ごめんなさい。でも、私も、急に……」

敏子の、何時もは潤んでつやのある声が硬くなってきたが、吾郎は微笑をつくり、

「いいんですよ。永い間、無理ばかり言って、ほんとに有難う」

と、坐り直したとき、吾郎は、

（自分勝手な考え方をしちゃいけない。このひとには心から感謝しなくちゃいけないんだから――）

素直に、そう思えた。思うそばから、明日からの勉強が途方にくれ、一昨日までは一言も洩らさなかった敏子がうらめしくなる。

それにしても島村という恋人がありながら他の人と結婚するというのは、どうしたことなのだ

ろう。

吾郎は、前に会ったこともある島村の人擦れしていない率直な人柄を、ふっと懐しんだ。

しかし、一昨日まで、敏子の生活にあった変化に気づかなかった自分が口惜しくもあり、情なくもあった。

「私ね、この試験がすむまではやれるつもりだったの。そして、その後でゆっくり話すつもりだったの。でも急に、昨日のことなんだけど……」

敏子の声には、重荷を下した明るさがただよっていた。

2

手塚敏子は、吾郎にとって、五人目のヘルパアだ。父は歯科医だったが、三年ほど前に亡くなり、母と二人で暮している。D学院の英文科をこの春に卒業するのだが、夕方から西銀座で叔母が経営している酒場でアルバイトをしていた。

家が湯島三組町にあって吾郎の下宿とは近かったし、朝から銀座へ出勤するまでの時間を、学校と吾郎の為にやりくりして、一日置きに通って来てくれた。

敏子の前の四人のヘルパアは男と女二人ずつだったが、よくて一ヵ月、早いのは一週間足らずのうちに来なくなってしまっている。

入学してわかったことだが、各大学の学生達の間では、身体障害者の学生の為に、協力者のグ

ループがあって、一切無償の奉仕をしてくれる。

吾郎は身体障害のうち〝眼〟をやられるというのが、いかに惨いかということを知った。まだ聾唖者の方がましだと思った。

人類の文化は、光を追って来たものに違いない。

学問の発展にしても、光があり、眼があり、書物があってこそなので、その根元である〝光〟を、失明者が克服して行こうとするのは明らかに間違っていると考えざるを得ないのだ。

盲学校時代に、自分が打った「英文法」五冊は、吾郎の秘蔵書だが、大学で使うテキストには点字本が殆ど無いと言ってよい。

点字図書館の努力と奉仕だけが頼りなのだが、これも全国の失明者を相手にしての仕事であり、それにはあまりにも、まだ貧しすぎるのである。

図書館は原則として一冊ずつしか貸さず、二週間のうちに返本しなくてはならない。また読みたいものが、すぐにあるわけではなかった。

失明者が〝学問〟を追うことは、点字本の少さ貧弱さを嘆くということに一致する。図書館の寧日なき奉仕も、ささやかな寄附金を土台にしている為に大幅の発展を望むことは無理なのである。

吾郎は、必死になって教授の講義に耳を澄ますより仕方がなかった。

「たとえばね、黒板の字が読めないってこと、これはもう切実に哀しくなるんです。インクの匂いを嗅いでいて泣きたくなる」

何時か、吾郎が敏子にこぼしたことがある。

自分一人の為に、黒板の字を読んで貰ったり、教授に聞き返したりすることは、どうしても出来なかった。たまたま親切な教授もいるが、露骨に（面倒くさいな）という調子で一度でも扱われると、二度と手数をかけることがはばかられるのだった。

東京の大学にも盲人学生は何人かいるけれど、そのほとんどは肉親の誰かがヘルパアとして教室まで附添って来るようである。

吾郎には〝肉親のヘルパア〟は一人もいないのだ。

今はまだ一般教養科目だけだが、来年に入るとテキストは厭でも読まなくてはならない。今でも年に何回かのレポートを提出するときなどは、どうしてもテキストが必要になるし、そのテキストは、大体、学校の教授の著書が多い。買って来ても、まず誰かに音読して貰わなくてはならないのだ。それを吾郎が点字器でノオトにとってゆく。

顔面が神経そのものみたいになり、必死に点字器の紙へ針を打ち込む吾郎を怖がった女のヘルパアもいた。

相手の声に少しでも疲れを感じると、吾郎としては気兼ねせざるを得ない。ヘルパアには十円の金も払えないのだから……。

そして又、ヘルパアとしても失明者特有の鋭い神経の投射が苦痛になってくるのだった。

ヘルパアが変るたびに、吾郎は絶望した。

これから四年間も、こうした勉学に耐え切れるかどうか。盲学校を出た盲人達が、一様に無気

力となり、按摩や鍼で稼いだ金を本能の命ずるままに使い果し、貧困の中に朽ちて行く姿が共感をもって受入られた。

友部先生が、こんなことを聞かせてくれたことがある。

「平塚市の盲学校などでは、学校の創立以来、三十年にもなるんだけど、その三十年間の卒業生のうち、現在、理療師として、ちゃんと人並にやっているのは二人か三人に過ぎないそうよ」

そして盲人の転落は、地方へ行けば行くほど無惨なものになっていくのだ。

盲人の大半は貧困な家庭に生れており、精薄児が多い。戦後、進駐軍が行った調査では先天盲の場合〝先天性梅毒〟が圧倒的な数を示したという。

失明の原因と社会問題との関係は、意外に深い。

盲学校にいたとき、九歳になる女生徒が八重桜の花片を何度も何度も愛撫しては、

「きれいな花ねえ、桜ってきれいな花ねえ」

嘆賞していた声を、よく吾郎は思い出して、たまらなくなることがある。手の感触だけで花の美しさを感じなければならない人間の哀しさは、一生涯、吾郎にも附いて廻るのだった。

（良き協力者がなくては、盲人の社会的進出は絶対に望めないのだ）

吾郎は観念したが、しかし、吾郎が、どうにかたゆまずにこの一年を乗切って来たのは、級での成績が意外に良いからなのである。落第への不安に戦きながら、十番と下らないのだった。

「眼開きの学生が怠けすぎてるのよ。そう思わない」と、手塚敏子はズケズケと言ったものだ。

敏子は、疲れてくると「ああ疲れた。少し休ませて」とか、「今夜はもうこれ位にしといて。

その代り明日来ますから」とか、吾郎の神経の配り方を全く気にしないで相手になってくれるのが、むしろ気易く、盲目の意識にグサリと刺される苦痛は多かったが、点字も覚えてくれて、鈴木先生の「人類学」や、メニンジャーの著書なども、明快に音読してくれた。

敏子の叔母は両国の家から銀座の店へ通っている。前々から吾郎の按摩術を大いに買ってくれて、その、みじんも商売ッ気のない誠実な治療に惚れ込んでひいきにしてくれていたのだ。

「敏ちゃん。あんた、そのヘルパアってのになってあげたら？　お店へ来る時間、遅れてもいいからさ」

吾郎が世間話のとき、ヘルパアのことを一寸嘆いたのを聞いたその夜、マダムは姪に言った。

「困るわ、そんなの」

「お小遣をあげよう、毎月」

「いくら下さるの？」

「五千円ならどう？」

「ほんと？　叔母さん」

「やってあげなさいよ、気の毒だもの」

丁度、来合せていた島村も、ハイボールを唇へ運びかける手をとめて、

「どうせ来年卒業だろ。そうすれば、僕と結婚だもの。それまでのことだ。やってあげろよ」

と、吾郎に同情した。

五千円の月謝が、敏子の叔母から出ていることは、まだ吾郎も知らなかった。M造船の技師を

している島村とのことは叔母からも聞いていたし、挙式は来年の秋だとのことだったので、それまではと、吾郎も安心していたのだった。

そして近頃は、遠慮もとれ、この正月に映画を見に……いや映画と音楽と英会話を聞きに連れて行って貰ったときも、劇場の三つに区切られている階段一つを昇り、また降って昇るところを、敏子の「階段よ」という言葉だけで、降るところを昇ろうとして足を踏み外し、

「階段だけではわからないですよッ。階段には昇るのと降るのとあるんですから」と、突っかかったこともある。

「怒りんぼねえ」と、敏子は気にもとめない風だったが……。

3

T亭を出て、山を下ると、飯能の町に夕暮れが漂っていた。

畑を抜け、白壁造りの土蔵や商家が並ぶ細道を歩いて行くと、水の音が町中を縫って聞えてくる。丘陵に沿った町だけに、浸み出る地下水が町の濠や構渠を豊富に流れているのだろう。

「夕焼けがきれいよ、井上さん」

「そうですか。僕には必要のないことだ」

クスリと敏子が笑った。

子供達のざわめきが近寄り、

「盲目だ盲目だ」とか、
「わア、女に手を引っ張られるぞ」などという声が遠退いて行った。
こんなことはもう日常茶飯事で、怒りを押える訓練にも慣れている。
「島村さんと、どうして結婚しないんです？」
「私のことよ。気にしないで頂戴」
「喧嘩したんですか？」
「そうじゃないの」
造船技師の島村よりも、M重工社長の御曹司として、この初夏にヨーロッパへ渡る内田と結婚する方が良いと思ったからだ。
島村には、はっきりと言って、一つ撲られたが打ち返してやった。女給達や客が騒然となり、島村は扉を蹴飛ばして去った。それっきりである。
内田も店の客で、始めは執拗に言い寄ってくるのを、他の客と同じの浮気だと決めてかかり、相手にしなかったのだが、内田が或日、出勤前の母と二人切りの自宅へ車をつけて、すぐに青山の邸へ連れて行かれた。
「バアで知り合ったことは内密だよ」と言われ、内田の母親に引合されたときには、敏子も、
（おや？　これは――）
本気になった。
内田は、母親の前で堂々と申込みをしたのだ。一眼見て、内田の母は敏子が気に入った。

偏見のない両親で、もともと敏子の家柄も良かったし、裸の儘でいいから来てくれということになった。

敏子は、どんな場合にも堂々と振舞った。内田が駄目なら島村とよりを戻すつもりだ。敏子は、今更に、五尺三寸、十四貫という、まだ誰にも指一本触れさせていない自分の肉体や、鏡をいくら睨んでいても飽きない顔を誇らしげに振り返ってみて、（ああ無理しても大学へ行っといてよかったわ）と、思わずにはいられなかった。

叔母は大反対で、島村に同情したが、母親は大乗気だった。

甘ったるい夢としか思われなかった運命を摑む機会が、千人に一人、いや万人に一人の率で目の前に現われたのを見逃すわけにはいかないと、敏子は決心したのだ。内田に寄添ってヨーロッパへ行くという虹のような夢、外国映画のものとしか思われなかった夢が自分の物になるのである。

ヘルパアをしていることを話すと、内田は言下に、

「盲目の大学生なんて気味が悪いよ」

「そんなんじゃないんですの、ただ、あたくし気の毒だと思って……」

「そりゃ、ヒューマンな君の気持、よくわかるけど、僕としちゃ厭だな。絶対に厭だ」

逆うわけにはいかない。また逆ってまでやりたいことはない。

もう毎月五千円の小遣も必要ではないのである。

「じゃ、何処かで御飯でも御馳走してあげて、やめますわ」

「すぐにだよ、いいね」と、内田は念を押した。

「ね、井上さん。いけない女だと思う、私のことを」

「まだ訳を聞いてません」

吾郎は飯能の町の中心へ出たとき、まだ敏子と島村の別離にはそれだけの理由があるのだろうと考えていた。敏子の叔母の治療も、また梅雨時になったらということでこの一ヵ月ほど出向いてなかったし、事情は何一つ知ってはいないのである。

風が冷めたくなり、遠くで、鋭く、サイレンのような音が聞えた。

「言おうかしら、井上さんに」

「どっちでもいいけど……でも、聞かない方が、いいような気がします」

「あなたは島村が好きでしたものね」

「そうなんです、だから……」

「言わないわ、もう」

敏子の声は、東京へ近づくにつれて、明るく弾んできた。

「私、もう一ヵ月で卒業なんだわ」

「卒論は、もう出来たんですか？　何をやったの？」

「とっくに出来たわ、早いでしょ。キャサリン・マンスフィールドについて書いたの」

池袋からタクシーで下宿の前まで送ってくれ、外へ出た吾郎が、ポケットから出した白い杖を

つき、
「永い間、どうも有難う」
きちんと一礼すると、敏子は車の中から叫ぶように言った。
「こちらこそ。とても興味があったわ」
敏子の香料を薄く残して、走り出した車の音を聞きながら、吾郎は溜息をついた。
（興味か。僕を観察する興味だけでヘルパアをしてくれたのか……）
あの五千円のいきさつを知ったら、もっと吾郎は驚いたろう。大体に日時を守ってくれたヘルパアだったし、敏子の最後の一言は、吾郎を深い疑惑と、言いようのない不快さに陥し入れた。

4

試験期の校内は昂ぶった雰囲気に満たされる。
吾郎の身辺にざわめく学生達の会話が切迫したものになるし、ホールの掲示板には、種々な掲示が次から次へと貼り出される。この掲示板には、つくづく吾郎も手をやいた。
リポートについての注意や教室の変更、講師の休講など、すべて学校の運営は掲示板によって学生に示されるのだった。
講師の休講も知らず、のこのこと朝早くから登校したことも数え切れない。

囲りにいる学生達に聞きたくとも、口を切るタイミングがなかなか合わないし、自分の級でなければ聞いても無駄になる。のべつやたらに大声を張り上げて、毎日々々ホールの学生達に、「掲示板を読んで下さい」と聞いて廻らない限り、絶対に失敗はまぬがれなかった。

その日、午後の二時間の授業を終えてホールに出て来た吾郎は苛ら苛らしていた。

心理統計学の講師が早口でノートがとりにくく、統計のグラフ表を黒板に貼りつけて、それを説明しながらの講義だけに、グラフ表が見えない吾郎は、一層あわてなくてはならなかった。

点字器の紙を打つ針の音がせわしくなり、穴を重ねて打ってしまったことも何度かあった。帰って指で探っても、読めなくなっている箇所があることを考えると、うんざりしてしまう。

吾郎一人を意識して、ノートがとり易いように講義してくれる人もあったが、今日の講師の講義のやり方や声を聞いていると、その人柄が、くっきりとわかるような気がして、余計な質問を頼んだときの相手の出方が怖かった。何十人もいる常人の学生達の中の、たった一人の盲人としての自分が級全体に迷惑をかけることは実に心苦しいのだ。

階段を降り、ホールの床を探って掲示板に近づきながら、吾郎は周囲のざわめきの中に、級の、それも今日は自分のすぐ後ろに席をとっていた学生の声を聞いた。

この機を逃してなるかと、吾郎はカン高い声を張り上げ、

「富沢さんッ、富沢さんッ」と連呼した。

「やあ」

富沢の声がすぐ傍でした。目の前に来ていた人を呼ぶ為に、こんな声を張り上げなくてはなら

ないとは……こういうピントの狂った言動をするたびに、吾郎は赫くなるのだ。
「あの、別に新しい掲示はありませんですか？　昨日のは読んで頂いたんですけど」
「ええと……明日の法学の講義が、二十番教室になるってことは知ってますね？」
「はあ。それは知ってます」
「ええと……じゃ、別に、その他には……」
「有難うございました」
理療師をやるようになってから、吾郎の物腰や言葉は、丁寧な柔らかい感じがするようになってきている。それが、なんとなく若い学生達に取りつきにくいものを与えていることは確かだった。
富沢は、吾郎と肩を並べて校庭へ歩き出した。
「曇ってきたようですね」と、吾郎が言うと、
「えッ、わかるんですか？」そう言ってから頭を掻き「失礼」と、富沢は謝まる。
吾郎は苦笑した。そして、今日は特に自分を淋しいものに感じた。
「でも、大変ですね、井上さんも」
「有難う。ただ、一人の為に、皆さんに御迷惑かけてやしないかと思って」
「そんなことは……僕等も教室にいるときは、何かとお役に立てばいいんだけど、でも、一寸、怖いらしいんですよ、みんなは」
「怖いって？」

「井上さんがですよ」
「そうかなア」
「成績もスゴくいいし、余計な口出ししたら笑われやせんかってんでね」
そんな風に、みんなは自分を見ているのだろうか。
校門の電車通りの騒音の中へ出たとき、吾郎は、ヘルパアを富沢に思い切って頼んでみようかと思った。あと十日位でいいのだ。富沢も忙しいだろうが、一日、二時間でもいい。
今日の富沢の何となく親味が持てる態度に勇気を出して、口を開きかけたとき、
「じゃ、これで失敬します」
富沢は、さっさと雑踏にまぎれて行ってしまった。

駿河台の坂を上り、御茶ノ水駅前の煙草屋で、吾郎は指を暖める懐炉の灰を買い、国電の線路沿いの崖の上の路へ曲って、注意深く二百歩ほど歩き、電柱から三間ほど離れた喫茶店の扉を開けた。
寒気が消え、ストーブの暖気が春のように指先へ走り寄って来た。
一週に一度はこの店へ寄って、コーヒーを飲み、音楽を聞くのが吾郎の唯一の楽しみなのである。
カウンタアにいる主人が「おいおい」と、低く女給仕に言う声がした。主人は吾郎を覚えていて、何かと気を配ってくれるらしい。

女給仕がすぐに、「どうぞ」と手をとって、崖際の席へ案内してくれる。
広いガラス窓越しの谷間の線路を、国電の響音が擦れ違って通過して行った。
店内には、リムスキー・コルサコフの「印度の唄」のレコードが流れていた。
外人の女性歌手の哀感をこめた唄声が、今日の吾郎の胸には暗く哀しく沁み透ってくる。
それでも、熱いコーヒーと、すぐ傍で音をたてている石炭ストーブに体が暖まってくると、疲れ果てて衰弱した吾郎にも、いくらか気力がわいてきた。
（そうだ。友部先生に無理を言って来て頂こう。試験さえすめば、また何とかなるだろう）
絶望をくり返し、その度びに何とか切抜けて来られたという体験が、何にも増して吾郎には有効だった。
そう思うと、ぐずぐずしてはいられなかった。夜になって郊外にある友部先生の家から帰って来るのは危険だった。夜は吾郎の白い杖を通行の車や人から見にくくさせる。
コーヒーを飲み、伝票を手探ったとき、吾郎は傍に立って自分を見ている人の気配を知った。
吾郎が振り向けた顔に、
「もう、お帰りになるんでシュか？」
女の声だった。男の児のように飾り気のない、そして暖味のある声だ。
ふっとその声を何処かで聞いたように吾郎は思った。
「私……私ですか？」
「はあ。私、江原直子って申します。井上さんのクラスメートなんです」

「そりゃ、どうも、これは……」
吾郎は浮かしかけた腰をおろし「どうぞ」と前の席を手でしめした。
「お急ぎなんじゃないでシュか？」
「いや、別に……」
「お見かけしたもんでシュから、一寸お話したくて……」
嬉しかった。何にもせよ、クラスメートが向うから話しかけてくれることなんか、めったにないことなのだ。話し合いたいというのは友情があるからだ。
失明者は友情に飢えている。孤独を好みながら友情に飢えている。
吾郎は、江原直子と自分に、コーヒーを注文した。
「この喫茶店へは、よくおいでになるんでシュね」
「よく御存知なんですね」
吾郎は一寸驚いた。
盲目の学生なんて女の子には珍らしいのかナと軽く思え、微笑することが出来た。
直子には一寸した訛りがある。すをシュと発音するのが特徴だった。
コーヒーを飲みながら、学校に関係した雑談を交しているうちに、吾郎は、気持がのびのびとして、直子に向い合うことが出来た。そういう何かを直子の声や言葉が持っているのだった。
「お郷里はどちらです？」
「福島県勿来市植田町。その町の小ちゃい製材所の次女です」

一気に答えたのが可笑しく、二人は声をたてて笑い合った。そして、
（声に出して笑ったことなんて、何ヵ月、いや何年ぶりだろう）
と、吾郎は思った。
「勿来市っていうと有名な関のあるところですね？」
「ええ。海の傍の町でシュ。夏も冬も住みよくておっとりした町でシュよ」
直子は、池ノ端七軒町に下宿していると言う。昔の谷中の家から近い町なので、「あの辺は今、どうなっています？」などと話しているうちに、一層、親味がわいてくるのだった。
「何時だったか、井上さんが駅前の煙草屋で電話をかけるのを見てびっくりしちゃったんでシュ」
「どうして？」
「まるで、眼が開いてるみたいに……」と言いかけて、直子は黙った。
「いいんですよ、気にしないで。そんなことを気にされたら、僕なんか誰とも話しができやしません。電話をかけるときは、この三本の指を1から3まで突込んどいて、それを基準にしてダイヤルを廻すんですよ」
「まあ。でも早かったわア」
話が試験のことになり、思わず、吾郎がヘルパアのいないことを嘆くと、直子は、持っていたコーヒーのコップをガチャンと皿に置き、
「私。あの、前から思ってたんでシュけど、言い出せなくて……よかったら、私でよかったら、

ヘルパアをやらせて頂きたいと……」
「よかったらどこじゃない、本当ですかッ」
吾郎は両手をテーブルについて、首を突き出した。
「でも、私で、うまくいくかどうか……」
「そんなことは……こっちから無理をお願いするんです。遠慮なしにお願いします」
気がねせずに、キッパリと頼めた。
「では、よろしく」
「は。よろしく」
二人はペコンと頭を下げ合った。
秋葉原の治療所へ行く吾郎と、これから船橋に住む親類の家へ用事で出かけるという直子は、御茶ノ水駅のプラットホームへ並んで降りて行った。
まだラッシュアワーには間があって、ホームの人々は、ゆるやかな流れをつくって動いている。
曇ってはいるが風は無く、底冷えのする午後だった。
ホームのベンチへ腰をかけると、
「井上さんは卒業したら、どういうお仕事なさるんでシュ。やっぱり心理職のような?」
心理職とは少年鑑別所や児童福祉相談所や、各種の採用試験官、その他の仕事にたずさわることだった。

「さア、どうなりますか。とにかく僕は……」
吾郎は、静かに、大きく息を吸い込んでから、
「僕は、盲人の世界は知っています。ですから、これから出来るだけ努力して、少しでも常人の世界と社会に適応していける人間になりたいんですよ。それで、その上で……」
「その上で？」
何と言ってよいか迷ったが、吾郎は簡単に答えることにした。
「その上で、盲人の相談相手になりたいんです」
出来れば、卒業後、自分の家が一軒ほしいと思う。その家を中心にして、盲人の、いや身体障害者の福祉の為に仕事をしたいと考えてはいるのだが……。
（しかし、家を持つなんて、とても考えられない。理療師をしながら、何とか少しずつやるより仕方がないな。少くとも自殺しようとする失明者を、いくらかでも勇気づけることは僕にもできるだろう）
卒業後の自分が杖をひいて、盲人達を訪問する姿が胸に浮んだ。
そのためには、是が非でも苦しい勉学をやり抜かなくてはならないのだ。やり抜いたときこそ、自分は彼等の相談相手になれる資格があるのだと吾郎は思う。
学校を出た出ないということではなく、常人の〝眼〟に負けずに大学を出たということが吾郎自身にとって大切なのだ。
江原直子が何時までヘルパアをしてくれるか、何処まで続くものか、それを考えると不安だっ

たが、もう考えないことにした。

電車の響音が、遠くから聞えてきた。

「来たようです」

「え……あ、来ましたわ」

吾郎は白い杖を握り、江原直子と並んで近寄って来る響音に、じいっと聞き入った。

ふっと、七年前の、あの夜のことが思い出されてきた。

「大丈夫。知っているのは俺だけだよ」と囁いた稲垣の声や、自分の肩を摑み有無を言わせずベンチから立上らせた厚い掌が、懐しく吾郎の耳や体に浮び上ってくる。

響音は、稲垣邦男の声と掌の感触になってホームへ滑り込み、吾郎の前に止って微笑を送ってきた。

稲垣の叔父は、近所の小さな借家を管理している。

夫婦者が二階の部屋に住んでいるが、井上吾郎の卒業と同時に引移って貰う約定になっている。

この家を買って叔父に管理を頼むとき、亡き稲垣邦男は、こう言ったのだった。

「吾郎さんが卒業する迄、黙ってて下さいよ。と言うのはね、俺は相撲とりで、相撲とりのやり方でしか強くなる方法を知らない。相撲とりは髪の毛一本ほども甘やかされたら、お終いなんだものね。俺も、砂の上に叩きのめされ、裸一つの体を張って苦しみ抜き、何百人に一人という幕

内力士にやっとなれたんだ。だから、吾郎さんを強い男にする方法も、俺は一つしか知らないんですよ」

緑のオリンピア

1

僕が、妖精のセリナ・マネットに初めて会ったのは〔全日本インターハイ〕と呼ばれる全日本高校陸上競技選手権大会が横浜の三ツ沢競技場で行われたときだから、あれは確か……そうだ、昭和二十八年の夏だった。

僕は、当時十八歳で、東京B高校の選手として出場していた。種目は勿論、三段跳だ。

あの日は、馬鹿にひんやりとした曇り日で、暑さに苦しむことはなかったが、脚を冷えさせては大変だと思い、僕も他の選手達も、一回跳び終るごとにトレーニングシャツとパンツをあわてて身につけ、フィールド前のベンチや芝生にうずくまったり、せかせかと芝生を小刻みに踏んでは落着かない瞳を灰色の空に投げてみたりして、胸が痛くなるほどの緊張に耐えながら次の順番を待っていた。

あの頃は、まだ大きな試合の場数も余り踏んではいなかったし、ただもう固くなるばかりで、

（よし。今日は初めっから思いきり跳んで、やつらを圧倒してやろう）

などと、昨夜考えていた作戦どころではなく、僕はベンチに左の片腕をかけて黙々と編棒を動かしているだけだった。

B高校の関口の編物と言えば、この頃からかなり有名になっていたものだ。好きな色の毛糸で、僕はいくつ手袋を編んだことだろう。編棒を無心に動かしていると、気持が落着いてくるように思える。

おふくろは若い頃から編物が得意で、終戦直後——三度も東京で焼け出された為、冬に向ってセーターの一枚も無い小学生の僕に、「早く編まなくちゃ、お前が風邪引いちまう」と言い暮して、毎日の勤めの余暇を見ては、ヤミ米をリュックに詰め、木枯の吹く街をせわしなく歩き廻ったあげく、やっと毛糸の金を握り、ヤミ市でアメリカのすばらしく柔らかい毛糸を買って来ると、一晩で僕のセーターを編み上げてしまったことがある。そのスピードの爽快さ、その手さばきの鮮やかさは音の無いリズムを奏でて、見ている僕を魅了せずにおかなかったものだ。

その後も、おふくろは勤め先の給料と編物の内職で、僕と兄にひもじい思いをさせたことはなかった。

そういうわけで、僕も何時の時にか編棒をもてあそぶようになったのだし、おふくろもまた、それをよろこんでくれ、編み方を楽しそうに教えてくれた。実際、おふくろは編み物が好きだ。編み方がしっかりしていて着くずれが少しもない。今でも老眼鏡をかけた顔をうつむけて、小声で何か唄いながら小肥りの体をゆるく振りつつ編棒を動かしている姿は、ほんとうに楽しそう

だ。

編物をするのが、どうしてそんなに楽しいのだろうか。それは、僕が一年中汗水をたらし、苦痛に耐えながらトレーニングをして、地面の上を跳ぶことに無上の人生を感じていることと同じだろう。

やってみない者にはわからないことだ。

僕が編むのは手袋ばかりだ。一つ編み上ると、誰かにプレゼントする。今、ドイツにおられる牧野平一郎先生も、たしか三つか四つ持っていて下さる筈だ。

兄にも贈ったことがあるが、彼は「ふーん。おい、泰助。男のくせにこんなマネをするのはよせ。編物じゃ飯は喰えないぞ」と、こうだ。一度で、もうやめてしまった。

セリナ・マネットにも一つ贈ったが、彼女は、この贈物を何処にしまっておくのだろう。それを考えると微笑が、思わずこみあげてくるのだ。

とにかく、その日も各選手六回の跳躍のうち五回が済み、十七人の選手のうち決勝に残ったベストシックスが最後の跳躍を待ち構えていたところだった。

三段跳は各選手が六回跳んだうちの最高記録が一位になる。すでにこのときM高校の照井が僕にとっては決定的な記録を出してしまっていたが、僕は何とかして十四メートルを出したかった。そのときまでの僕の最高は十三メートル八十だった。一流選手になるには十五メートル以上の記録が出なくては駄目だが、それはまだ、当時の僕にとって遠いあこがれであり、夢だったものだ。

僕の順番はラストだったので、つとめて無心な状態になるべく編棒を動かしていると、
「あなた。もっと昂奮しなきゃ、いい記録が出ないわ」と声がかかった。
はッと見上げると、其処に、眼前二メートルほど前の芝生に、彼女が立っていたのだ。
セリナ・マネットは、細くて、しなやかな体？　を緑のブラウスとスラックスに包んでいた。
しかし、僕が、まずその異様な美しさに息をのんだのは、着ているものも、短くカットされた髪も……つまり彼女全体が、燃え立つようなスプリング・グリーン一色に輝いているのに、しかも、その緑色が動物も植物も生存せず微かな陽の光さえも射し込まぬ、深海の神秘さをたたえていたからだ。
彼女は少年のようでもあり、若い女の匂いがただよっているようでもあり——実際には、彼女が匂いなどというものを全くもっていないことに、後で気がついたのだが……とにかく、そのときの僕にとっては、セリナを、若い、それも外国の女性だと見るより仕方がなかった。
この場処に於ける彼女の出現は、誰が見ても考えられないことだったので、僕は、右隣りで、神経質に足首を揉んでいる信州のR高校から出た岡本を肱で突いてみた。
「ウン？　——何？」
岡本が苛らだたし気に顔をあげたので、僕は眼で、彼女を見よと示唆した。
岡本は、薄く尖った鼻を突出し、キョロキョロとあたりを見廻したが、舌打ちすると、
「何だい？」
（こいつ緊張しすぎてる。眼がくらんじまったのかな）

僕は可笑しくなり、今度は左隣りの山口に同じようなことを繰り返してみた。
相変らず、そのときもセリナは両腕を胸に組み、ニコニコと僕達を見守っていたものだ。
「何や？　――何が、どうしたんや」
関西から来た坊主頭の山口は僕を突つき返した。
「見えない？」と、僕はささやいた。
「何が？　何も見えん。競技場が見えるだけや」
このとき、急に岡本が割り込んで来た。立ちはだかって僕を睨みつけ、
「関口君。君は卑怯だぞ。神経攪乱戦法を使うつもりか!!」
岡本は、今日の照井の最高よりも三センチほど上位の記録をもっているだけに、決勝で一発引っかける（記録を出す）つもりらしく、大分気がたかぶっていたらしい。僕はあわてた。眼前の彼女がみんなには見えないのだろうか……。
他の連中も岡本の見幕に、一斉にこちらを見たが、彼女については全く反応がないのだ。
「あなただけに見えるのよ」
セリナは言った。
「は？」
「あなた。妖精って知ってる？　仙女とも言うけど――」
「は。西洋の伝説やお伽話に出てくる精霊のこと？」
「イエス。私がそうなの」

「ええッ――」
「セリナ・マネットっていうの。よろしく――」
「は――し、しかし……」
馬鹿みたいにポカンと口を開けて、フィールドの空間を見詰め、モソモソと何か言っている僕を見て、連中は何とも言えない表情をした。
「バカじゃなかろか」
「緊張しやがって頭へきたんかナ」などと呟やきながらも、連中は不気味そうに僕の横顔を見守った。だが、そのときにはもう僕の耳や眼は、他の一切の現象を吹き飛ばしてしまい、セリナ・マネットの唇から流れ出る一種奇妙な音（それは非常に美しい、強いて言えばフルートの音色に似ている）が、僕の頭の中へ吸い込まれたとたんに、その音が一つの言葉となって僕の知覚を瞬時に目覚めさせるという幻妙な経験に引込まれていた。僕は我を忘れていたのだ。
「あら――いけないわ。あなた、もう黙って――でないと気狂い扱いにされて退場させられるわ」
僕がゾーッと寒気立ったのは、その瞬間にセリナ・マネットの体が豆粒のような緑の玉になって矢のようにスタンドの一角に吸い込まれたからだ。
スタンドの観衆が、ざわめきはじめた。
気がつくと競技役員が二人、知らせに行ったらしい山口と共に、こちらへ駈けて来る。
深い眠りから何か強い衝撃を受けて目覚めた思いで、僕はベンチから立上った。

丁度、岡本の跳躍が終ったところで、彼はデリケイトだと自称する運動神経が、今の事件で混乱を来たしたらしく、踏切板を踏切り損って、ファウルの赤旗を宣告され、ふくれっ面をしてこっちを睨らんでいる。

「関口君。どうかしたのか？」

役員の一人が、僕の肩に手をかけ、強張った表情でのぞき込んだ。

「いや――いや、何でもありません」

「跳べるかね？　今度は君の番だけど――」

「ハイ。大丈夫です」

期せずして観衆の眼も選手達の眼も、競技場全体の眼が僕に注がれることになった。きっと急病を押して最後の闘いに挑む選手だ、というような感じを与えたのかも知れない。

僕は助走路に立って気力をこめ、三十メートルほど彼方の踏切板を睨んだとき、雲が破れて強い陽の光がトラックに射し込んで来た。

今の事件で、僕は昂奮していた。

スタンドのざわめきが僕を注視していることを自覚して、鋭い緊張が体内を貫き流れているような気がした。

僕は走り出した。白い踏切板が見る間に近寄り、煌めく夏の陽は僕を掬い上げた。

ホップ、ステップ、ジャンプ!!

十四メートルピタリの記録を知らされ、自分の最高を出したよろこびに僕が震えていると、そ

のときも審判をしていた牧野先生が、陽に灼けた、贅肉の少しもついてない細長い顔を振向け、「お目出度う」と言って下さった。

そのときはまだ親しくして頂いていなかったのだし、一年に二度か三度の試合で遠くから先生に敬愛の眼を向けていたにすぎない僕なのに、先生は僕の記録のすべてを知っていて下さったのだ。あとになって、先生は「あの頃から伸びると思って、注意して見ていたんだよ」と言われたが……。

とにかく、僕は夢を見ているような気持で、ふらふらベンチへ戻りかけると、また、セリナが何時の間にか現われた。

彼女は僕と肩を並べて（本当のところ、彼女の肩は僕のそれよりも約三十センチほど低かった）歩きながら、

「十四メートル出たわね」

「出、出ました」

「でも、ベストシックスのラストよ。六位だわ」

「はあ。でも嬉しいです。僕の最高ですから」

「あなたを今日初めて見たんだけど、良い素質をもっていらっしゃるのね」

「そうでしょうか」

「でも、もう試合のときに編物をするのはやめた方がいいんじゃないかしら」

「でも、何となく気持が落着くんです」

「落着かなくてもいいのよ。もっと競技場の雰囲気の中に巻き込まれて刺激を感じなくちゃいけないんだわ」

「そうでしょうか」

当時、僕はまだ何も知らなかったのだ。

学校の体育部の月並なコーチを受けるだけで、あとは自分勝手のトレーニングばかりだったし、三段跳にしても、ホップ（第一の跳躍）を低く、ステップ（第二の跳躍）を高く跳ぶ、ということ位の知識しかなく無我夢中でやっていたにすぎない。

「あなたとなら仲良しになれそうだわ」

セリナは軽く左手を僕の腕にかけて（かけている彼女の手は、はっきりと見えるのだが、人間の手をかけられているという知覚は勿論なかった）ゆっくりと歩きながら語りつづけた。

セリナは三日月型のオレンジ色の靴を素足にはいていた。

「私、一年に一度は日本に来るのよ」

「へえ……」

「あの、ミスター牧野に会いにね。と言っても哀しいことに、彼はもう私の姿が見えなくなっちゃったけど……」

「どうしてです？」

「彼が結婚しちゃったから、十五年前に——でも、私は一九三六年のオリンピック・ベルリン大会で、彼が三段跳の金メダルをとったのを見て以来、彼のことを好きなの。だから一年に一度は

ロンドンからやって来るのよ」

「？　……」

セリナは、ふと振向いて、審判席からスタンドの方へ引上げて行く牧野先生の後姿を、しなやかな指をあげてさしながら、何処か哀しげに、

「彼は昔も今も、背が高くて、ナイーヴで、しかも男らしいわ」

僕は、もう伝説や童話の世界に住む仙女と語っていることの不思議さを忘れていた。

しかし、ベンチから引上げかけていた他の選手達は、横を向いて隣りの空気に話しかけながら近づいて来る僕を、気味悪そうに見詰めているのだった。

妖精のセリナ・マネットは、この日、フィールドの僕を見て、僕に「仙女の愛」をかけてくれたのだ。

だから、僕だけには彼女の声も姿もわかり、他の人間達にはわからなかったのだ。

勿論、まだ、僕は、すがすがしい童貞だった。

2

童貞と言えば、何かにつけて、兄の武信は僕に、

「お前なんか、まだ子供さ。童貞のくせに世の中のことなんかわかるもんか」と、言う。

兄と僕は歳が十二も違うのだが、しかし、セックスの物差しで世の中のすべてをはかることは

出来まい。

すがすがしい童貞と言ったのは、当時の僕自身の気持を後になって振返ってみての感想で、事実、当時の僕にとってはセックスの負担は全く軽かった。僕の心身のエネルギーが、すべてスポーツそのものに投入されていたからだろう。

「男と女のことって、世の中で一番、難かしいもんなんだよ。母さんは二度失敗った。三度目に、落っこちないで済んだけど……でも危かったよ」

何時だったかそんなことを言って、おふくろは笑ったことがある。

おふくろは何時も元気だった。少くとも小さい頃の僕には、そう見えた。歳をとってからも、小柄な体といい対照になっている大きな眼は何時も激しい光を宿していて、しかもうるんでいたものだ。

おふくろの二度の失敗。その初めの結果が兄の武信となり二度目の結果が僕だ、ということにもなる。兄の父と僕の父は全く別人なのだ。

おふくろは、上野公園の裏側にある寺院の多い町に生れた。植木職の一人娘だったそうだが、大正二年の冬に、十三歳で父親の出入り先の、高名な日本画家の妾宅へ女中奉公に出たということだ。おふくろが今でも「青山の奥さん」と呼んでいるその女主人は、ふだんはひっそりと青山墓地附近の小さな家に暮して、相手と言っては三匹の猫と、少女だったおふくろだけなので、まるで自分の子供のように可愛がってくれたらしい。おふくろのことだから、きっと骨身を惜しまずに働いたろうし、嘘というものが死ぬことよりも嫌いな性格だけに、その「奥さん」も尚更

に、おふくろへの愛情が増したことと思われる。

二十一歳の秋に、おふくろは、この「奥さん」に申し分のない仕度を整えてもらい、本郷にあった〔青柳〕という菓子屋へ嫁入りをした。

そこで生れたのが兄だ。

兄の父親については、兄も覚えていないだろうし、勿論、僕も知らない。僕は自分の父親でさえ全く知らないのだ。おふくろが兄を抱いて婚家を去った理由も、僕は知らないが、

「武信のお父さんっていう人には、母さんが嫁入りする前に、多勢の女の人と関係があって、それが母さんの嫁入りを機会に、一ぺんにどッと揉め事が起きはじめたのよ。母さん、気が強かったし、我慢が出来なかった。二年間我慢をしたけど、そのうちに頼みにしていた武信のおじいさんは亡くなるし、そうなるとお父さんっていう人は、もうまるで、お坊ちゃん育ちで、お店の仕事も何も、何一つ精出してやる気のない人だったもんだから、母さん、とうとう——いえ、ハッキリ言えば、こんな人と一緒に自分の一生を送ることが正しいのか、どうか、随分に迷ったけど、とうとう思い切って、武信を抱いて出てしまったんだよ」と語ってくれたことがある。そのとき僕は問いかけてみた。

「そんなお父さんを、母さんは、どうして、あっさり捨てたの。母さんの努力で兄さんのお父さんをもっと男らしくすることが出来なかったのかなア」

「そう。それだよ」と、おふくろは、自分の不明を恥じるような、テレくさそうで、哀しそうで、何とも言えない複雑な微笑を浮かべ、

「そこに気がついたのは十年も経ってからさ。たった二年で手を上げちまうなんて、我ながら、だらしがなかったねえ」

その、だらしなさ不甲斐なさを自覚すればこそ、おふくろは女手一つで、夜学ながら兄に大学を卒業させたのである。

おふくろが渡り歩いた職業には、女中、家政婦、病院の賄婦、女学校の雑役婦などがある。勤めの余暇には傍目もふらず、編棒で毛糸の玉をさばいてきたことは言うまでもない。

この間に、おふくろの両親も亡くなったし、一人娘だったおふくろから、数少い親類達は見る間に遠退いて行った。だから兄も僕も親類達への交際ということに、あまり経験がないと言ってもいいのだ。

僕の父は海軍兵曹長だった。おふくろは勤め先の医師の世話で、その後妻になったわけだ。

「そのときは何度も何度もお断わりしたんだけど、あまりすすめて下さるので、お前のお父さんとお見合いをした。お見合いしてからお断わりするつもりだったけど……」

父を見たとたんに、おふくろの胸に火がついたのだ。

写真もないので、父の風貌は僕の知るところではないけれど、おふくろは、

「がっしりとして、胸板が厚かったよ。そしてね、良い香水の匂いが、フワッーと体から流れてきてねえ」

潮風にさらされ、陽に灼けたたくましい軍服姿の、おしゃれな海軍兵曹長だった父は、「お前は家風に合わんから……」と、結婚一年後に母へ離別を申し渡した。

父の先妻の残した女の子が一人いて、おふくろは兄を連れ子して嫁いだのだが、父の宣告を受けると、お腹に入ったばかりの僕の存在を塵ほども匂わさずに、さっさと出て来てしまったというわけだ。

「私は、海軍二等水兵じゃない。女だし、しかもあの人の妻というもんだからね。兵曹長が二等水兵を扱うのと同じにされたんでは生きてる空がないと、すぐに決心した」のだそうだが、また独身生活に戻り、子供のときから親しい友達の杉村さんというお産婆さんの家へころがり込んで、そこで僕を産んだのだ。

僕が、おふくろの体内から飛出し、しおらしく第一声をあげた瞬間に、おふくろは、前に言った（そこに気がついたのは十年も経ってからさ）と、自分の不甲斐なさを感じて、思わず呻くような嘆声を洩らしたのだった。

「だけど、あのときに辛抱し抜いてしまったら、お前という息子をこしらえることが出来なかったからね」と、こう言うおふくろの眼は慈愛に満ち満ちている。その眼が伝える愛情の輝きひとつで僕は今まで只の一度も父親を欲しいと思ったことはない。

このように、おふくろは、生長した兄にも僕にも隠すことの露ほどもなく、すべてを堂々と放り出して見せたものだった。

おふくろは、別れた二人の良人の家へ、二度と足踏みをしなかった。

兵曹長から慰藉料が届いたときも、

「こんなものを貰うと、今後の暮しに気が挫けます」と、はねのけたそうだ。

こんなことを、別に僕は立派なことだとも思わないし、おそらく血気盛んな頃のおふくろは、相当なエゴイストだったかとも思うけれど、僕は、おふくろという人が、あくまで精一杯に生き抜き、子供の為にはファイトを燃やして、兄や僕を育ててくれたということ。このことだけは肝に銘じてわかっているつもりだ。

兄の父の家は戦災に消え果て、その家の人々の行方は知れず、おふくろを嫌った僕の父、海軍兵曹長殿は、昭和十七年三月（伊の十六号）という潜水艦に抱かれて、南海の底に沈んだ——というハガキの知らせが、それでも父の姉から届いたそうだ。

3

あの日。競技会が終って家に帰り、僕は早速おふくろに、セリナ・マネットのことを話した。

「運動もいいけど、でも近頃は練習が激しすぎるんじゃないのかい。少しお前、神経がたかぶってるようだけど……」

おふくろは、心配そうに眉をしかめ、僕の額に手を当ててみたりした。

僕の家は、目黒も外れの方で、東京の郊外と言ってもいいほどだ。

私鉄の駅前の商店街を抜けると、空気の味が変るほどに静まり返って、木立や畠が多い。

家も庭も小さかったが、廻りはまだ空地だ。南側はN紡績の社長の宏荘な邸で、低い土塀の上に、こんもりした灌木の茂みがのぞまれる。

僕の家は階下二間、二階一間の、ささやかなもので、僕は、おふくろと兄夫婦と共に暮している。金融公庫から借金して、ようやく建てたものだ。

二階の六帖が、僕とおふくろの部屋だった。

兄は毎晩遅いし、義姉も此頃はまた、結婚前につとめていた銀座の酒場へ行きはじめているので、帰りは兄よりも遅いのだ。

物倦い夏の夜気を微かに震わせ、何処かでハモニカが鳴っている。

「母さんが信じないのは無理ないけどさ、でも、本当に、その妖精が……」

「バカバカしい。厭だよ、この子は——そんな化物の夢を見るなんてどうかしてるよ、全く——競技場で居眠りしてたんだろ」

「いや、してなかった」

「もういいよ。さ、早くおやすみ。体が疲れてるときはロクなことを考えやしないもんだからね」

おふくろは、さっさと床をとり、早く寝ろ、と僕をせきたてた。眠ることに勿論反対ではなかったし、これ以上、おふくろに同意を求めるのは無理だと、僕は気がついた。

「この暑いのに、よく我慢が出来るねえ」おふくろは寝巻を僕に渡しながら、夏でもはいている薄いメリヤスの股引を指した。

「脚を冷やしたら大変だからね」

「スポーツをやるなんてことも、これで仲々面倒くさいものなんだね」

「ははは。面倒くさいから、また面白いんだよ、母さん」
僕は洗いたてのタオルの寝巻に着替えると、かわいた石鹸の香りがほのかに僕の体を包み、ゆるみ切った筋肉が、快よい疲れを訴えてきた。
「あ。ううう……」
僕はシーツの上で、手足を思い切り伸ばし、たちまちに襲いかかってくる眠りを甘受した。
どの位、眠ったろう。
僕は揺り起されて、急に目覚めた。
「なあに？　母さん……もう朝かい？」
「ふ、ふふ――一寸、起きて頂戴。お別れに来たのよ」
「あ……」
またセリナ・マネットが現われたのだ。
枕元にスタンドが灯ってはいたけれど、小さな部屋一杯が緑色のヴェールに包まれたような気がして、僕はぴょこんと飛び起きた。
「何処から来たんです？」
「其処から」と、セリナは緑色の指をあげ、降るような星が闇の空に散らばっている南の窓を指した。
さっき「今夜、あなたの家へ遊びに行くわ」と言い置いて、一点の緑の玉になり、スタンドの一角へ飛び去ったセリナを、僕はハッキリと思い出し、

「よく、わかったですね、此処が」
「仙女には不可能なものはないのよ」
「あ、そうだ。おふくろに会って下さい」
「あなたのママは階下で兄さんとお話しているわ」
そう言えば階下で、おふくろと兄の声が、低く聞えている。
「今夜中にロンドンへ帰らなきゃならないのよ。だからお別れに来たの」と、セリナは言った。
セリナは、ロンドンのチエルシー区という処に住んでいる。其処は、ドイツの空爆を辛うじて逃れた古風な煉瓦造りの家が残っている一角で、昔から画家や音楽家、小説家などが、その落着いた雰囲気を好んで住んだ町だそうだ。仙女セリナは、その町の、テームズ川に面した通りに立っている街灯の笠の裏に住んでいるのだという。
イギリスには何十万という妖精が住んでいるが、やはり精霊の王様がいて、妖精達には一年に二度ほどの休暇が出るらしい。イギリスで、もっとも妖精達が多く住む処はスコットランドの高地地方だそうだが、セリナのようにロンドンに何千年も住みついている妖精も、かなりいるとのことだ。
妖精達は、休暇をもらうと、それぞれに友達の妖精を訪問し合ったり、世界の各国へ見物にでかけたりするが、スポーツ狂のセリナ・マネットは、競技のシーズンを選んで休暇をとるのだった。
オリンピックは第一回のときから欠かさず見ているし、ことに一九三六年のベルリンに於ける

第十一回大会のときに、三段跳で優勝した牧野平一郎のプレーと人柄に強く魅せられ、以後、一年に一度は、牧野先生の顔を見に日本へやって来るのだ、とセリナは、妙にしんみりとした口調で、

「さっき、ミスター牧野の家を、よそながら訪問してきたわ。でも、もう彼は、私の姿も声も届かないとこへ行ってしまったんだわ」

「じゃあ、前には、あなたのことを？」

「そう。タイスケ・セキグチと同じにね」

「僕の名前、よく知ってるんですね」

「さっき、ミスター牧野が夫人に話してたわ。今日の競技会で有望なのが現われたぞ、って」

「ほんと？　僕はね、牧野さんには、一年に二度位、競技会でお目にかかるわけなんですよ」

セリナは何か考え込んでいるように、しばらくは沈黙して、碧い瞳を閉じたままだった。

「あの、牧野さんは、もうあなたと話し合うことが出来なくなったって、それは？」

僕は思い切ってたずねてみた。

「彼が十五年前に結婚したからよ」

「へへえ……」

「つまり、私は彼を愛していたの」と、仙女はコケットな笑いを唇に浮べ、

「でも、私は人間じゃないし、一つの精霊なのだから、人間的な愛情ではないのよ。わかる？」

「そりゃ、そうでしょうけど……」

「あなたも人間の女性と結婚したら、もうその瞬間から、私と会えなくなるのよ。でも、あなたが、妖精になってくれれば、私と結婚出来るけど……」

セリナは、そっと近寄って来て、僕の肩に手をかけ（手は見えても、感触がなかったが……）いたずらっぽく僕の顔をのぞき込んだ。

「妖精の結婚ってのは、どういう結婚なんです」

「人間的なセックスなんてないわよ。私達は透明だから」

「はあ、成程」

「ミスター牧野がベルリン大会で優勝したときにね、面白いことがあったわ。スタンドで、ふんぞり返っていたナチスの怪物がね……」

「怪物って？」

「ヒットラーよ」

「ああ、そうか」

「ヒットラーが立上って幕僚に怒鳴ったの、競技場にいるミスター牧野を指さしながら」

「何て、怒鳴ったの？」

「あの三段跳の日本人選手の落ち着いている立派さを、わがドイツ選手も少しは見習えってね。そのとき、私がヒョイと彼の手から望遠鏡を引ったくって隠してやったら、ヒットラーびっくりしてんの。しばしわが手を見つめて茫然としてたわ」

「ははは。でも、そんなに牧野さんは立派だった？」

「見せたかったわ。当時、彼は二十三歳よ。丁度そのとき、トラックの準備完了を待ちながら、彼は毛布で体を包み、自分の順番が来るまで、トラックの芝生の上に、のんびりと寝そべって居眠りをはじめたのよ」

当日は、良く晴れた夏の陽射しも爽やかで、風は全く無い絶好のコンディションだったと、セリナは語りつづけた。

このときの日本の出場選手は牧野を入れて三名だった。牧野がオリンピック出場前の最高記録は十四メートル四十だったが、彼も他の二選手も日本の優勝を少しも疑ってはいなかった。一番の強敵は、オーストラリアのメトカルフだ。試合が始まると、まずいきなり牧野は全力を尽して跳び、十五メートル七十六というすばらしい記録を第一回目に出してしまい、メトカルフの闘志を挫いてしまったそうである。

「そのとき、メトカルフはね、さっと青ざめたわよ」

「牧野さんが十六メートルを出したのは何回目でした?」

「六回のうち四回目よ。これで当時の世界新記録は更新されたんだわ」

「一位が牧野さん。二位が原島さん。三位がメトカルフだったそうですね」

「そうよ。お国の国旗があがり、国歌が吹奏されて、ミスター牧野が表彰台上に立ったとき、彼の胸の中へ一番先きに衝き上ってきたものは、何だかわかる?」

「さあ……」

「彼は先ず、今まで自分を育ててくれた環境に感謝したわよ」

「へえ。よくわかったな」
「仙女には不可能なものはないのよ」
「ははあ……」
「彼はすばらしかったわ。順番を待ちながら、ウトウトと居眠りをしながら、あの小さな眼で、うっとりと表彰台を見ては、この次は俺があそこへ上るんだなア、なんてね、もう、ちゃんと決めてるのよ。悠然として堂々たる自信に溢れていたわ」
「ふうん。凄い度胸だ」
「つまりね、戦後の日本選手に一番欠けてるものよ」
「そう。そんなことを何時だったか、牧野先生が洩らしたそうですよ」
「日本は、今度のバカ騒ぎで、ひどい目に会ってるから無理もないけど……」
「バカ騒ぎって？」
「第二次世界大戦とか人間達が言ってるじゃないの。地球上の人間は、みんな生れが同じなのに直接間接に殺し合いをして、相手の血を啜っては命をつないでいるんですものね」
セリナに言わせれば、僕らの住む地球だって、無限にひろがる宇宙の何処かにある星が爆発したとき、放り出されたその欠らの一片に過ぎないのだし、人間の体も何百億年の昔には、その星の中の眼にも見えない何かの元素だったのだそうだ。妖精も、むろん、その宇宙の恵みを受けている精霊のひとつなのだと、セリナは語った。
「人間たちは、それを、とっくに忘れてしまったのよ。地球上の動物にも花や草にも、雲や雨や

雷や海の匂いにまで生命があるってこと忘れてしまい、自分達人間そのものが、いかに不思議なものかということも知らずに、何事も科学だなんて勝手にでっち上げたもので解決しようとするんですものね。神さまが……いえ、つまり大自然が傍からのぞき込んで解決してやったものまで、自分達の科学が解決し勝利を得たのだと思い違いをして大威張り。情ないわ、全く――」

畠の向うの住宅地の灯も消えたようだし、夜も更けていたのだろうが、僕は少しも気がつかなかった。

僕の机の傍にある踏台に腰をかけ、スラックスの脚を組み、両手の指を軽く振りながら語りつづけるセリナ・マネットの声に、何も彼も忘れて引込まれていたのだった。

戦後派の僕が、妖精だの仙女だのに親愛感をもって接することが出来るのは、ひとえに、おふくろが働いていた女学校の図書室のおかげだ。

母は、いわゆる小使さんをしていたのだが、あの性格だから学校の先生や生徒に、ずいぶん親しまれた。

戦争が激しくなって、子供の僕らでさえも、さすがに無味乾燥な世の中を思い切り味うことになった灰色の毎日に、僕は大きな楽しみを得ることが出来たのだ。母の勤め先へ遊びに行くうちに、南先生という女の先生が、僕を図書室へ連れて行って子供向きの本を見せてくれた。

「何時でもいらっしゃい。好きなのをお家へ持ってって読んでもいいわよ」

南先生は図書係りをしていて、まだ女学生のように潑剌としていた。

図書室で、まず僕が目につけたのに、F房発行の〔新訳絵入・模範家庭文庫〕というのだっ

た。日本の国力が膨張の頂点にあった大正の初期から昭和の初めにかけて、当時の中流階級以上の子供たちを目標に発行されただけあって、一冊の値段も高く、がっしりと美しいレザーに包まれた厚味のある手答えや、美しい挿画がふんだんに入っている頁の感触が、わけもなく僕をうっとりさせた。この二十冊ほどの〈家庭文庫〉で、僕はギリシャ神話も読んだし、アラビヤンナイトも、グリムもアンデルセンも、西遊記も知った。

妖精達の現われる物語も幾つか読んだが、わけて印象深かったのは、やはり、バリの「ピイター・パン」だろう。イギリスの少年ピイターが妖精のティンカー・ベルと共に空を飛んで妖精の国へ行き、鰐や海賊を相手に活躍する物語は、目のさめるような色刷りの挿画と共に忘れることが出来ない。

それは、僕のまわりのすべてが西洋の国々と戦争をしている日本の凄まじい険悪な明け暮れだっただけに、尚更、バターやミルクの匂いのする外国の息吹きが強烈に感じられたのかも知れない。

そのことを僕が、セリナに話すと、彼女は「妖精の世界を知らない人には、私達は会うことが出来ないし、ピイター・パンの作者である、イギリスのジェームス・バリ卿には生前お目にかかったことがあるわ」と言った。

おどろいたことには、ピイター・パンに出て来る仙女のティンカー・ベルは、セリナの仲好しで、今でもロンドンのケンジントン公園に住んでいるそうだ。

僕はふと、思いついて、机の引出しからチョコレートの食べかけを出して二つに割り、

「食べませんか？」と差し出したが、セリナは、
「あらダメ。私には胃袋なんてないもの」と手を振って笑った。
「とにかく、おふくろを呼んできます」
「ダメよ。わかりっこないんだから……」
「そうかな」
「あなたのママは、階下で、あなたの兄さんと、あなたを大学にやるかやらないかということで議論をしているらしいわ」
僕には、もうセリナの不思議な力を疑うことなど少しも考えられなかった。彼女のすることは、すべて〝真実〟そのものだったからだ。
「あの、あなたは……」
「セリナと呼んで頂戴」
「じゃア、セリナ……」
「叱ッ。誰か其処にいるわ」
そのとき、部屋の障子がそっと開かれ、薄暗い階段口に、青ざめたおふくろの顔と、酒臭い顔を妙に強張らせた兄の顔が並んで見えた。
「あ、母さん」
「ど、どうしたの。二階でお前の話声がするもんだから泥棒でも入ったんじゃないかと思って……」

「セリナが、来てくれたんですよ。この人……じゃアない、この妖精の女性が、その……」
「バカ。しっかりおし」
おふくろは眼を据えて、僕に近寄り、いきなりピシャピシャと僕の頬を叩いた。
「武信。泰ちゃんが……どうかなったんだろうか、頭の中が……」
おふくろは、もうオロオロ声だった。
兄が、僕を睨みながら部屋へ入って来て、怒鳴った。
「泰助。いいかげんにしろ。三段跳なんて何処が面白いんだ。勉強もしないで遊びに夢中になってやがって」
「勉強だって、ちゃんとしてるよ」
「してるわよねえ」と、このときセリナが僕にうなずいて見せたが、おふくろにも兄にも気がつかないのは仕方のないことだ。しかし、思わず僕が、
「学生の本分を忘れたら、スポーツをやったって何もなりやしないものね」と、後を振向いて、セリナに答えたものだから、兄の眼は吊り上った。
「こらッ。俺を馬鹿にするのか」
僕は頭を撲られた。
「およし。泰は疲れてるんだから――」と、母が兄を止めたが、兄は、すっかり逆上してしまい、
「もうスポーツはやらせないぞ。俺が喰わせてやってる飯を、そんなつまらんエネルギーに消費

されてたまるか。運動に夢中になりすぎて頭まで可笑しくなられたんじゃたまらん。精神病院へ入るようなことになったら、どうする」と、兄は不安気に、

「そんなことになったら入院費だって、みんな俺の肩にかかってくるんだぞ、バカヤロ。少しは……」

少しは考えろと叫ぶつもりだったのだろうが、そのとき、スーッと立上ったセリナが、まだ一片残っていたチョコレートを銀紙からつまみとって、大声を張り上げている兄の口の中へポトンと落し込んだのだ。

兄はギョッとしたようだった。

その次の瞬間、兄の閉じた唇と鼻が、まぎれもないチョコレートのとろりとした味を探り当てたので、兄の顔から、さあーッと血の気が引いた。

セリナ・マネットは、それだけでは気が済まなかったらしく、今度はおふくろの裁ち鋏をとって、兄のオデコに垂れ下っている自慢の長髪を、バサッと切り落したのだ。

兄の驚愕は頂点に達した。

おふくろは眼がよくないし、気づかないようだったが、スタンドの灯だけでも、坐っている僕から約三メートルほど離れた窓際にある裁縫箱の上にあった鋏が、すーっと僕の頭上を越えて、自分の眼前に迫って来たのを、兄は見てしまったらしい。

「うう……」と、兄は何か呻きながら、よたよたと階段口へ出て行った。

「武信。どうしたの？　武信……」

おふくろが追いかけたが、間に合わず、兄は階段を転げ落ちた。
おふくろが、何か叫んで駈け降りて行った。
「セリナ。少し罪ですよ」
「じゃ、今夜はこれで失礼するわ」
「もう帰るんですか」
「あと三分で休暇の時間が切れるの」
「え？　三分でロンドンへ帰れるの？」
「勿論。時間があれば人間達と一緒に飛行機で帰るのも面白いんだけど、今度は日本で遊び過ぎちゃったもんだから——じゃ、さようなら。また来年ね」
「セリナ……」
止める間もなかった。
セリナ・マネットは緑の玉、いや一条の緑の光になって、ジェットの航跡雲よりも速く、窓の外の闇に、吸い込まれてしまったのだ。

4

昭和二十九年の春。僕は、高校を卒業して、梅屋デパートの銀座本店へ勤務することになった。

学生スポーツの国と言われる日本で、競技者としての力を最大限に伸ばす為には、学生であることが一番望ましい。

世界各国のスポーツ界には、それぞれの歴史と国民や国体の性格があり、イギリスでは、貴族または富裕階級の「社交」と「娯楽」としてスポーツが発展してきている。スエーデンは勤労者のスポーツ国であるし、スポーツの職業化が発達しているアメリカも或意味で同じことが言えるだろう。ソ連では優秀な選手を国家が育てる。

戦後、日本でのスポーツの普及も、かなりひろがってきて、民間会社でも運動部を設け、選手を養成することを始めた。だが、これは会社自体の宣伝手段の一つであることは確かだ。

二年後、メルボルンで開かれるオリンピックに出場したいという僕の夢を実現する為には、やはりスポーツ生活の組織が伝統的な強い背骨に裏打ちをされている大学へ進みたかった。

おふくろも、折角有望視されているのだから、と考えてくれて、兄に相談したのだが、兄は絶対に反対だった。

「大学へ行きたけりゃ、夜学にしろ。俺だって夜学だったんだ。父親のないおかげで俺は苦労して、働きながらだ、大学を出たんだぞ」

兄は此頃、何かというと父親のないために自分が新聞社の給仕をしながら、いかに苦しんで大学を出たか、ということを、わざと母の前で強調する。

そんなとき、母は黙って、じいっと哀し気な、そのくせ何処か憐れみをこめた眼ざしを、静かに兄へ向けるだけだ。

兄も出征して九州の沿岸防備をやり、一年ほどで終戦になり復員したのだが、それからの兄は、大分、いや一年ごとに人が変ってきたように思われる。

数年前から、あまり大きくはないスポーツ新聞の芸能記者というのをやっている。兄の受持は主として映画関係なのだそうで、僕もときどき、兄の書いた記事や映画批評を読むことがあるけれど、賞める人も貶す人もきまっている。きまっているかと思うと、またガラリと変る。

「あのM（女優のことだ）のやつ、此頃、少し売り出してきやがったかと思うと、ハナも引っかけねえ。ふん、昔、チンピラ時代に一体、俺と何をしたと思ってるんだ。見てろよ。今に叩いてやるから……」

同僚も連れて来て家で飲んでいるときに、僕は、こんな兄の言葉を聞いたことがある。勿論、義姉のいないときだ。

「昨日ね、東洋映画の試写の後でさ。W（プロデューサーのことだ）がさ、関口さん、お暇なら一寸つきあってくれませんかなんてね、珍らしいじゃないか、あのケチがさ。うむ、大分ハシゴしたよ。あなたは辛辣ですからなア、なんてぬかしやあがんの。うん、あいつもお世辞がうまくなったよ。ああ出られると、こっちも人間だよ。そう叩くわけにもいかんしなあ」

こんなおしゃべりなら何時も義姉にしている。

叩くというのは兄がペンをとり、新聞の上で、その作品や相手の私生活まで発きたてて、大いに貶すということらしい。

新聞の紙面にペンを振うということを、兄は一つの特権だと考えている。僕らスポーツの世界

では、批判は、あくまでも選手を伸ばし育てるという一点以外には何物もない。そうかと思うと、

「ああ、こんなに毎日試写が続いたんじゃたまらんな。商売とは言いながら、ロクでもない映画をぶっつづけに見せられたんじゃ、もうゲンナリして飯も食えんよ」などと放言する。そういうときの兄のひょろ長い顔の、眼鏡の中の眼は優越感にギラギラと光っているのだ。飯も食えんどころではない、兄は映画を批評し、記事を書くことによって毎日を暮しているのではないか。

或るシナリオ・ライターが試写室で、挨拶しなかったからと、兄は逆上して帰って来ると歯を噛み鳴らしながら、その夜のうちにそのライターの作品を叩くべき原稿を、もう夢中になって書いていたことがある。

「まだ足りない、まだやっつけ足りん」と、兄は譫言のように言いながら、何枚も何枚も用紙を破り捨てていたものだ。

つまり、兄は、誰にでもチヤホヤして貰わなくては毎日が安心して送れないのだ。だから自分が無視されることが一番身に応え、今度は反対に狂気のような、怒りをぶちまけるのだろう。

だが、その怒りは相手に対してではなく、無視された自分への不安と劣等感に向って叩きつけていることを、兄はわかっているのだろうか。

だが、大人の社会とはこうしたものなのだろうか。戦争前は、勉強好きで、黙々と机に向うことが大好きだった兄が、こうも変貌してしまったのだから、相手を傷つけることによって自分も傷を受け、自分の受けた痛みを、また相手に返そうとする生活が、大人達の間には絶えず行なわ

れているのだろう。

「武信は、今、他人のフンドシで相撲をとっている。それが私には心配なんだがね」

と、おふくろが何時だか、そう言ったことがある。

とにかく、兄は僕の進学を、あくまで阻止しようとした。

今の家を建てるときに、おふくろは貯金を全部投げ出していたし、女学校から貰う給料では、僕を大学へやるのには少し足りないのだ。

「その足りない分を出してやってくれないかしら?」と、母が相談を兄にもちかけてくれたわけなのだ。

「就職の為に大学を出るってのなら現実性に富んでいる考え方だ。それなら俺と同じに、アルバイトしながら夜学へ行け」

働いて夜学へ行ったのでは、練習など出来るものではない。

「母さんは俺のときには夜学で済まし、泰には人並の大学へ上げるつもりなのか。母さんは俺の親父より泰助の方の親父に好感を持っているのか」

終いには、兄がおふくろに喰ってかかる仕末だ。

「もういいよ、母さん。僕、もう決めたよ」

僕は、母に決意を告げた。

考えてみれば、五十を過ぎたおふくろに働かせて、自分一人がのんびりと大学へ通うことがたまらなく僕を責めたし、丁度、梅屋デパートで、高校時代の僕の記録を知っていてくれて、梅屋

の運動部の推薦もあり、好意的に入社の勧誘もあって、それに応ずることにしたのだった。

社会人として働きながら自分の記録を伸ばしつづけ、オリンピックの聖火を名誉と誇りに満ちて仰ぎ見たいという、僕の強烈なあこがれを現実のものにすることは、考えて見ても溜息が出るほど困難だと思われた。

しかし、やり抜くより仕方がない。僕の生きる道は他にはないからだ。

仙女セリナに髪を切られ、チョコレートを喰べさせられて以来、兄の僕を見る眼は憎しみだけになってきている。階段から転げ落ちたことを（弟の前で醜態を見せた）と考えているようだし、また、あの不思議な事件を何とか自分の神経衰弱症かノイローゼか、酒の酔いが見た悪夢に思い決めようと努力している兄を見ると、僕は微笑を禁じ得なかった。

それにしても当時、おふくろが強引に、僕を病院へ連れて行こうとしたのには困った。

僕は卒業前年の夏（セリナに会った同じ年）に、大阪の中百舌競技場で行われた〝全国高校東西対抗競技会〟で、十四メートル〇八を出し、四位に入ったのを最後に、思い出深い高校生活に別れを告げたのだ。

5

週日のデパートの午前は静かだ。

ことに僕の会社は、戦後いち早く進駐軍に接収されてしまい、接収解除になったときには銀座

のデパートでは、一流のRやSが威力を振っていて、わが梅屋デパートは客足をつけるのに大童だった。

僕は茶の背広に身を固め、受持の文房具売場のケースへ両手をつけ、背伸びしながら踵の上げ下げを繰返していた。

これは脹脛のトレーニングになると思ったから、仕事の邪魔にならないように絶えずやっていたのだ。

僕は孤独だった。

半年前に入社して、すぐに〝東京陸上競技大会〟に、梅屋デパート社員として出場したけれど、良い記録が出ず、五位に辛うじて止まった。同じ同僚の柴村が十四メートル六十六で、見事一位を獲得しただけに、会社も僕への期待が薄らいだようで、そうなると社員としての勤務がある以上、選手としての地位や練習条件が悪くなることは勿論だった。

僕の精神の緊張が、あきらめの誘惑に一歩二歩と引寄せられ、肉体の緊迫は怠惰の魔笑に、おじぎをはじめ出した。

(駄目だ。もう僕は……)

つづいて初夏に行われた〝東京勤労者陸上競技〟と〝関東八都県対抗陸上競技〟の両大会でも、芳んばしい記録が出なかった。

気力も弱まってしまったし、高校時代のようにむきになってトレーニングに打込む時間もなく、余暇を見ては、習慣を思い出したように、練馬にある会社のグラウンドへ出かけ、一人ぽっ

ちで跳びつづけた。
「君。君、ちょっと……」
中年の会社員風の客だった。
僕は上げかけた踵を下ろして、近寄り、
「はい？」
「この二十本入りの鉛筆だけど、中味は同じようだが、このケースとこっちのケースとでは値段が違うね。どこが違うのだ？」
客はプラスチックのケースに入ったT印の鉛筆を指して訊いた。
「はあ。これはケースの値が違います。中味は同じでございますが、お使いになるのは男のお子様ですか、女のお子様でしょうか？」
「女なんだけどね」
「それでは、少々お高いのですが、やはりこちらの……」と、僕は紅色の蓋が美しく透きとおって中の鉛筆を見せているケースを取って、
「毎日お使いになるものですから、やはり女のお子さんの気持に合ったケースだと、蓋を開くたびに、勉強する気分が違うと思いますが……」
「子供だよ、君」
「はあ。小さい方ほど、こういうことに敏感なものだそうです」
「うまいこと言うなア、よし。じゃ、君の言う通りにしよう」

「毎度有難う存じます」と、客に品物を渡して、ケースの前へ戻ると、同じ売場の木村初子が、
「関口さん、うまいわ。私、とてもあんなには出来ないわ」
「そうかナ。でも仕事してる以上、あの位のことはやらなきゃね」
僕は八千円の給料を貰っている。働いて金を貰い、生活をするという厳しさは、おふくろが身をもって示しているだけに、僕は、おろそかに出来なかった。事実入社以来、商品の研究も自分なりにやってきているつもりだった。
それにしても、一日一日と、僕は自分が、デパートの社員になり切ろうとする努力を無意識にやっていることが、淋しくもあった。
オリンピック出場の夢などは、とても達せられそうもない。
メルボルン大会まで、あと二年しかないのだ。
高校時代の十四メートル〇八という僕にとっては最高の記録へ追いつけるどころではなく、今の僕は、精々十三メートル七十ほどしか跳べなくなっている。
僕は、また踵の上下をやりはじめた。消えかかる夢に空しく縋りついているような気持だった。
ハモンド・オルガンのタンゴ「碧空」が、店内のマイクを通して流れていた。
その広々として明るい、だから尚更愁いに満ちた曲が、ひんやりとした秋の気配を、銀座の街から、このデパートの四階の売場へ運び込んでくれるようだった。
「ねえ。関口さん、此頃、どうなの？　調子は」

木村初子が、ケースの傍へ来て僕と並びながら訊いた。
「どうって、別に……」
「でも、関口さん、此頃、哀しそうだわ、眼の中が……」
彼女は僕と同じ十九歳だが、女学校時代には余りスポーツをやらなかったと見える。だから、「三段跳なんて、そんなに面白いものなの？」などという質問をしかけてくるのだ。
「君も、やってみればわかるよ」と、僕は答える。それ以外に説明の仕様がないからだ。
スポーツの雑誌に出ていた、アンドレ・ラランドという人の書いたものに〔スポーツマンは、スポーツそのものが人間生活の品位、本当の意味を形造るところのものが実利的でない或るもの、誰にでも出来るというのではない或るもの、そしていかなる職業教育も与えることの出来ない或るものであることを自然にさとるであろう。それはあらゆる形式下における物質的利益の蔑視と、理想を愛する心（他の人々に言わせれば無用のものを愛する心）である〕というのを、読んだことがある。
この通りだ。理想とは無限の記録と闘うことだし、厳格に定められたスポーツの規則には物質的利益の入り込む隙はない。
「たとえばさ。君が、今、三段跳をやったとするね」
「うん……」
「もし七メートルしか跳べないとするよ」
「ええ」

「それが練習して八メートル跳べるようになったら、どう？　嬉しくはないかな」
「そりゃ……そりゃ嬉しいだろうな」
木村初子は、首をかしげて、
「だから、関口さんはスポーツをするのね？」
「そう」
ハモンド・オルガンが、ルンバの「シボネー」を奏しはじめた。
客が向う側のケースに来て呼んだので、初子は急いで僕の傍から離れた。離れるときに清潔な、まっ白のブラウスの胸ポケットから紙片の折りたたんだのを抜き出し、さッと僕のポケットへ押し込んでいった。開けて見ると、

「お昼のとき、一緒に食堂へ行ってね。おいしい印度林檎を持ってきたの」

鉛筆の太い大きな字で紙一杯に書かれてあった。
初子は、僕が通勤している私鉄の沿線に家がある。入社もほとんど同じだったし、三ヵ月前に、僕が品受係から、この売場へ廻され、彼女と共に働くようになってから、急速に仲良しになったのだ。
練習の暇が多くとれる前の係から、一日中売場に縛りつけられる今の係へ移動させられたのも、会社側が競技者としての僕に、ある程度の見極めをつけたのだろう。

「何だい、今度入った運動部の関口ってのは大したことないそうじゃないか」
「会社も詰らんものを背負込んじゃったな」などという声も、僕の耳へ忍び込んできた。
毎朝、出勤する度びに、高校時代の朝のトレーニングを思い出し、勤めに出ることが情なくなることが多いのだが、そのかわりに、初子が乗車する駅で一たん降り、ホームで彼女と待合せて一緒に出勤し、一日を働くことが、何か今の僕に、暖いなぐさめを与えてくれる。
ラッシュ・アワーの人波に揉まれながら、初子と体をくっつけ合っていると、彼女の小麦色の襟元から搾りたての牛乳みたいな匂いがしてきて、僕は眼のやり場に困ったり、飲みなれないビールをコップに一杯やったときみたいに胸苦しく、顔中が火照ってくるのだ。
競技者としての夢が消えて行く度合に応ずるように、僕の女性への……いや初子への関心がふくれ上ってくるのだった。
もう昼どきに近くなり、客の姿も増えて、通路の向うの書籍売場では昼休みにやってくる近くのサラリーマン達の姿も、ボツボツと見えはじめた。
売場の其処此処で鳴るレジスターの音が、オルガンの音を縫って時折、聞えてくる。
「ねえ。読んだ？」
初子が戻って来て、そっと囁く。秘密めいた情感の交流が、僕をうっとりとさせ、
「うん、読んだ」
僕がポケットへ入れかけた紙片を、一寸つまみ上げて見せたときだ。その紙片は、するりと僕の指から抜けて宙に舞上った。

「あ……」

妖精のセリナだった。いたずらっぽい視線を僕と初子へ交互に投げながら、初夏の陽を浴びた樹々の青葉の煌めきを、そのまま身に纏ったようなセリナ・マネットが、ケースの向う側に現われたのだ。

「セ、セ、セリナ……」

僕は懐しさで胸が一杯になり、ケースの上に首を突出し、思わず叫んだ。

「関口さん！　どうしたのよ」

初子も叫んだ。初子ばかりではない。二人ほど同じ売場にいた店員達も、キョトンと僕を見守っていた。

「な、なんでもないよ」

「だって……」

セリナは、初子を一寸睨んでから、

「トレーニングはちゃんとやっていたの？」

「うん。まあ……」

「せ、関口さんたら……」と、初子。

「いや。なんでもないんだったら……」

「こんなものはトレーニングの邪魔よ」と、セリナは、僕と初子の眼前に、さっきの初子の手紙をわざと突出し、粉々に引裂いて見せた。

「キャーッ」

初子が白い眼を吊り上げたかと思うと、ストンと売場の床に引っくり返った。無理もない。手紙を引裂いたセリナの指も、いや声も姿も、初子にはわからず、鼻の先の空間に浮んだ彼女の手紙がひとりでに幾つもの断片に変って、あたりに散らばったのだから……。

「夜になったらお訪ねするわ」

セリナは、たちまちに緑の玉となり、売場の天井を、ゆっくりと二、三度旋回して一条の光りと化し、丁度扉が開いた彼方のエレベーターの中へ吸い込まれてしまった。

6

その日も爽やかな秋日和だった。僕は、仙女セリナの指示に従い日本橋M町の、或るコーヒー店の一隅に腰をかけ、そわそわと落着かない視線を、窓ガラスの向うに遠く見えるビルディングの一角に投げていた。

この辺りは、デパートや銀行の並ぶ表通りの裏側で、舗道の幅も狭い為か、表通りの喧騒が嘘のように静かな町だ。

店の中は小さいが、さっぱりとしていて、お揃いの青と紅の格子縞のテーブル掛けも清潔だったし、卓上の砂糖壺もピカピカ光っている。

僕の前の卓には、濃い紫の竜胆の花が白い壺に飾られてあった。

この花の茎に指を当て、軽く揺り動かしながら、セリナは僕の前に坐っているのだ。

「ほんとに此処へ見えるのかしら?」

「必ず、毎日。ランチタイムにはね」

「でも、お目にかかって、僕、何と言ったらいいのかな」

「偶然に会ったことにしなさい。その方が自然だわ」

「でも、あなたのことを話しちゃいけないですか?」

「勿論、話せば昔のことを思い出してくれるでしょうけど……けれど、ミスター牧野は、もう妖精の世界をのぞくことの出来なくなった人だもの。わかっていて話も出来ず、私を見ることも出来ないと知ったら、きっと牧野は哀しむに違いないわ」

セリナは、碧い唇をすぼめて苦笑して見せた。

(笑うときも語るときも、僕は、彼女の歯というものを見たことがなかった)

このとき、注文のコーヒーが運ばれて来た。むろん一杯だった。セリナには胃袋がないんだから。

すると、コーヒーを僕の前へ置きながら、ふっと卓上の花壺に揺れ動いている竜胆の花に気づいた女給仕が、

「あら……」と、いぶかし気に窓を見た。

窓が開いていて風でも流れ込んで来たのかと思ったのだろう。窓は閉ざされ、明るい陽射しに濡れている。僕は笑いを噛みころした。

「可笑しいわねえ」
女給仕は、いぶかしそうに呟やいたが、そのとたんに、セリナが指を離したので、花はピタリと壺の中に静止した。
「あ……」
女給仕は唇に掌を当て、ビクッと僕を見た。僕は知らん顔をしてスプーンで砂糖を掬いはじめた。
何度も僕の方を振り返りながら、女給仕は奥へ去った。去ったけれどもカウンターの蔭からじっとこっちを見ている。
「およしよ、セリナ。びっくりしてたじゃないか」
僕は腹話術師のように気を使って、セリナをたしなめた。
セリナは、いたずらっぽく眼をクリクリとさせたが、急に、
「あ……来たわ。来たわよ」と、叫んだ。
僕は、窓ガラスにオデコをくっつけ、外の通りに目を凝らした。
ランチタイムになったと見え、向う側の舗道には、会社員風の男女の姿が何時の間にか溢れ出している。
この店の扉も何度か開けられ、客は僕一人だった店内が急に活気づいてきていた。
その人の群の中から牧野先生が、長身の体を灰色の背広に包み、颯爽とした歩調で、この店へ近づいて来たのだ。

「私、帰るわよ。いいわね？」
「けど、何処へ行くの？」
「九州で日独対抗陸上競技をやってるわ」
「え。見に行くの？」
「一時間ばかりしたら帰って来るわ。ドイツのシュタインズ選手の高障害を一寸見て来たいの」
牧野先生が入って来た。セリナは、嬉しそうに両手を拡げて近寄り親愛の情をこめて、牧野先生の肩を抱き、先生の頬にキスしたのだが、先生は全く気づかず、何事もないように、カウンターでコーヒーをいれている主人に「やあ」と手をあげている。
セリナは僕を見て、肩をすくめて見せ、今日は緑の玉にならないで、人間の姿？　のまま扉を開けて出て行ったが、丁度、外から入ろうとしたらしい老紳士が、内側から開いた扉の向うには誰も居ないものだから「おや？」というように首をかしげて入って来て、考え込んでしまったのが愉快だった。
「おう。関口君じゃないか。どうしたの？　こんな処で」
牧野先生は、すぐに僕を見つけてくれた。
「梅屋デパートへ入ったって噂を聞いたけど……」
「はい。今日は月曜日で……」
「あ。デパートの休日か。何処へ行くの？」
「あのう、神田までちょっと——その帰りなんです。あのう、牧野さんの会社は、この近くなん

だそうですね」
「ああ。よく知ってるね」
「あの、セリ……いや。はい」
「君、コーヒーをもう一杯どうだ？」
「頂きます」
「君、二つね」と、先生は女給仕に注文して、僕の前へ腰を下ろし、
「どう？　やってるかい？」
「はあ……」
それから先生と僕は、たっぷり一時間は話し込んだのだった。
牧野先生は、この近くにあるK鉱山という会社に勤めておられるのだ。先生は昭和十一年（僕が生れた翌年）のベルリン大会で優勝されて間もなく、大学を卒業すると、運動関係の職業に就くことをやめて、その方面から差し伸べられた幾つもの手を振り切って、平凡なサラリーマンとしての生活を始められたのだそうだ。
「僕は、そのとき随分迷ったよ。スポーツ関係の職業につくことは一生スポーツの中に生きられることだしね。でも、僕は、ふっと、正業としてスポーツの中へ首を突込むということが、何だか味気ない気がしたんだ。そうなったら却ってスポーツが面白くなくなるんじゃないかという気がしてね」
先生の豊かな髪の小鬢のあたりには、薄く白いものが交じっていたが、若々しい風貌だった。

余暇さえあれば神宮競技場へ駆けつけて、ひとりスポーツを楽しむという先生の顔は陽に灼けているが、細い眼もまっ白な歯がチラチラと見える唇も、実に優しい感じなのである。

ずっと後になってのことだが、日本の陸上競技界の草分けといってもいい大先輩のS氏（一流新聞の運動部長、その他スポーツ関係の肩書が数え切れないほどある）が、日本のスポーツ界は少しも協力の精神が無いと新聞に書いておられたのを僕が見て、牧野先生にお訊きすると、

「そうかね。僕は知らんな。でもS氏のようにスポーツ界の内部で活動している人には、そういう悩みもあるだろう。またS氏のような人を日本のスポーツ界は必要としている。しかし、僕は、僕自身のスポーツに生きるということだけで満足してるよ。僕のスポーツは楽しむものなんだ。目的があっては、もう成立しなくなるんだ。会社の仕事の余暇に一人でグラウンドを駈け廻り、跳びつづける。僕はそれだけで、充分に生甲斐を感じているのだ」

先生は、ときどき競技大会の審判を頼まれて、懐かしいスタジアムの雰囲気にひたることも楽しいことの一つだと語り、

「君は今、何の為にスポーツをやっている？」

「オリンピックに出場したいからです。そして勝ちたいのです」

「よろしい。今の君はそれでいい。君の闘争意欲を燃やして、スポーツのルールの中で、その肉体と精神を鍛えて勝利を目ざすことだけを考え給え。しかしね、君。とっくに引退した僕みたいな中年になると、スポーツというものが、もっともっと楽しくなるぜ」

「そうでしょうか？」

「人間が生活する為にする職業は、どうしても濁らざるを得ない。その濁りをスポーツで洗い落せるからだ。青春時代のフェアなスポーツマン・シップが何時でも逃げて行かないからな、練習をしていると」

「はい」

「君が今、一番怖いものは何？」

「今の自分の記録が止ったときです。それから、体の故障が起きて跳べなくなることです」

「もしそうなったら、どうする？」

「考えただけでもゾッとします」

「うむ。僕も選手時代には、そのことだけが怖かったよ」

牧野先生は、卓の上に肘をついた掌に顎を埋めて、うっとりと昔のことを想い起しているようだった。

僕は、今の自分が直面しているスランプについて一生懸命、先生にお話しした。

「僕が見てあげようか」

「ほ、本当ですか？」

僕は、もう夢中だった。

「放って置くには惜しいものな。つまり君は、まだ技術的なことをよくマスターしてはない」

「そうなんです。僕は何も知らないのです。自分一人きりの練習ですから、何処が良いのか悪いのかサッパリわからないので、不安で仕方がないんです」

「会社にはコーチがいないの？」
「おりますけれど、高校時代のコーチとそれほど変りません。僕の知っていること以上には……」
「そうだろうな。それはそうと、君は何時からやりはじめたんだい？」
「小学校の時から走るのが得意でした」
「運動会の度びに一等をとったね。僕もそうだったよ」
「中学でも負けたことはありませんでした」
「僕達は生れながらに走る能力を持っておったんだな。走る、練習をする、また相手に勝つ、尚更、走ることが面白くなる」
「そうです。そうなんです」
「三段跳は何時から？」
「中学時代からです。始めると走ることよりも面白くなって……」
「君が一昨年の東京インターハイで優勝したときは、たしか十三メートル……」
「三十二です。あのときの僕を覚えていて下さったのですか」
「うん。有望だと思った」
「僕は審判席の先生（自然に先生という言葉が出たし、牧野先生もそれを怪しまなかった）を、ただ遠くから見ては、先生のような方にコーチして頂いたらなア、なんて夢を見ていたものです」

「その夢が実現したというところかね」
「はあ。僕、嬉しいんです」
思わず、僕の眼に熱いものが溢れ出て、その一点がテーブル掛けの上へポトリと落ちた。
「偶然に此処で君に会えたことは、よかったな」
「はあ……」
よほどセリナのことを口に出そうかと思ったが、そのとき牧野先生は、チラッと腕時計を見て、
「あ、もう時間だ。会社へ帰らなきゃいかん。ねえ、関口君。もうそろそろシーズンオフだし、それに僕は二、三日うちに関西へ出張しなくちゃならないんだ。一ヵ月ほどかかるから……どうだい、来年のシーズンからやろうじゃないか」
「はっ。有難うございます」
「それまでに、先刻注意しといたことをよく考えて、一人でトレーニングしておき給え。その代り、来年からは、猛然とやろうな」
「はい」
先生を会社のあるビルの前までお送りして、一人でニヤニヤしながら歩き出すと、何時の間にか、曲り角のポストに寄りかかっているセリナ・マネットの微笑が、僕を迎えた。
「あ、もう九州から帰って来たの」
「期待してたんだけど、シュタインズ選手ったら九台目のハードルを失敗して番狂わせだったわ。で、どうだった？　うまくいったようね」

「僕をコーチして下さるって……」
「そう。それはよかったわね」
腹話術的な声の出し方も忘れて、俺はセリナと肩を並べて舗道を歩みながら、夢中で牧野先生のことを語りはじめた。
道行く人達が僕を見て呆気にとられているらしかったが、そんなことはどうでもよかった。
僕は、幸福だった。

7

三段跳は躍競技（ジャンピング）の一つだ。
連続する三つの跳躍を合せた距離によって勝敗を争う競技だ。三千年も前にオリンピック発祥の地、ギリシャで行われたこともあるらしいが、一八九六年に近代オリンピックが復活してからは、北欧のスエーデンやフィンランドが、この競技に力を入れてきたようだ。一九二八年に第九回オリンピック大会がアムステルダムに開催されたとき、日本のS氏が十五メートル二十一を跳んで優勝して以来、日本スポーツの特技とまでいわれていたが、戦後は各国の名選手の目ざましい記録の更新によって、日本の誇りは失われている形だった。
三段跳は三つの跳躍のバランスを崩さず、固い地面に二回も着陸して脚を踏ん張らなくてはならない。この強い衝撃に耐えられる脚を持ち、身体の、あらゆる部分が良く利く肉体が必要なの

だ。だから背の高く大きな体よりも中肉中背の日本人に向いているのかも知れない。

助走路を走り、踏切板で利足（僕は右の脚だ）を踏み切って跳ぶホップ（第一跳躍）、利足で着陸して反対の脚で跳びステップ（第二跳躍）、その脚で着陸し、今度は巾跳のように両脚が跳ぶ最後のジャンプ――このいずれもが、強い脚のバネと快適なリズムを活かさなくては跳び切れない。踏切板を一センチでも爪先が出れば反則になるし、最後のジャンプで尻餅をついてもダメである。

助走路を走るスピードの強め方ひとつが跳ぶときに微妙な関係を生じるし、跳ぶときの姿勢如何によって、その記録は縮まりもし伸びもするのだ。

微妙なコツとカンが選手に要求される競技なのだが、僕は牧野先生のコーチを受ける前までは、こうした肉体と精神の均衡が生み出すコツやカンを、どうして覚え、身につけたらいいのか、全く五里霧中だったものだ。

僕は来年のシーズンまでに、出来るだけ足首だけでも鍛えておこうと考え、例の売場でやる踵の上げ下ろしのことをセリナ・マネットに話すと、

「そりゃ、良い考えだわ。つづけておやりなさい。その他に、私がもっと面白くて、もっと足首を鍛えるトレーニングの方法を教えてあげるわ」

「本当？」

「ああ、人間なんて世話がやけるわね。私が跳んだら百メートルでも千メートルでも跳べるんだけど」

「三段跳で？」
「イエス。あなたにだって世界新記録を示させようと思えば、わけのないことだわ」
「へえ、どうやるんです」
「試合のとき、あなたと一緒に私が跳ぶわね。そして、ホップ、ステップ、ジャンプ！　そのジャンプのとき後ろからうンとあなたの体を突飛ばしてやれば、少くとも五メートルは違うじゃないの。私の姿は誰にもわからないし」
「そうすると、今の僕は十三メートル五十位だから……十八メートル！　断然、凄い」
「当分、誰も破れないでしょうね、その記録は――」と、セリナは笑って、
「でも、私がいないときは、たちまちに十三メートルよ」
「ああ、そうか」
「スポーツは人間が行うものよ。だからこそフェア・プレイでなくちゃならないし、その為に厳しい規則が定められているんだわ。スポーツにルールが必要なのは、何だかわかる？　それを突き詰めていくと、これは人間の邪心を押える為にあるわけよ」
「あ……そうかもしれないね」
「はじめっから邪心を起す余地がないとわかっているから、スポーツマンは勝利の目的に対して、フェアにやらざるを得なくなるんだわ」
「少し、ひどいな、それは」
「いえ、だからこそ、スポーツの神に仕える人間はよ、肉体と一緒に精神までもフェアになって

くるんだわ」

月の光で、あたりは銀色に光っていた。

遠くで私鉄の響音が聞え、虫の声があたりを満たしている。

僕の家の近くの、丘の上にある神社の裏手の雑木林の中で、僕はチョコレートを食べながら、セリナと語り合っていた。

草の上に坐っているセリナの緑の姿態は、青い月光に妖しく浮び上っていた。

「三千年も前に、ギリシャ人がオリンピックというスポーツの祭典を始めたのも、人間のフェアな精神を、血なまぐさい人間同志の闘争の中から見つけ出して、人間の立派さや強さを高らかに讃えようと考えたからなのよ」

「その当時も年中戦争があったらしいね。僕、歴史で習ったけど……」

「人間はこの世に生れ出たとき、すでに他の動物や、嵐や雨や、山や海や、暑さや寒さと猛烈に闘わなくてはならなかったから、他の動物より闘争本能は激しいのよ」

「だって、僕は人を傷つけたりなんかしませんよ」

「それに限るわ。あなたはスポーツに、闘争的なエネルギーを消費しているからいいのよ」

「はは……」

「ギリシャの人達は、この仕末に終えないエネルギーをスポーツの中に処理しようとしたのよ。それにはまず自分自身の肉体と精神の中の悪魔を自分自身で征服しなくてはならないことに気がついたわけなの。その為にスポーツというものを生み出した人間は馬鹿じゃないわね」

「でも、それと同時に人間は強くなりたかったんでしょ？」
「そりゃそうだわ。だって三千年も前の人間達は、まだ猛獣や暴風雨の恐怖の中で縮込まっていたんですものね。だからスポーツによって記録を伸ばし、肉体の力を強めることによって、人間は何よりも一番強いものだという信念を持とうとしたのよ。そしてごらんなさい、お伽話の夢としか思えなかった空を飛ぶこともやってのけたわ」
「飛行機のこと？」
「イエス。ところがね。だんだん増長しちまって、今の人間は自分一人で空を飛んでいるつもりでいるのよ。飛行機に使っている材料も、動力も、飛行士が着ている皮のジャンパー一つだって自然の宝庫から掘り出したものだってことを忘れているんだわ。それにね……」
と言いかけて、セリナは、ふと雑木林の下に、白く光っている駅前からの道を指して、
「あら。あなたのお兄さんよ」
「あ、ほんとだ」
兄は今夜も酔っぱらっているらしく、ふらりふらりと影を道にゆらめかせながら、歩るいているのだった。
「奥さんは、まだらしいわね」
「義姉さんは銀座の酒場に勤めてるんだもの。もっと遅いんだ」
「彼女は働いたお金を、みんな自分の衣裳や装飾品に使ってしまうわね」
「兄貴の給料だけじゃ、文化的な生活が出来ないんだって……」

「フム、フム……あなたの兄さんは、スポーツが嫌いらしいわね」
「大嫌いさ。でも文学は好きなんだって」
「あら、ほんと。でも文学だって人間の肉体が生み出すものよ」
「そうかな」
「立派なジャーナリストは、自分でなければ出来ない仕事をするわ。兄さんは他人の仕事を見ては、自分にそれだけのものを生み出せない劣等感があるのね。今の彼はね、世の中で自分以外には誰も出来ないんだというものを一つも持っていないの。だから不安なの、毎日が怖いのよ。怖いから噛みつくんだわ」
兄の姿が遠去かり、住宅地の一角に消えると、セリナは急に立上り、
「さ、足首のトレーニングよ」
「何をするの？」
「タップダンスを教えてあげるわ」
「タップダンス？」
「そうよ。タップ・ダンスは肉体のバランスに対する感覚を養うのにはよくてよ。シーズンオフの間、ランチ・タイムの休みにでも屋上のコンクリートの上でやってもいいじゃないの」
「ははあ……」
「タップを踊るのには爪先にとても力がいるから、足首を鍛えるわよ」
妖精セリナの神通力には、僕も驚いた。

セリナは、すぐに緑の玉となって夜空に吸い込まれたが、すぐに現われ、僕の手を引いて神社の裏手の空地へ連れて行った。

其処には十メートル四方もあるタップ・マット（タップダンス用の床）が敷かれてあるではないか。

空地は雑木林に囲まれ、月光と虫の声と、それからセリナと僕だけしかいなかった。

セリナは緑のジャケットから金色の小さな箱を取り出して、

「私の音楽箱（ミュージック・ボックス）よ。この中には世界中の音楽を詰め込んであるわ」と、こう言って、その箱の中へ指を入れて動かした。

音楽が低音のすばらしい響きで聞えはじめた。

曲は、ジャズのようだ。

「いいこと。私が模範を示してあげるから、よく見ているのよ」

セリナ・マネットは音楽の箱を草の上に置き、タップ・マットの上へ出て来た。

トランペットが弾力的に飛び廻り、ドラムの音が霰のように散らばり、虫達を驚ろかせた。

セリナは胸がときめくほどの見事さで、振りかかる月の光を飛沫のように弾きつつ音楽そのものと化した。

リズミカルに、マットの上に鳴る彼女の脚の軽やかな動きは、毛糸を編む僕のおふくろの手捌きのように鮮やかだった。

8

「今のは悪い。もう一回だな」と、僕と同じトレーニング姿の牧野先生はピット（ジャンプ場）から戻って来た僕の腕を摑んで一言々々に力をこめ、ゆっくりと言った。
「何度も言う通り、体の起し方が足りないんだ。跳ぶときに上体を起せば、脚の上に上半身が乗っかる。だから地を蹴って跳ぶ脚の力を、無駄なく体全体にこめることになるんだ、わかるだろう？」
「はい」
「腰がくだけると、脚の力が他へ逸れてマイナスになるんだぜ。よし、さア、もう一回だ」
僕は、牧野先生のすすめで、今までは三十一メートルだったのを四十二メートルに伸ばした助走路の彼方の、踏切板を睨んだ。
日曜日の夕暮れで、日中の生暖い空気も、少しずつ冷んやりと汗ばんだ肌に纏いついてくる。昭和三十一年のシーズンに入ったばかりで、この練馬にある会社のグラウンドには、僕と先生の他には誰もいない。
夕焼けが空を染め、グランドを囲む桜並木の花も散って、新鮮な若葉の緑が、薄くあたりに立ちこめた靄のような春の気だるい大気の中から、鮮烈に匂って来るようだった。
先生のコーチを受けるようになって、丁度丸一年経つ。僕も二十一歳になっていた。それにし

ても、去年は、どうしたことか、あの仙女セリナは、日本を訪れて来なかった。セリナのことについては何度先生にお訊きしようと思ったか知れないが、彼女からかたく口止されているので我慢をするより仕方がなかった。

あれから、僕の記録はグングンと伸びた。

休みでもない日曜日に、会社が僕一人をグラウンドへ出してくれるのも今年のオリンピックを目ざしての僕の実績に期待を持っていてくれるからだろう。

事実、去年の〝東京選手権〟には十四メートル七十九で優勝したし、走巾跳にも出て、これは五メートル八十三で二等をとった。

夏の〝東京陸上〟でも優勝したし、つづいて山口県宇部市で行われた〝全国勤労者陸上競技〟には東京代表として十四メートル七十八。これは三位になった。

今年もシーズン最初の〝東京選手権〟で十四メートル八十八を出し、優勝している。これは僕の今年での最高記録だ。

去年の夏から、会社は僕の職場を、また元の〔品受係〕へ移してくれた。この係は、売場から廻って来た品物を伝票と照合して、配送の方へ廻す係りで、盆暮の忙しいときを除いては全く暇なところだ。その上、月給が千円も昇給したのだ。会社側も、僕が牧野先生の指導を受けていることを知るとすぐに先生のところへ挨拶に行ってくれたし、先生の休日である日曜には、ほとんど朝から僕をグラウンドに出してくれる。

（スポーツは勝たなきゃ駄目だ）

つくづくと僕はそう思った。一年前までの心身ともにスランプに落ち込んでいた頃と比べて、嘘のように有利になった今の環境に感謝しながら、僕は、あと僅か半年後に迫ったオリンピックに、出場出来る為の記録をつくるべく、死物狂いだった。

今年は、オリンピック候補を厳選する為に全国的な競技会も多いのだ。その一つ一つに僕は生き残り、記録を勝ち取らねばならなかった。

しかし、一年前に十四メートルへどうしても届かなかった僕の脚も、この頃では何回も十四メートルを越えることが出来た。みんな牧野先生のおかげなのだ。

おふくろも、さすがに、「オリンピックにお前が出るか出られないかと言うのじゃ大変な瀬戸際だ」と眼の色を変えて、兄夫婦には内証で、栄養になる食べ物をこしらえてくれては、弁当箱にそっと隠し、朝の出がけの僕に渡してくれるのだった。こんなところを見つけようものなら、兄は、「泰にばかりうまいものを食わしている」と、嫉妬して当り散らすから大騒ぎになる。

僕の家から練馬のグラウンドまで約一時間半。僕は毎朝五時に起きて出勤前の練習を済まし、デパートが終って夕方に牧野先生の会社へ駈けつける。此頃では、ほとんど毎日のようにコーチして頂くので、全く申しわけないと思うのだが、先生は何時も待ちかねていたように練習着とスパイクの入ったボストン・バッグを提げて飛出して来られるのだ。

「さア、今日はいくらかマシなところを見せて貰えるかな」と、いかにも期待と希望に満ちた明るい声をかけて下さるのだ。

「君の足首は、なかなか強い。それは実に素敵なことだぜ」と先生は言って下さったが、たし

かに、シーズンオフの冬の間、セリナが残して行ってくれた金色のマッチ箱のようなミュージック・ボックスとタップ・マットを使って、僕は朝と夜、雨の降らない日には必ず神社の裏の雑木林へ入って行った。この彼女の贈り物は、林の中の空地の枯草の上に置きっ放しになっているのだが、僕以外の誰にも見ることや使うことは出来ない。

昼間、行って見ると、枯草の上を近くの子供達がチャンバラごっこをしている。人気ない早朝か夜更けに、ひそかに僕がタップ靴（シューズ）をぶら下げて出かけて行くと、もう凍るような星の光りを浴びて、マットが敷かれ、その上に金色の音楽箱が僕を招いているのだった。やって見ると（と言ってもセリナの速成教授で、あまりダンスの形になっていないことは確かなのだが……）意外な位、タップダンスというものが足首の力を使うものだと知り（これは確かにいいぞ）と雀躍したものだ。

シーズンオフ以外は、仲良しの木村初子と映画を見に行く暇も惜んだ。

「でも我慢するわ。オリンピックですものね」と、彼女は言ってくれて、競技会には必ず応援にやって来てくれる。彼女も今では、あのときの卒倒事件を自分のノイローゼだと、やっと思うようになった。

とにかく疲れも激しかった。練習中に疲れ果てて、吐いたことが何度もある。

三段跳の他に走巾跳も砲丸投もやった。

走るスピードを速めろ、と先生に言われて、百メートルを繰り返し繰り返し走った。そのおかげで、前には十三秒かかったのが十一秒九まで出るようになった。これらの総合的な練習を、牧

野先生は細心に気を配って、そのすべてを三段跳に結びつけるように指導して下さった。

そして僕も、この競技の複雑さ難しさが、やっと少しわかりはじめてきたのだった。

科学的な練習法と一口に言っても、スポーツは、あくまでも選手自身のカンやコツだ。健康が上々でも、この運動神経の繊細なうごめきを忘れてしまったら、いくらやっても無駄なのである。

コツといっても筆や舌ではうまく言えないが、たとえば踏切って飛び上るとき体が寝すぎる、もっと起きなくてはいけないという先生の教えを、或程度呑み込めたとする。その次にスピードを速める為の百メートルの練習をして跳ぶ距離を伸そうとかかり、これも或程度に覚える。しかし、この走る練習をしているうちに、前に呑込んだ踏切って跳ぶときの体を起すコツを忘れてしまいそうになるのだ。これでは元も子もなくなる。①のコツ②のコツ③のコツ④のコツ——その一つ一つを肉体の感覚で覚えるたびに、覚えたものを決して忘れてはならない。

スピードを出すことばかり気にして、跳ぶコツを忘れると、折角上昇した記録が二度と出なくなる。

そういうときにスランプがやって来る。

そして苦しみ喘ぎながら、前に覚えたカンとコツを再び取戻そうと、跳んだり走ったり、投げたり、惨憺たる練習の連続になるのだが、

「よし、今度は前に戻ったぞ」

じっと見ていて下さる先生の言葉に我に返ると、記録はスランプに落ちる前のものに戻ってい

るのだった。恐ろしいようでもあり、それだけに僕は、スポーツの深淵をのぞけた嬉しさと昂奮に、身を震わしたことが何度もあった。

スポーツに無関心な人でも、三段跳の分解写真を見れば、僅か数秒間に十数メートルを三つに分けて跳んでいる競技者の脚や腕や体が、いかに複雑な技術を駆使しているかが、よく解ることだろうと思う。

「よし。大体いい。これでやめよう」

牧野先生は、ピットの砂を払って立上った僕を手招きして、

「最後に俺がやってみる。記録の方はもうサッパリだが、形では負けないぞ。よく見ていてごらん」

今年、四十五歳の牧野先生の体には全く贅肉が乗ってはいない。

やはり運動選手だった奥さんと（先生の恋愛結婚はスポーツ界でもかなり知られている）二人のお嬢さんも、たまにはグラウンドへ来て先生と一緒にスポーツを楽しむほどだし、先生が助走路を走り出すと、それは少しの無理もない軽やかな走法で、フォームの見事さは、しばしば僕をうっとりとさせる。

先生が夕闇を切って跳躍した。

「ウハハハ――十三メートル十八、位だな、こりゃア、君の高校時代より悪いよ」

しかし、大したものだった。引退して二十年近くになるというのに、ときたま先生は十四メー

トルもやることがある。

ベルリン大会の先生の跳躍を撮ったフィルムは世界各国の選手達によって貴重な研究資料となり、その見事なフォームは、それ以来三段跳の模範とされたものだ、現在、先生の世界記録はブラジルのダ・シルヴァの十六メートル五十六によって破られている。

「記録というものは無限の希望だよ」と、これは牧野先生の口癖だった。

汗ばんだ先生と僕の体を、冷えた微風が素晴しい感触で撫でて行く。

「さ、整理体操、やるぞ」

軽い体操のうちに激しい呼吸は静まり、気だるく快ろよい疲労感が、たとえようもなく充実したトレーニングの後味を骨の髄まで沁み渡らせてくれる。

桜並木の彼方の町で、豆腐屋のラッパの音が、夕靄を縫って聞えてきた。

「良い気持だなア、関口」

「良い気持ですねえ、先生」

練習の後、何時も交し合う言葉だったが、僕は快適な練習後の、このひとときこそ、〔幸福〕とはこういう気持のものなのだと感じないわけにはいかなかった。

練習後の、この一刻はスポーツマンだけが味える、このすばらしい幸福感に満たされた時間を、僕は決して、死ぬまで終生忘れ得ないことだろう。

「もうじき、岐阜で〝全国実業団対抗〟があるな」

「はあ……」

先生は、ゆっくりと深呼吸にかかりながら、
「俺は行けない。一寸、会社の出張があるんでな」
僕は、がっかりした。先生が審判員として出場してくれると、一回跳び終ってピットから戻りかける度びに、小声で、
「今のは何処々々がいけなかったぞ」とか「よし。今の調子！」とか適切な注意を与えて下さる。それが次に跳ぶときの僕を、力強く守ってくれるからだ。事実こうして、僕は試合のときにでも調子を上げることが出来たのである。
「大丈夫だ。幸いに、このお前の会社のグラウンドの土は弾力もバネもあって、とてもいい。練習場の良し悪しで選手の力は伸びもするし縮まりもする。俺も山口県で少年の頃にやっとったグラウンドの土が、とてもよかったので、後に少し悪い競技場で跳んでもリズムが変らなかったからな」
「はあ」
「今日は、これから俺のところへ来ないか。女房が何か御馳走するそうだ」
「はい」
バス・タオルを首に巻いて、グランドを管理人室の方へ歩きかけて、先生は、ふっと立止り、僕を振向いてニヤリと笑った。
「……？」
「あれは誰だ？」
見ると、木村初子だった。管理人室の傍の白いペンキ塗りの門のところに、見覚えのある黄色

の春のセーターが、じいっとこっちをうかがっているのだった。
「お前は、あの娘が好きなんだろ」
「いやア……」
「ときどき、見に来るじゃないか。俺にはみんなわかってるんだ」
僕が頭を掻くと、先生は暖い声で、
「いかんとは言わないが、気をつけてな」
「はい」
「適当なところで恋愛していると、不思議に記録が伸びるもんだが……」と、先生は、くすぐったいような含み笑いを洩らして、
「なあ、そうだろ？」
「はい」
「まあ、いい。じゃア、今日はやめるか」
「いいえ。いいんです。構わないんです。またスポーツのお話をうかがいたいんです」
「そうか。じゃア来い」
先生は淡々としている。初子と一緒に帰り度くもあり、先生のお宅へ行きたくもある、という僕の心境なのだった。
僕は、先生にわからないように、そっと彼女に手を振って見せ、門の前を通り過ぎて更衣室へ歩いて行った。

9

間もなく岐阜市で行われた〝全国実業団対抗競技大会〟の当日は、生憎土砂降りの雨だったが、牧野先生に言われて助走の距離を伸し、スピードをつけて走る練習が利いたのか、僕は十四メートル七十八で二位に食い込むことが出来た。

牧野先生に報告すると、

「まあ、調子は落ちていないようだな。なんとか十一月（オリンピック開催の月）まで調子を保たせろよ」と励まされた。

スポーツ神経が働くのに一番いい調子の波は、人によって違うが一年のうちに決まったうねりがある。牧野先生がベルリンで優勝したときは、その調子が絶頂にあったときだ。

「調子を整えるということが何よりも試合には大切だ。これは選手の心掛け一つだよ」と、先生は何時も言われる。

僕が岐阜へ出かけて五日ばかりの留守中に、兄の武信と義姉の邦代が離婚するという事件が起った。

義姉は、確かに美しい人だった。その美しさは、香水と化粧の強い香りによって生き生きとしてくる。起きたばかりの青く腫んだ顔が、夕暮れの化粧で別人のようになる。

義姉が、何かのことで僕やおふくろのいる二階の六畳へ入って来ると、たちまち部屋中に甘酸

ぱいような彼女の体の匂いが立ちこめるのだ。

兄と結婚して一年もすると、元の勤め先の酒場で働き出した。その頃から特に兄の飲酒は深くなったようだ。

おふくろも給料の大半を家計に出しているのだし、一家四人が食べて行くのには困らないのだが、いよいよ離婚だというときに、おふくろが、

「じゃア、どうしても駄目なの？」と訊くと、

「もう一度やり直すわ」

「そんな位なら、何故、武信と一緒になったの？」

「あの人が、もっと出世すると思ったもんだから……」

これには、おふくろも吹出して、

「そりゃア、どうも。でも何とか食べて行けるじゃないか」

「食べてくだけなら乞食でもやってるわ」

「じゃ、あんた。贅沢するつもりで結婚したのかい？」

「だって、あの人がうまいこと言うんですもの。もうじき部長になるとか、月給の他にいくらも収入があるとか……」

「そりゃ、あんたが好きだからよ」

「嘘よ。チンピラ女優を手玉にとってるわ」

「そんなこと本当かしら？」

「喧嘩すると何時も、そう言って自慢するわよ」
「口だけさ。何も出来る男じゃないよ」
「そんな男と一緒にいろと言ったって、土台が無理じゃないの、お母さん」
「こりゃ、失言だったね」
こういう調子で、おふくろと義姉とは、そんなに仲も悪くない。義姉が御機嫌のときには、おふくろへ洋菓子の包みなど買って来ることもあった。
兄も離婚には平気だった。少くとも平気を粧っていて、
「俺もやり直すよ。今度は処女を貰うからな」などと、義姉に毒づいていた。
おふくろも、いよいよ駄目だとわかると、嘆息を洩らし、義姉に、
「出来れば、男も女も、結婚の相手は一人で固まるといいねえ。クセになるよ。お金や人柄だけではなく、何度でもやり直せば、もっと良い相手が見つかるような気がするもんだし。そのうちに女は年をとっちまうからね」
「あら。お母さんにこんなこと言われると、びっくりするわよ」
「私が失敗してるからいうのよ」
「でも、もう一度探してみる」
「理想の人を？」
「そう。何処かにいるわ。めぐり会わないだけよ」
「男と女のことだもの。大した変りはないと思うけど……でも、今の世の中は、それでなくても

眼が散りすぎるからね。眼や耳に入ってくるものが多すぎるよ」

義姉が出て行ってしまうと、なお一層に、兄の酒がひどくなった。

或夜、珍らしく便所へ起きて、暗い階段口へ出た僕は、ハッと息を呑んだ。階下の部屋の暗闇から、掠れた笛の音のような、兄の啜り泣きを耳にしたからである。

僕は、このときほど、兄に愛情を感じたことはない。

便所は我慢して、そっと床へ戻った僕は、隣りの床に仰向けに寝ている母の眼がキラリと光っているのに気づいた。

「か、母さん……」

「武信。可哀そうにね」

10

息をつく間もなく、すぐに神宮競技場での〝東京勤労者競技大会〟だった。

第一日目の走巾跳に出場する僕が、選手達と一緒に、控室から競技場へ出て行くと、ピットの附近に他の審判員と共に談笑していた牧野先生が近寄って来て、僕を招いた。

濃紺のブレイザー・コートに白ズボンの先生は、

「関口……」と、僕の肩に両手を置き、「君は、今日七メートル跳べるぞ」と言い切って、さっさと審判席へ戻って行かれた。

巾跳での僕の最高は六メートル八十三なのだ。
（とても、そんなに……）と自信はなかった。体の調子は上々だし、確信をこめた先生の一言に、僕が気負いたったことは言うまでもない。
跳んでみて、僕はびっくりした。
七メートル十七という記録が出たではないか。
嬉しさと昂奮で、わなわな震えながら、先生に、
「お、おかげさまで、と、と、と……」
「跳べたな」
先生は気の遠くなるような微笑で僕を包んでくれて、
「君は明日、三段跳で十五メートルを、絶対に越える」と、事も無げに、そう言われるのだ。
「し、しかし先生……」
「自信を持っていいよ」
「ほんとでしょうか」
「本当だ」
先生の体に、まるでセリナ・マネットの神通力が乗り移ったようだった。
翌日も快晴で、初夏の爽やかな陽光は、緑の芝生と赤褐色のアンツーカーに燦々と降り注いでいた。
僕は自信に満ち、一回また一回と調子を上げていった。その度びに、牧野先生が例のごとく、

短い激励と暖い助言で、僕の自信をふくらませてくれる。
僕は、芝生のベンチに順番を待ちながら、ふっと思った。
（僕は此頃、手袋を編まなくなったな）
何時頃からだろう、編棒を動かしながら気を静めようと焦ることを止めたのは……。
三回、四回、五回——そしてラストの跳躍で、遂に僕は待望の十五メートルを切ったのだ。
十五メートル三十三！　ライバルのY大学の小田選手を抜いての優勝だった。
「お、お、おかげさまで……」
あとは涙が出て、出た涙が塩からくて……。
しかし、牧野先生は、
「当然だ！」と一言、それだけだった。

十五メートルを越えたということは、それでもうオリンピック選手の候補になれたということになるのだ。会社側の力の入れ方も、これで本格的になり、牧野先生を僕のコーチとして招きたいということで礼をつくして先生のところへ会社の重役が挨拶に行ったほどだが、先生は「そんな改まったことをせんでも、君を見てやる」と言われた。
夏から秋にかけて、僕はどういう風にしてその日その日を送ったのか、よく覚えてはいない、会社側も、ほとんど僕の勤務を免除してくれたし、もう毎日が練習と睡眠に明けては暮れ、暮れては明けた。

先生の指導は倒れて後に止むという様な激しさはない。「もっとやれやれ」と僕に鞭打ったりはしない。もし、僕が「今日は、これで……」と申出たとしたら、言下に「よし。やめよう」と言われるに違いない。

しかし、こちらが喰い下って、あくまでもやるぶんには何時間でもよろこんでグラウンドの土を踏まえ、コーチして下さるのだ。僕は幸いに「よし、やめる」と先生が言い出されるまでは決して止めなかった。本当のところ「今日はもう……」と言いかけたことも何度かあったが、どんなにキツくても、どうやら我慢しつづけた。誰の為でもなく自分の為だからだ。

秋田市で行われた〝全国勤労者大会〟には十五メートル四十に上昇して三位。つづく神宮競技場での〝全日本選抜競技〟で十五メートル四十三を出したが反則（ファール）になり、四位に止ったが、実力は衆目の認めるところとなり、僕は、オリンピック候補選手の合宿へ参加することが出来た。

合宿練習は、日本体育協会によって長野県の松本市で開始された。牧野先生もコーチとして参加されたが、合宿が始まって三日目の夜。突然、先生の勤務先のK鉱山からの電報で東京へ呼び戻された。

すぐに戻られると思っていたのに、（間もなく）僕が耳にしたことは、僕を不安と悲嘆の底に突き落してしまったのである。

先生は、日本石炭協会の推薦により、ドイツのエッセンという街へ出張（しかも三ヵ年もだ）することになったのだ。

オリンピックを前にして、これからの大事な競技会に必ず先生は審判として出場されることに

なっていたし、僕は自分の跳躍の一回また一回を、すぐその場で、先生の適切なコーチによって立派な跳躍にして行けるという大きな安心があったのだ。

試合の場処で、澄切った先生の眼ざしを、この身に受けるだけで僕は自信が湧いてきたのに……。

「女房も子供も一先ず日本へ残して、俺一人が先へ行くつもりだ。前々から話はあったんだが、決定的なことではなかったんで、お前にも知らせなかったんだが……」

練習中の僕をグラウンドの木蔭に招き、合宿へ帰ってきた先生はドイツ出張のことを話された。びっしょりかいていた汗も、一度にひく思いで、ポカンと口を開けている僕に、先生は、

「オリンピックへは必ず出ろよ」

「でも……先生……」

「でも、何だ？」

「先生がいらっしゃらないと、僕、うまく跳べるかどうか……」

「跳びもしないうちから自分を疑うやつがあるか。それでは人間じゃないぞ。アマチュアにとってオリンピックの祭典を行う選手に選ばれることは、最大の誉だ。このことはお前の一生に絶えざる栄光をもたらすんだぞ、わかるな」

「はい」

「外国旅行が官費で出来るとか、オリンピック出場の名誉を就職の武器に替えるとか……勿論、考えてはおらんな？」

「いません」
「オリンピックに出るということは、第一流のスポーツマンになれた、ということだ。それは……わかるか？」
「自分に勝てたということです」
「そう。では俺は行くぞ」
「先生。駅までお送りします」
「いらん。練習をつづけろ」
牧野先生は、僕の手を握ろうともしなかった。
一瞬、落着いた、むしろ冷ややかな視線を僕に与え、先生はくるりと振向くと、そのまま、もう一度も僕を見てはくれなかった。忍び寄る夕闇を縫って、その姿は遠去かり、消えてしまった。
茫然と僕は空を見上げた。
そのときだった。
桔梗色に暮れかかる高天の一角から、緑に閃めく光線が矢のようにグラウンドの真上へ近づいて来るのを、僕は見た。
「あッ。セリナ！」
僕は両手を振り絶叫した。

11

十月七日――〝オリンピック候補最終予選競技大会〟は、宮城県の仙台市で行われた。三段跳では、日本のホープと自他共に許す大場選手やG大の桜田選手をはじめ、選手は六名、その中に例の〔デリケートの運動神経〕を誇るR高校の岡本もいた。岡本も今は東洋製鉄の社員で、一時はスランプだったが昨年の秋頃から、また頭を持ち上げて来ている。

選手控室を出るとき、彼は僕の肩を叩き、

「今日は攪乱戦法は御免だぜ」

「何が？」

「三年前さ。日本インターハイのときさ」

「あぁ」と僕は、妖精セリナに初めて会ったときのことを思い出し、

「僕の頭、少し変だったかな、あのとき」

岡本は不敵な凄い笑いを僕に送り、肩をそびやかして競技場へ出て行った。

僕のファイトも、おかげで盛り上り、大場や桜田にも絶対負けはとるまいと、歯を喰いしばった。オリンピック出場が決定する試合だけに、競技場は鋭い緊張感に蔽われ、灰色のメイン・スタンドは曇天の空に冷然と浮び、その両腕で僕らを抱き包んだ。

選手達の競り合いの激烈さは、グラウンドへ出て来た彼等（僕も恐らくそうだったろう）の面上

に、むしろ殺気となって漂っている。

右側のフィールドでは女子の砲丸投が行われていて、ときどきそちら側のスタンドから応援の声と拍手が起った。

何時もなら、ファイトを押し隠し、さり気ない談笑のうちに芝生のベンチへ腰を下ろす僕らだったが、今日ばかりは、それぞれの緊張を、反って露骨に見せ合うことによって闘志を掻き立てているかのようだった。

忽然と、セリナ・マネットが僕の前に現われた。

助走路の整備に、選手達が巻尺を持って手伝いはじめ、それぞれ自分の助走の距離と、スピードを加える個処に、目印の板や石を置いたりしている。

それを横眼に入れながら、僕はベンチから立上り、芝生を歩いてセリナの傍へ行った。

セリナは肩をすくめて笑いながら、緑のジャケットのポケットから紅く塗られたライターみたいに小さなカメラを出して見せた。

「これが、私の愛用のポーラロイド・カメラよ」

彼女は、このカメラで僕の跳躍を撮し、すぐに出来上った連続写真を、ドイツの牧野先生のところへ運んで見せ、次の回の僕の跳躍までに、またこのグラウンドへ戻って来ることになっていた。

そして先生の批評を僕に伝えようというわけなのだ。

勿論、先生はセリナの姿や声を、見ることも聞くことも出来ない。

つまり、ドイツにいる先生の眼前に、突如出現した僕の跳躍写真を見てから、先生は声を出して、傍のセリナに（つまり空気に――）語られるわけだ。

僕の書いた打合せの手紙を、セリナは一瞬のうちにドイツのエッセン市へ運び、すぐに先生の返事を貰って来てくれた。

先生の手紙には、こう書かれてあった。

突然、事務所にいる僕の机上に、君の手紙が現われたので、びっくりした。

しかし、手紙を読み、すべて了解した。君がセリナを知っていたことは、少しも気づかなかった。しかし僕は嬉しい。何故なら、仙女のセリナは、優れたスポーツマンでなくては、決して愛情をかたむけてはくれない筈だからな。

セリナは、スポーツの美神だ。

彼女こそ、われわれの青春の象徴だと言ってもいいだろう。君も僕と同じように、結婚し、子供を生み、そして、なまなましい人間生活の現実に立ったとき、セリナの姿を、肉眼では見ることが出来なくなる。

しかも、僕らが全力を捧げた青春のスポーツ生活を忘れない限り、セリナ・マネットを忘れることはない筈なんだ。

仙台の予選大会の当日、君が跳ぶ時間には、ドイツでは早朝だ。恐らく僕は、アパー

トの一室で、セリナが届けてくれる写真を待っていることだろう。そして僕は、眼に見えないセリナに向って、独言をやるというわけだ。

愉快、愉快！　たとえ、こうした形でも、セリナ・マネットに会えたことを、僕は君に感謝しなくてはならんだろうな。

それから君のお母さんによろしく。僕が羽田を発つときお母さんが見送りに来て下さって、僕に、おいしい五目寿司を飛行機の中で食べさせてくれたよ。

では、関口よ。跳躍し、跳躍せよ。

エッセンにて

牧野平一郎

関口泰助君

競技開始のときは迫った。

「あなたは、あなたを後援してくれる会社側に責任を感じて固くなってはいないわね」

「前にはね……今日は平気だよ、セリナ」

「経済的な余裕がない選手は、精神的な負担が大きいものだから、一寸心配だったの」

「大丈夫だ。あなたも牧野先生もついててくれるもの」

「今日はよ。何時もってわけにはいかないわ」

「わかってるよ」
「あなたのママも、恋人も、あなたの勝利を祈ってるわよ、きっと……」
セリナは皮肉な調子で言うと、僕の鼻を指でつまんだ。
「また、そんなことを……」
「いいの。ママもハツコも、あなたを愛することにかけては絶対に自分以外の誰にも出来ないことだと信じているわ。それがわかったので、私もあなたとお別れすることが哀しくないの」
「別れるって、そんな……」
「いずれはよ。わかってるでしょ」
僕は、うなだれた。
そうしてセリナに別れる日のことを思って、嘆息をした。だが、僕が人間で、セリナが妖精である以上、これはどうにもならない宿命なのだ。
「みんなが、こっちを見ているわ。さ、行きなさい」
ベンチの連中は、十メートルも離れたところで、ポツンと首をうなだれている僕を見て、
（ははあ、上ってやがるぞ）
と思ったらしい。
ベンチへ戻ると、みんなニヤニヤして僕を迎えた。
三段跳は個人競技だ。
何人もの選手が一度に競り合うトラック（競走）競技のような迫力は表面に感じられないかも

知れないが、それだけに、黙々と一人一人が跳びつづける静かな闘いの底には、孤独で激しい自分自身への挑戦が潜んでいるのだ。

僕は勇躍して、これに立向った。

第一回目の跳躍！

十五メートル二十だった。まだ本調子ではないが、体は軽く、フィールドの土の底から吹き上げた一陣の風が、僕の体を宙に突き飛ばしてくれたような感じだった。調子の悪いときには、空からの重い風が、跳ぶ体を押し潰すように思える。

（いいぞ）

僕は湧き上った自信を、しっかり摑まえつつ、彼方のメイン・スタンドを振り仰いだ。

間髪を入れず緑の流星が、垂れこめた乱層雲の中へ吸い込まれて行った。

次の跳躍まで数分ある。

各選手が六回跳ぶ競技時間は、約一時間半位だ。

ベンチにかけ、固唾をのんで空を見上げていると、やがて、セリナはグラウンドへ戻って来た。

僕は走り寄った。

「どうだった？」

「ミスター牧野は、昔と少しも変らない話し方で、私に笑いかけたわ」

「先生、お元気だったね？」

「イエス。あのね、今のは申し分ないって。そして、もうこれで充分だって。あなたは、あとは

もう、一人で跳ぶべきだって。わかる？　牧野の言うことが……」

「うん、わかる」と、僕は唇を噛んだ。

二回！　三回！　四回！

僕は跳びつづけた。

メルボルンのオリンピック会場に、白く燃え上る聖火を脳裡に想い、観衆と声援の壁がスリバチのように選手達を包むオリンピックでの試合に、昂然たる意慾をかたむけて、僕は闘った。

そして、古代に、その文明を誇ったギリシャ人がオリンピアの緑野に開催したというこの祭典が、数千年の後、近代文明の中に復活した事実を、僕は、フィールドの土を踏みしめている僕自身の体に、脚に、ハッキリと確めることが出来た。

大場選手も、桜田選手も最後まで残り、ことに大場は十六メートル四十八という、牧野先生の記録を抜き、シルヴァの世界記録に肉迫する驚異的な跳躍を四回目に出した。彼は喜びの昂奮を押え切れず、芝生を行ったり来たりしている。

僕は五回目に十五メートル六十を出した。

岡本や桜田と激しい競り合いになった。

少くとも三位までに入らなければ、オリンピック出場の夢を断ち切られる。選手達は最後の跳躍にすべてをかけた。

雨が落ちてきた。

そして最後の跳躍のときが来た。

スタンドに歓声が起り、僕は助走路に立った。

僕が、脚とフィールドの土との微妙な呼吸を、スパイクの爪先で探りつつ、ふとメイン・スタンドに眼を移したとき、時計台の下の、其処には人影もまばらなベンチの空間から、セリナ・マネットは緑の光芒となって雨空に舞い上り、ゆるく、速く、競技場の真上を旋回しつつ僕の頭上へ流れて来た。

その一点の緑の煌めきに、僕の脚は決断し、僕は前かがみに上体を折って助走路を辷り出しつつ、スピードを加えていった。

ひたと据えた僕の眼へ体へ、脚へ、吸い込まれるように、白い踏切板が迫って来た。

木葉微塵（こっぱみじん）

1

椚敬三は、今朝も七時に起き、ポインタアの飼犬と共に散歩をし、朝飯が終って約二時間もすると便所へ入る。

雨の日以外の、これが毎朝の日課であった。

停年で銀行を辞め、目黒の或る商店街から一寸切れ込んだ住宅地に、八室ほどの小さなアパートを建てて、ひとり呑気に暮している。

息子は別に家を持たせてやり、孫も二人いた。この上は一日でも一時間でも、死ぬことを先へ延ばしたいと願うだけなのだが、それも当分は深刻に考え込まなくてもいいらしい。

毎朝、水洗の白い便壺の中に、適度に固く、適度に柔らかく、そして暖い湯気を立てている排泄物を落し込むとき、敬三は全身に健康への満足感が充実してくるのを感じる。

そして、うまそうに煙草を吸いつけ、朝刊を読みながら足の痺れるまで便所へ入っているの

だった。

（今年の冬も、どうやら暖かそうだな）

その朝も、敬三は、必要なだけ外気にさらした尻の素肌を撫でながら、半坪の便所で新聞をひろげはじめたが、ふと、便所に接した隣家の庭で話し合っている女達の声を聞いて、そっと新聞を小さな棚に置いた。

「でもさア、奥さん。ほんとに、ほんとに私ね、助かったわア。もう全くねえ、ホッとしちゃって肩の荷が一っぺんに降りちゃったの」

こう言ったのは、溝川を隔てた向側の神社の崖下にある玩具のようなバラックに住む、若い細君である。

「そう言っちゃ悪いけど、でもあんたの気持、無理ないと思うわよ」

同感の意を切実にこめて答えたのは隣家に住む官吏の細君である。

「で、今日がお葬式？」

「そう。もうじき坊さんがお経上げに来るの」

「そう。言っちゃ悪いけど、お宅のお舅さんを、この辺りじゃ閻魔爺だって言ってたのよ」

「知ってるわア、その位。ほんと、その通りよ」

「死んでくれて、よかったわね」

「ほんと。せいせいしちゃった」

「旦那さまは、どう？」

「そりゃ勿論よ」
「勿論、どうなのよ？」
「ホッとしてるわ。よろこんでるわ」
「そりゃねえ」と、急に隣家の細君は、気味の悪い声になって、
「ねえ、これからは、もう遠慮なしだものねエ」
ぽんと肩でも叩かれたらしく、若い方が、けたたましく、
「あらア、厭な奥さんねえ」
「だって、そうじゃないの。六畳一間っきりで、あんなお閻魔さまに睨まれてたんじゃ、夜もおちおちよね、全く」
「ええ、そうなの。うちのおじいちゃんときたら、月に一回、昔の友達ンところへ将棋を指しに行くだけで、あとは一日中、外へも出ずに家の中で大あぐらかいて……」
「毎晩々々、お酒飲んで……」
「ほんとよ。ああ、私、ほんとに解放されちゃったア」こう言い切った若い細君の声は、むしろ敬三を微苦笑させるほどに、あくまでも明るく弾み切っていた。
此処へアパートを建ててから二年になっても、ほとんど近所づき合いをしない敬三なのだが、親しくしているらしい隣家の細君と閻魔爺の嫁との会話を、便所の中から思わず盗み聞いたことは今迄に何度もある。
若い細君が、あの閻魔さまの死に快哉を叫ぶ気持には、少しの不快感もなかったのだが、

（そうか。あの爺さん、昨夜、死んだのか……）

敬三は敬三なりに、まだ出かかっている排泄物を落すのも忘れて憮然となった。

2

このあたりで闇魔爺と噂されている木内留次郎は、息子夫婦や孫にまでも口喧ましいが、近所の子供達が自分の家のまわりに来ることも大嫌いで、何時だったか、崖の上の神社の境内で遊び騒ぐ子供達の声がうるさいと言って、下から石を投げつけたこともある。雑草ばかりの庭先へ野球のボールが転げ込んだのを拾いに来た子供に水をぶっかけたこともあるし、近頃のきかない子供達が、「ゴジラ。ゴジラ」と叫びながら爺さんをからかって庭先を駈け通ると、爺さんは烈火のように怒った。

子供達は面白がって、完全に「闇魔」を「ゴジラ」に変え、しつっこく爺さんのマッチ箱みたいな家に忍び寄っては一斉に「ゴジラ」と叫ぶのを止めようとはしない。爺さんは庭先に落し穴を夜中に掘ったが、これが子供達に看破されて失敗すると、ゴムでパチンコをこしらえて小石をはさみ、窓際にあぐらをかいたまま、ムキになって子供達を射撃したこともある。

とにかく、まあ近所では笑い者にされていると言ってもよいが、理屈も何も通じない乱暴者だから、むしろ息子夫婦に同情が集まる位なのである。

留次郎は、死ぬ三日前まで、晩酌の二合を欠かしたことがなかった。三日前の夕方、嫁のツル

子が例によってコップの冷酒を膳に置くと、その日は朝から床にもぐったままの留次郎が、
「おい、ツルや。もう酒は要らないぜ」
「へえ。珍らしいことがあるもんね。せっかく暖かい日が続いてるんだから、雪でも降らなきゃいいけど」などと、一応は、ツル子も舅に負けてはいないが、その辺が限度で、「うるせえ。無駄口を叩くな。黙ってハイと言え」雷のような声で留次郎に怒鳴りつけられると、もうそれっきりで、後はふてくされ、唇をとんがらせて押し黙ってしまうのである。
ツル子ばかりではない、良人の——つまり留次郎の息子で、ミシン工場で働いている義男や、今年三つになる弘までも、留次郎の鼻息が熱く高く、昂奮に荒れないように、身を竦めてしまうより手がないのだ。
爺さんが荒れ狂うと、手当り次第に器物を投げ壊すし、マッチ箱みたいな家を転げ廻っては、羽目板に（カベの無い家だから——）ドシンドシンと体をぶち当てては悪態の限りを喚き散らす。年老って痩せ切ってはいるが五尺七寸もある骨太の体で、大きな眼や眉や鼻や唇が顔中にあぐらをかいているような留次郎の風貌であった。義男は、小さいときからこうした父親の狂態を、早く亡くなった母親と共に見て育って来ているから畏縮している生活に馴れ切ってしまっているけれども、ツル子は、ミシン工場で知り合った温順しい義男に積極的に働きかけ、職場結婚をして、この家へ入って来た勝気な女だけに「黙ってハイと言えますかッ」などと始めは仲々派手に渡り当ったものだが、此頃では爺さんに圧倒されてしまい、じっと虫をこらえている。虫をこらえているのは、今年、六十七になる爺さんさえ死ねば、バラックの家はともかく、百坪の地

所だけは、名実共に義男とツル子のものになるからだ。

「出て行きゃアがれ。消えてなくなれ」と爺さんが怒鳴るたびに、ツル子は良人と子供を連れて間借り暮しを始めようかと何度思ったことか知れない。

そのたびに、義男は、

「ねえ、ツル子。もう少しの辛抱だよ。親父はネ、威張ってやがるけど、あれで体中が悪いんだからネ。胃から血を吐いたことだってあるんだ。それでも絶対に医者へはかからないだろ。医者が嫌いなのが、もっけの幸いだよ。親父を捨てて僕達が出て行けば、親父はこの地所を誰かに売っちまって、それこそお前、浅草のドヤ街みたいなところへ潜り込んじまうよ。そんなことは平気でやってのける親父だからね。もう少しだ。ネ、もう少しだよツル子」

はじめて晩酌を抜いた次の日も、留次郎は床の中から起き上らず、両腕を組み天井を見上げたままだった。ツル子が夕方になって、

「おじいちゃん。お酒、どうします」と訊くと、留次郎は天井から眼を離さず、

「お前達で飲めよ」と言うのだ。

「私達は飲みませんよ、お酒なんか」

そう言ってからツル子は、あわてて口を抑えた。

何時もなら、すかさず「何イ。この野郎、舅に向って厭味を抜かしやアがるのか」と眼を剝くところなのだが、そのとき、留次郎は、変に静かな、そのくせ皮肉たっぷりな調子で、

「ふン。お前達で祝盃をあげろってんだよ」

「え……」

「あと、二日か三日たてばな、お前達も、俺に気がねなく、大っぴらに××××が出来ようってもんだ」

あんまり、あけすけに猥褻な言葉が、じっとりと気味悪く陰にこもった声で留次郎の口から出たものだから、さすがのツル子も眼を白黒させていると、留次郎は、それっ切り眠ってしまった。

夜中になると、留次郎は堪え切れない苦痛を、とうとう呻き声に出して、床の中で跼き抜いた。

「お父さん。医者を呼んで来るからね」

義男もツル子もたまりかねて起き上ると、

「医者なんぞ呼んでみやがれ、お前達を叩ッ殺してやるぞ」

凄い眼で睨み、どうしても行かせない。

翌朝になると、静かになったが、もう、誰が見ても留次郎の顔には死相が浮んでいるのがハッキリわかった。

一日中、黙念と床についていたが、昼すぎに立ち上ろうとするので、ツル子が「おしっこなら、おまるを買って来たわよ」と手を出して止めにかかると、その手をピシリと払い、ヌーッと立上って便所へ行った。

夕方、夫婦が医者を呼ぼうか呼ぶまいかの相談をやっていると、留次郎が、掠れた声で「酒を

くれ」と言う。

そして、酒のコップを孫の弘に持たせて寄越せ、と言うのだ。持たせて寄越せと言っても眼と鼻の先の六畳一間に寝ているのだが、ツル子はコップ酒を弘に持せてやり、

「おじいちゃんに、ハイって……」と押してやると、弘は恐怖の眼を見ひらき、おどおどと留次郎の枕元へ運んだ。

「おじいちゃん。ハイよ」

「うむ」

留次郎は半身を起し、酒を一口、飲んで「ううッ」と顔をしかめたが、コップを畳に置くと、いきなり弘の手をとり、ニヤリと笑って抱き寄せ、青黒く隈の浮いた大きな顔を押しつけてきたので、弘は「ぎゃーッ」と怯え、必死に爺さんの手を振りもぎって、泣き声をあげ、ツル子にかじりついてきた。

弘ばかりではなく、義男夫婦も、かって見たことも聞いたこともなかった爺さんの愛撫の表現にびっくりしていると、留次郎は息子夫婦と孫の顔をゆっくり見廻してから、深い深い溜息をつき、また天井を見上げると、

「いよいよコッパミジンか……」

そう呟やいて、また床へもぐり込んでしまった。

夫婦が食事を済まし、ツル子が洗物に台所へ立ったとき、ふと気がつくと、もう留次郎は息を引取っていたのである。

話は前へ戻るが、閻魔爺の木内留次郎と、溝川を隔てたアパートの管理室に住む椚敬三の二老人が知り合ったのは、近所の銭湯の中であった。

アパートの自室の一角には浴室もあるのだが、使用の前後が面倒くさくなるときは、敬三も銭湯へ出かける。昼下りの、開いたばかりの銭湯は静かだし、湯もきれいだ。溝川の向うのマッチ箱からも閻魔さまが手拭をぶら下げて、丁度この時刻に銭湯へやって来る。

半白のしなやかな髪をキチンと撫でつけ、つややかな血色にみちた小肥りの裸体を穏やかにのんびりと動かしている洗場の敬三に、爺さんは湯槽の中に顎までつかりながら、じいっと、不気味な注視を向けるのだったが、かなり敬三に興味を寄せているに違いなかった。余り見詰めているので、少し不快になり、今度は敬三が見返したまま視線を外さないと、爺さんの眉がピクピク動き、敵意を持って睨み返してくるのである。

だが、この睨み合いは、何時も爺さんの負けになった。敬三は、大学時代に剣道の選手をやっていて、老人になった今でも、眼の光り方は、いざとなると尋常でないところがある。

アパートの隣家の庭は、おしゃべり好きで気前の良い細君に引寄せられて、爺さんの嫁のツル子ばかりか、近所の細君連の井戸端の中心地であり、朝の忙しい一時をすごして、細君達の声が便所の窓際の桐の木の向うから、やかましく聞えはじめる頃に、敬三の排泄物も体内から脱出しようとする。従って、近所の風聞を知るに敬三は事を欠かないのである。

老人一人暮しだし、アパートの住人達にさえも必要以外の口をきかぬ主義の敬三だから、近所

の人達とも行き擦りの挨拶を交すのがやっとのことなのだが、それにしても便所へ入っている間に、新聞を読むことと、隣家のおしゃべりを聞くことが、敬三のたのしみの一つになっていることは事実だ。だから闇魔爺の一家の生態にも、敬三はかなりの予備知識を持っていた。

それだけに、銭湯で此頃は必ずと言ってもよいほどにやる睨み合いも敬三の日課の一つとして、微妙な刺激を与えてくれるのである。

睨み合って、爺さんが、ひょいと眼を逸らせ、苦々しげに舌打ちをする瞬間、洗場にいる敬三は意外なほどの快感をおぼえて、思わずニヤリとなる。それをまた爺さんが横眼で見てとり一層不快感を募らせるのが、気配で、敬三にはハッキリとわかるのが何とも言えず面白いのだ。

去年の夏頃だったか、例のごとく睨めっこが始まり、そのとき敬三は、丁度、体を洗い終ったときだったので、視線を逸らさずに立ち上り、ゆっくりと爺さんが首だけ出している湯槽に近づいて行った。

敬三が湯槽のふちをまたぐまで爺さんは懸命に顎が天井を向くほどに睨み上げていたが、このときもやっぱり負けて、忌々(いまいま)しさに満ち満ちた高い舌打ちの音を続けざまにたて、隣りで体を沈めた敬三には振向きもせずに、

「畜生め。何時でもガンをつけやがって――」と呟やいたものである。

そのときは、こみ上げてくる笑いを懸命に堪えた敬三だったが、それから十日ほどして遂に二人は衝突した。

敬三の浴びた上り湯が、少しばかり、洗い場に大あぐらをかいていた爺さんにかかったらし

く、奮然として木内留次郎は突立ち上った。
「おい――おい、おいおいッ」
「私ですか？」
「当り前だ。手前のキンタマにかけた湯のとばっちりを、他人様に引っかけときゃアがって、それで黙って帰るつもりか」
あっさり謝まってやろうか、とも考えたが、敬三も意地ッ張りでは人後に落ちない。
「かかり湯がお厭なら、お宅で風呂をたてたら如何」
「何だと」
爺さんは、いきなり、つかみかかってきた。
体も手も大きいし、かなりの勢いだったが、敬三は、ひょいとかわして、その腕を摑み、逆にとった。
爺さんは青くなって呻いた。
二人ばかり入っていた客が、この珍妙な老人同士の闘争を半分は呆気にとられ、半分は面白がって眺めている。
敬三が手を突放すと、爺さんは、けだものみたいに唸りながら睨んだ。また睨み合いだ。そして今度も爺さんが負けた。
敬三が脱衣場へ出て来て扇風機に当っていると、番台の女の子が、
「おじいさん、強いのねエ」と、声をかけてきたのには閉口もしたし、さすがに年甲斐もない子

供じみた真似をした自分が恥かしくなったものだ。

それから一ヵ月余り、敬三は、銭湯から遠去かっていたが、秋の雨が降り続いた或日、久しぶりに出かけて、湯槽につかっていると、爺さんが入って来た。

（やあ。来たな）

事を荒立てたくなかったので、わざと眼をそむけていると、爺さんが湯槽へつかったらしく、穏やかに湯が流れ動いた。

「久しぶりだね」

爺さんの声が湯気にしめって懐し気に敬三へかけられたので（おや？）人違いをしてるんじゃないのか、と振向くと、

「旦那。久しぶりだね」重ねて爺さんが言った。

「やあ。今日は」

爺さんは大きくうなずいたが、微笑の一片も見せない。

永い間、二人とも黙って、湯槽につかっていた。

次の日も会った。また湯槽の中で、

「睨めっこして負けたのは、旦那が初めてだよ」と爺さんが言った。

これには敬三が微笑で応えたのみであった。

次の日、また次の日——一言か二言。または単に目礼を交すきりだが、とにかく、これから二人の老人に、ささやかな交際が生れたことは確かで、日が経つにつれ、二人の会話の量もまた増

えていったのである。
「あなたは、お若い頃、何をしてたんです」
「当ててごらんなせえよ」
「力仕事。職人さんかね？」
「図星。まア、叩き大工ですよ」
「お丈夫そうですね」
「なあに外見だけでさ。中はもうメチャクチャだよ」
成程、肌の色つやは青黒くて、肉も削り取られつくしていたが、何と言っても骨格が大きく、逞ましいし、歩いているところなどは胸を張って両手を振り、ふんぞり返って歩いているので、見たところ、とてもそんなには見えなかった。
また、こんなことも爺さんは言った。
「若い時代から、私アごろつきでねえ。ろくな働きもしなかったが、終戦後、焼け出されたときに、小金があったもんで、今の処の地所を買ってね、安かったよ、全く——あの爆撃の最中に東京の土地を買おうってんだからね。とにかく、あの土地だけが子供へ残す財産でさ」
「温和しそうな息子さんじゃないの」
「よく知ってるね、旦那は」
「そりゃ近所だもの、時々お見かけしますよ」
「息子は私の言うことをよくきくが、嫁が気の強え女でね。うっかりするとやられちまう」

「へえ。あんたでも？」
「気をゆるめることが出来ねえ。あんたと睨めっこで負けたと同ンなじに、一寸でも嫁に言い負かされてごらんなさい。たちまち晩酌の二合もお取上げを喰うにきまってまさ」
「そうは思えないがな」
「とんでもねえ。私ア精一杯、気を張ってるンだ。温和しそうな女だと思ったから貰ってやったんだが、油断は出来ませんよ」
「でもよさそうなひとじゃないの」
「悪人でもねえけど、気が強え。それに、あの方も強くてね。姓娠調節とかのカレンダーってものをこしらえときゃがって、赤鉛筆の印がついてる日には必ず欠かさねえね。そのカレンダーを簞笥の引出しに入れといて、時々出してみては、私を横目で睨みやがって舌打ちをやらかすんですよ」と、爺さんは苦笑を洩らして「隣りで寝ている私に気を使いながら、息子の奴は夜になると女房にせめられてまさア。あんまり嫁の野郎がはしたねえときは、私ア咳払いをしてやりますがね」
そして、急に爺さんは引締まった表情になり、
「息子は尻に敷かれてるが、私ア敷かれねえ。死ぬまで弱味を見せずに威張って死にてえ。死ぬまでごろつきを通して死にてえ」言い切ったその声には、一種の威厳があったものだ。
或日。爺さんが、急に湯の中へ突立ち上り、両掌で痩せたあばら骨をピシャピシャ叩いたかと思うと、

「あア、コッパミジンになりてえなア」
妙に苦し気な声だったし、言うことが変だったので、
「コッパミジン？」
と訊き返すと、爺さんは、むっつりと黙って湯から上り、挨拶もせずに出て行ってしまったことがある。

3

十月十八日の夜。アパートから私鉄で二駅ばかり離れた住宅地にある息子の家へ遊びに行った帰り途に、敬三が駅の附近にある小公園を抜けて来ると、もう肌寒くなって人気もない公園のベンチの上に例のごとく大あぐらをかいて、黙念と煙草をふかしている闇魔さまを見出した。
声をかけようと思ったが、場所も場所だし、両腕を組み、両眼を閉じて煙草をくわえたまま身動きもしない爺さんの姿が、異様でもあり、何か事ありげにも見えたのだ、そのまま引返して別の道からアパートに帰った。
そして敬三は、翌日、銭湯で会っても、このことについては何も訊かないことにした。
息子の家から駅へ行く道は、三つほどあり、そのうちの一つが小公園を抜けて行く道で、敬三も時たまはこの道を通る。少し暗いが近道なのである。
そう言えば、この春と夏に入る頃、二回ほど、この小公園の附近で敬三は爺さんを見かけたこ

とがあるのを思い出した。それはまだ睨み合いも悪化しない前のことだったし、

（おや。闇魔さまが歩いてる）

と大して気にも止めていなかったのだが……。

秋も暮れ、冬が来たが暗い日和が続いた。

敬三は相変らず、単調でいて、自分には呼吸の合った毎日を送っていた。

一人息子の潔は民間放送のプロデューサーをしていて、もう心配はなかったし、敬三自身は、アパートの部屋代だけで充分に生活を楽しむことが出来る。

他人にも迷惑をかけないかわりに、他人からも迷惑をかけてもらいたくない。といったような彼の生活信条が実を結んだのだと言ってよかろう。

妻も数年前に亡くなったが、老後の楽しみに事は欠かない。雑役に雇っている中年の婦人に留守番をさせて、日中は映画も芝居も見に行けるし、銀座へ出て行きつけのS堂で、ひっそりと昼飯をするのもたのしいことだし、夜は肩の凝らない随筆集や旅行記をゆっくりと読めるし、それにテレビという代物が出来たことは、敬三の夜の時間を全く充実たらしめてくれた。たまに息子の家を訪問すれば嫁も孫も大歓迎をしてくれる。

それにもまして、激しく強烈なテンポで移り変る時代の生態を何の生活の心配もなく眺めていることは全く応えられない。人工衛星すら飛ぶようになったのだ。

十一月の十八日に、例のごとく敬三は息子の家を訪問した。十八日は亡妻の命日である。

この日に息子一家と団欒の一夜を過す習慣を、敬三はアパートに移って以来続けているのだっ

た。

一ヵ月に一度の訪問だし、孫には手土産を抱え切れないほど持って行くのだから、息子も嫁も孫も、この日を待構えて大いに御馳走してくれる。

その夜の帰途、何の気なしに、また小公園を抜けかけて、敬三はギョッとなった。

立木の葉も殆ど落ちつくした公園のベンチに、この前、見たときと同じ姿の闇魔さまを見出したからである。

翌月、つまり先月の十八日になると、敬三は、息子の家へ「今日は行くのが遅くなるから」と電話で断わっておき、アパートの二階の廊下の窓から、川向うの家を何度も注意して望遠鏡で注視した。

夕方になると、爺さんが古ぼけたモジリの外套を引っかけて、何処かへ出て行った。

これを待ち兼ねていたように、嫁のツル子が子供の手を引っ張ってそそくさと、いや、いそいそと銭湯へ出かける。やがて義男がミシン工場から帰って来て、夕飯が始まる。

そこまで見届けてから、敬三は自宅へ戻って着替えをすまし、孫への土産物を持ち、手伝いの婦人に後を頼んで外へ出ると、もうマッチ箱の灯は消えていた。

その夜は、行きも帰りも、敬三は公園への道をとった。

閑静な住宅地と小学校にはさまれた小公園のベンチに、星の光りを浴びて、爺さんの仏像みたいに動かない姿を、ひそかに、敬三は見届けて、深い溜息を洩らした。

それから、四日目に、敬三は爺さんと銭湯で会った。

「四日ばかり見えませんでしたね」
「え？　ああ、湯へ来るのが億劫になっちまってね。一寸、寝てましたよ」
爺さんは事も無げに言い放ったが、声には力がなく、顔が灰色になっていて、いくら湯槽につかっていても血がのぼってこなかった。
爺さんは湯から上ると、もう体を洗うのも苦し気に、洗場のタイルの上へうずくまって、あらい呼吸をしつづけている。
敬三は、何とも言えない感動に、激しく身内を揺さぶられ、たまりかねて爺さんの傍へ行って、しゃがみ込むと、静かに声をかけた。
「木内さん。これから毎月の十八日には、私のところへおいでなさい。一緒に飯でも食いましょうよ」
爺さんは、ぎょろりと敬三へ振り向いた。
久しぶりで、二人は睨み合った。
「知ってますよみんな。私が便所へ入ってると、お宅のお嫁さんが井戸端にやって来るんだ。毎月の十八日には、あんたが昔の友達の家へ将棋を指しに行くんですってね。お宅のお嫁さんは月のものが狂わない。カレンダーの赤鉛筆のついてる日のうちに、十八日が入ってる。あんたは夕飯をすませて出かけると十二時近くまで帰って来ない。お嫁さんはね、今でも本当にあんたが友達と将棋を指しに行くんだと信じてますよ」
「……」

「だからそれでいいじゃないですか。しかし、この寒いのに公園のベンチの吹きっさらしで、あぐらをかいてることはない。私は今度は将棋の相手をしよう」

ややあって、爺さんは苦笑をやっと浮かべ、

「旦那にア敵わねえな」

「敵うも敵わんもない。あんたは男らしいよ」

「そうかね。なあに、ふだんはごろまいていてもさ、ひと月に一度位は、あいつらに充分タンノウさせてやりてえと思ってね。それだけのこってすよ」

「せめて映画でも見物してたらよかったのにな、体に毒ですよ」

「御冗談。晩酌の二合がやっとのとこでさ。この上、私が小遣を巻き上げたら、あいつらヒボシになっちまうからね」

だが、正月からは、十八日に息子の家を訪問する習慣を破り、その日には閻魔さまと将棋を指す、という約束を強引にさせて、椚敬三は、その日が来たら、何を閻魔さまにお供えしようかと楽しみにしていたのだが……その十八日が、あと四日で来るという日に、木内留次郎は、かねて願望通りに、木葉微塵となったのであった。

「でもさ、奥さん。おじいちゃんの昔の友達に知らせなきゃ悪いと思うんだけど、困っちゃったのよ」

「どうして？」

「だって住所も名前も何も聞いてなかったんだもの」

隣りの庭でしている二人の女の会話を聞きながら、敬三は最後の排泄物を便壺に落した。

「わからなきゃ仕方がないわよ。そのうちに、どうしたんだろうって、その友達が訪ねて来るわよ。そしたらお線香の一本もあげて貰いなさいよ」

「そうねえ。そうするより仕方がないわね」

そして、何か秘密めいた囁きを交したかと思うと、二人の女は、はじけるように笑い出し、隣家の細君が、

「これからは毎日が十八日だわねえ」と、やや昂奮を押え切れなくなったように叫ぶのが聞えた。

敬三は立上り、便壺に水を流す前に、焦茶色の引きしまった形で白い便壺の肌に、こんもりと盛り上っているものを見やったとき、五日前に銭湯で見た最後の闇魔さまの言葉を思い出した。

それは、

「俺アねえ、旦那。もう一ぺんでいいから、固い糞がしてみてえよ」

というのだった。

のどぼとけ

1

フランスはパリのお話だった。

ジュリアンという青年が、四人の若い女に、さんざんちょっかいを出したあげく、その余りにも厚顔な女たらしぶりに業を煮やした女達のピストルや毒薬の洗礼を受けようとする。……しかし映画は現実を無視した巧みなコメディ・タッチで、青年も次々に女達の復讐からするりと脱け出させてしまい、結局はその青年、女のうちの一人、エレーヌと目出度く結婚式をあげる。

テクニカラーに彩られ、多分にアメリカナイズされたコメディだが、さすがにフランスものの垢ぬけした処理が、シナリオにも演出にも演技にも閃めいていて、観客は快ろよく軽い笑いに誘われながら観賞しているようだった。

だが、九万田きわ子は眼を血走らせ、わなわなと震える両手を固く握りしめ、憎悪をこめた舌打をつづけながら、スクリーンを見つめている。スクリーンに現代ドンファンぶりを発揮する主

人公ジュリアンの映像が、そのまま高村英光の浅黒くひきしまった顔に置き替えられた思いなのだ。

フランスでも人気沸騰中のアラン・ドロン扮するところのジュリアンが、まんまと美貌のエレーヌを獲得して刑務所内の教会で結婚式をあげるラストシーン。現代の色男に敵する女はひとりもあるまいと、ほくそ笑んでいるジュリアンの、白いカラーの上にピクピクとよろこびにふるえている喉ぼとけを引裂いてやりたいほどで、きわ子は我を忘れ、

「そうはいくもんか！　こっちは……こっちは、と、問屋でおろすもんか！」

低いが鋭い声で口走った。

スクリーンにＦＩＮの文字が出たとき、きわ子の心は決った。

場内が明るくなり、先刻から、きわ子の舌打ちと無意識のうちに吐き出す呟やきに閉口していた隣りや前後の観客が、只事でないきわ子の蒼ざめた顔を見やりながら通路へ出て行く。

きわ子は、座席にかけたまま、左の親指を噛みしめ噛みしめ、凄まじい視線をあらぬ方へ凝らして、しばらくは動かなかった。

外へ出ると、また雨がひどくなっていた。

まだ梅雨には間もあるというのに、此頃は太陽の顔の出し惜しみ方も、いいかげんにしてくれと言いたいところだ。そしてまた雨が降ると冷えた。

冷える度びに、冬中しつこくきわ子を苦しめていた病気が頭をもちあげるのである。

きわ子の為に書きたくないのだが、この小説にリアリティを与える為となれば止むを得まい。

彼女は痔もちなのである。

腫れ上ったそれが、お尻の外へ出て来ると、痛みは筆舌につくしがたくなる。こんなにひどくなったのは、初めてで、何時もは銭湯でゆっくり温まってくれば、すぐ軽快になるのが、今年は、しつっこく、思い余って、きわ子も医院へ通ってみた。

手術をしろと医者はすすめるが、激痛を想っただけで冷汗が出る。

「お店をいま一人でやってますので、もう一寸、暇が出来ませんと……」

と言いわけしてはいるのだが、女だけに、きわ子は、もう全く情なさに自殺してしまいたいほどだった。

が、それも春暖と共にどうやら治まり、やっと、きわ子も人心地がついたところへ、今度の別れ話である。

「まあ、しばらく顔を合さない方がいいと思うなあ。だってさ、会えば君、そうだろ？　……ね、そうだろ？」と、高村はニヤニヤする。

「何が、そうなのよッ」

「会えば、君、何もしないじゃすまねえものな、お互いにさ。ね、痔もちにあれはいけないんだってさ。だって力むだろう、力むのがいけないんだってさ」

聞き捨てならない揶揄である。

身も心も許し切って、高村の体臭を銭湯で洗い落すのが惜しいとまでに思いつめたきわ子が、それだけに、うっかりと持病のことを話したのを、何かにつけて高村は話に持出しては笑い出す

のである。

「そうかあ、君は痔もちかい。どうもそりゃ何だなあ。やっぱり歳かね」

三十二歳という年齢と痔病とに何の関係があるだろう。何かにつけて近頃は歳だ歳だと、きわ子に劣等感を与えて置いて、久しぶりに訪ねて来た一と月ほど前の或日の午後に、

「この辺でサッパリしようや。お互いに食べ飽きたもんな」と、こういう言い草だ。

「どうしてよ？　そ、そんな言い方ってある？」

きわ子は激しい怒りに、しばらくはお尻の痛みも忘れた。

無理もない。中野の汚いアパートで独り暮しをしていた高村の洗濯から食べものの世話に至るまで、それは、しがない一杯飲み屋の女主人にすぎないきわ子のやることだから男に貢いだなどと大きなことは言いたくないけれども、洋服だって、この一年の間に二着はこしらえてやってもいる。

あくせく働いて貯めたものも、洗いざらいとまでは行かないが、それに近いほど男の為に使い果しているのだ。

「その代り君だって、ずいぶん転げ廻って楽しんだじゃないか。そうだろう？　違う？」

きわ子は体中、恥かしさで真赤になった。

そうなると一言も言えなくなり、うつむいてしまう。

きわ子の年齢で、しかも飲み屋の女主人で、こうした恥らいが、まだ残っているところに、場所も悪く若い女の子も置かないきわ子の店が、どうやらやっていける原因があるようだ。

だから、努めて鄙猥な言動を露骨にして、きわ子に嫌われたいという計算も、近頃の高村はしていた。

一年に近い交渉で、清潔好きな、無我夢中になったうちにも羞恥と小娘のような素朴を決して失っていないきわ子の性格を、よく呑み込んでの上のことだから、高村も相当なしろものだった。

2

きわ子は、九州鹿児島の産だが、小さいときから家族と共に東京へ出ている。以来いろいろあって、戦後、彼女は醤油の業界新聞の主幹をやっていた同郷の九万田と結婚。四年後に九万田は大酒がたたって病歿。大酒飲みだっただけに亡夫の性生活は割に淡泊だった、などということはさておき、以後、人のよいきわ子は、練馬の家も亡夫の弟に乗っとられて僅かな金をもとに小さな商売をやったり、渋谷の待合の女中をしたりして、三年ほど前からD区のA町で一杯飲み屋をはじめた。

表通りから折れ込んだ小路の四坪の二階家で、下が店、二階が六帖のささやかなものだ。買取る前も小汚ない飲み屋だったのを、きわ子は小綺麗に改装して「きりしま」と店名をつけた。

両隣りはあまり景気のよくない薬屋と景気のよい麻雀倶楽部である。

すっからかんになった上に借金までして思い切って開業したものだが、きわ子の家庭的な料理

や前にのべた性格が手堅く客をひきつけた。それも中年の客が多い。

きわ子は、平凡な顔立ちで五尺に足りない小柄だが、小麦色のひきしまった肌をもち、きりきりと巻き上げた髪や、好んで着る久留米絣の下に息づいているコリコリした肉体などを想像で探り当てるのは中年の男である。きわ子は今どきの若者の好みには合うまい。

ことに隣家の薬局主人は開店以来、売り上げを工面してはやって来る。これは六尺豊かの五十男で、心ならずも独身である。娘が一人いて横浜の方に嫁いでいるそうだが寄りつきもしない様子だった。妻が死んでから後妻の来てがないのだから、店のさびれようも知れる。禿げ上った頭をいっそ思い切ってカムフラージュする為にクリクリ坊主にしているが、容貌まさに魁偉。平清盛に薄汚れた白衣の仕事着を着せたような伊藤権之助である。

彼が「きりしま」へ、おずおずと入って来て、一合の酒を持て余しつつ、きわ子がつくる豚骨料理の味噌をなめながら、象のような眼に精一杯の希望を託し、チラリチラリと甲斐甲斐しく立働くきわ子の腰のあたりを見やっては溜息をつくさまが、よく見られたものだが……しかし近頃は、ぷっつりと来なくなった。

つまり高村の出現以来である。

高村英光は、この地区の税務事務所の徴収員である。

きわ子は堅い方で家屋税や飲食税の滞納も余りしない方だが、つい面倒になって滞めた分をこの地区へ転勤早々の高村が徴収に来たことから、二人は知り合った。

高村は若い。たくましい肉体をもっている。人一倍たくましい喉ぼとけをもっている。きわ子

は何よりも真白なワイシャツの襟から高く突出している彼の見事な喉ぼとけに心をひかれた。

人間はそれぞれ、自分自身に欠乏しているものに魅力をおぼえる。

女に無くて男に存在するものは種々あるだろうが、喉ぼとけもその一つで、女というものは不思議に、こんなつまらぬものに魅了されるものらしい。痩せこけながら連日酒をあおっていた亡夫の喉ぼとけも、かなり突出していたが、それは病魔へ対する弱々しい抵抗にしか、きわ子には見えなかった。

たくましい肉体の、たくましい喉ぼとけこそ、余人は知らず、きわ子のくすぶりながらも必死で押えつけていた体内の何物かに激烈な男の匂いを送り込んできたのである。

初対面から、この反応を看取したのは、さすがドンファンである。高村は金のかからぬ女なら誰でもよいという奴だし、毎朝背広を着込むときに鏡に映る自分の顔を眺め、「どうだい、いいだろう」と独語する奴だから自信満々だ。

二、三度来て、酔いつぶれた体を見せ、きわ子に介抱させながら「きりしま」へ泊り込んだ。

こうなればもう、曲者の技巧によって、まだ初々しいきわ子が翻弄されてしまうのに暇はかからない。良人の歿後から今まで、全く男には触れなかったとは言い切れないきわ子だけれど、それはまだ彼女の堅気な肉体に少しの傷痕もとどめぬほどのものだった。

（こんな世界もあったのかしら……）

一図に、きわ子はのぼせ上った。

こんな世界というものは、女にとって無限であり、男にとっては、ことに高村のような男に

とっては次の獲物が来るまでに見つくしてしまい味わいつくしてしまい、飽和してしまう世界なのである。

次の獲物が引っかかった。

表通り駅前に堂々たる三階建の門戸を張る文盛堂書店の娘である。

何しろ高村は仕事が仕事だから一日のうちに何人、女達と口をきき合うか知れたものではない。金も使わず女に貢がせ、しかも別れ際のあざやかなことは天才的な彼だが、今度は一寸違う。文盛堂では娘が結婚すれば文化住宅を一軒建ててくれ、持参金もかなり出るらしい、ということがわかったので、高村はこの際、思い切って結婚をすることにしたのだ。なるべくうまい獲物を今まで探しつづけて来たのだが、後々これだけの獲物が引っかかるかどうか……かかるかも知れないが、またかからぬかも知れない。

（なあにいいや。もっと良いのが見つかったら離婚しちまえばな）と、いう奴である。勿論、文盛堂令嬢には、いち早く烙印を捺してしまい、のっぴきならなくしてしまった。

女と別れるとき、自分に愛想をつかさして「もう嫌い。あんたなんかと一緒に居るのはいや！」と、事のはずみに、この一言を女に吐かせる名人は高村だ。この一言をとられるのが早いか、

「あ、そうかい。じゃ別れよう」

と、間髪を入れない呼吸のよさだ。

その日も、きわ子に向って、さんざ鄙猥きわまる俗語を乱発し、

「も、もう厭ッ。あんたなんか厭！」

きわ子が思わず叫んで突伏すや否や、

「あ、嫌われちゃったのか、それじゃ仕方がない。やっぱり、サッパリ別れよう。では、さよならきわ子。お尻を大事にし給え」

泣きながら眼を上げたときには、もう高村は消えていたのだ。

（仕方がないのかも知れないわ。私、あの人より四ツも歳上なんだし……でも、あの人、私とも結婚しないかわり、他の誰とも結婚しないって言ったわ。それだけが私の……）

なぐさめだと自分に言いきかせてみる。

（痔のことなんか言わなきゃよかった。ほんとに色消しなことを言っちゃって……私がいけなかったんだわ、嫌われるのも無理がないわ）と無理にもあわれな自分に言いきかせる。三十を越した女がこれだ。こういう女を見つけるのが、また高村のような男はうまいのである。

絶えがたく物狂わしい毎日。やるせなく物淋しい夜毎に、きわ子はそれでも、じいっと耐えていたのだが……。

その日の午後。もう根気もなくなった店を、それでも惰性的に開けようと、のろのろと仕込みも終え、銭湯へ出かけたきわ子は、洗い場で、文盛堂の娘の結婚のことを耳にはさんだ。

隣りで、それぞれ子供を洗っている近所の会社員の細君同士が、

「あれですってねえ、駅前の文盛堂の娘さんねえ、明日M駅の傍の教会で結婚式なんですってねえ」

「へえ。あの一寸綺麗な娘さん。へえ、そうなの。相手は？」
「何でも税務事務所へお勤めの、そりゃ真面目な、その上にとっても好男子なんですって」
「あら、ま」
きわ子には、びいんと響くものがあった。
体中が粉々になるような憤激を必死に押えつつ、きわ子は銭湯を飛出し、まっしぐらに文盛堂へ向った。
店へ入って何気なく週刊誌の一冊を買い、レジスターの女の子に、
「お宅、お目出度なんですってねえ」
引き吊った固い微笑をつくってきくと、女の子は何も知らず、
「はあ」
「税務事務所の方だって聞きましたけど、どなたかしら？」
「は？」
「いえ、私も商売してるんで、よく役所へ伺うんで、それでみんな顔を知ってるもんだから」
「あ、そうですか。高村さんって方なんですよ。一寸ほらあのハンサムな……」
何がハンサムだ、畜生！　……後も見ずに飛出し、店へ帰ると、涙が放り落ちるままに任せて、手もうつろに着替えをし、降り出した小雨の中をレインコートを引っかけると、きわ子は当所(あてど)もなく町へ飛出したのだ。
（結婚なんかしない、しないと言ったくせに……）

何処をどう歩き、電車に乗ったものか、やがてきわ子は、銀座の灯を浴びながらフラフラと京橋へ出て、やっと棒のようになった足と、痛み出したお尻に気づいた。そうなるとガックリと疲れ果て、よろめくように傍の映画館へ入ったのである。

高村と二、三度来たことがある映画館だった。

上映中のフランス映画は、きわ子の悲嘆に火をつけ、これを憎悪に替えた。

3

降り止まない雨に、ぐっしょり濡れて帰って来て、店の戸を開けようとすると、隣りの薬局の、もうカーテンが降りているガラス戸が、あわただしく開いて、主人が、体に似合ぬ細い声をかけてきた。

「九万田さん、九万田さん」

「……？」

「心配してましたよ。どこへ行っとられたんです？」

「いえ、別に……」

主人が出て来た。憔悴惑乱の極に達したきわ子を見て、主人は泣きそうな顔になった。

そのとたんに、きわ子は進み出た。

「あのう。硫酸をいただきたいんですけど」

「リュウサン？　……何にします？」
「あのウ。一寸あの……要るんです。おいくらですか？」
「五十シーシー入りのびんが百円ですがネ、ハンコが要りますヨ」
「はあ、じゃ今すぐ――」
きわ子は、もう夢中で店へ入り、ハンコを出して、すぐに隣りへ走った。騎虎の勢いである。
主人は妙に眼を据えて、きわ子を迎え入れると、ガラガラッと戸を閉め、カーテンを下ろした。
きわ子も、さすがにハッとなった。
「あの、り、りゅうさんを……」
「わかりました。硫酸はわかりました。が、何にお使い？」
きわ子は沈黙した。
しぶくような雨音が、狭い埃っぽい店内に息苦しく籠り、次第に主人の息づかいが荒くなってきた。
「知ってますよ。ええ知ってますとも。私ア……私はねえ、九万田さん……」
主人は痰が喉にからまったような声で、口惜しそうに、
「あいつが、あの男があんたのところへ泊りにやって来るとき……き、決って私ンとこで、コンドームを買うんですよ。ね、私アもうその度びに、こう胸を掻きむしられるような気持で……情

なくってシャクにさわって、畜生もうどうしてやろうかと、実はあなた……私ゃねえ、よっぽど売ってやらないぞって言ってやろうと何度思ったか知れない。いいえ私ンとこが、こんなに不景気でさえなけりゃ、売りません。ええ、決して売りやしなかったんです」

きわ子は、きょとんと平清盛氏を見上げた。初めて彼女は薬局主人の意中を知ったのである。

しかも主人を平清盛と呼んだのはきわ子だ。

「隣りの御主人、あんな平清盛みたいな大入道だけど、気はとってもやさしいのよ」と、何時だったか、高村に言ったことがある。すると、高村は、

「何だい？　そのキヨモリってのは」という始末だ。

「あら知らないの。源氏と平家の、ほら……」

「何だ、歴史か。そいつは苦手だ」

どこかの私立大学を出たという高村の事もなげな返事に、きわ子も苦笑したものである。

「あ、あんた。硫酸を、あの男にぶっかけてやるつもりですネ？　そうでしょ、そうでしょ、そうでしょ。わかってます」と、せわしなく主人は顔を近寄せて来た。

「いけませんよ。そりゃいけない。あんたの一生、だ、台無しになっちまう。そりゃいけませんよ」

今度はやさしく、しみじみと、こちらの哀しみへ共に身を投込むかのような主人の言葉だ。

張り詰めていたものが一度に崩れた。声をあげて、きわ子はガラス張りの商品ケースへ泣き伏した。そのとたん、きわ子は貧血を起した。

夢中で雨の町をうろついているうちに、患部から少しずつ出血していて、気がついて見ると、グレイの雨靴にも血がしたたり落ちていたほどだった。

その夜。主人は、きわ子を懸命に介抱した。店の中の痔に利く薬を動員したばかりか、彼は銀メッキ製の万年筆ほどの棒を持出してきて、

「これはネ、とてもよく利く、温灸器ってんですがね、この棒の中に固型のお灸を入れて摩擦するんです。万病によろしい。しかし高価なんで私ンとこじゃ売れなかったんです。でもお役に立って私や嬉しゅうございます」

浴衣に着替えさせたきわ子をうつ伏せにさせ、主人は慎重克明に、彼女の首筋から腰のあたりのツボを摩擦しはじめた。

成程よく利く。その温灸器とやらから彼女の体に放射される熱は、痛みを次第に解きほぐしてくれた。そして気のゆるみから、きわ子は平常の堪え性もなく、泣き咽んだ。

「わかります、わかりますよ。よく私にゃわかる、あんたの気持が……」

「口惜しいんです、私……」

「私だって口惜しい」

「ほんとにもう、あいつを殺してやりたいッ」

「ヒスはいけない、九万田さん。やるなら冷静におやんなさい」

「だって……」

「硫酸には及ばない。もっと良いものがある」

「え？」
「やりますか？」
「ええ何でも。どんなことでも……」
「じゃ買って来ます。明日は、あいつの結婚式ですってネ」
「よく御存知……」
「あんたに関係した事だもの。何から何まで、みんな調べましたよ」
「まあ……」
「よし。おやんなさい。後はどんなことになろうとも私が引受けました。ようござんすか、今晩私がこの温灸器で、あんたの体を明日の闘いに働けるようにしてあげる。思う存分おやんなさい」
主人は、勇みに勇んで雨の中へ飛出して行った。
（何を、何を買いに行ったのだろう？）

4

翌日は、近頃珍らしいほどの快晴だった。一度に夏が来たような強い陽ざしが、電車の窓から見える住宅の物干しや庭に溢れる洗濯物に笑いかけていた。
もよりの私鉄の駅から三ツ目のM駅は高級住宅地で、その丘の上に新しく出来た教会がある。

娘の結婚式をそこでやるからには、文盛堂書店はキリスト教らしい。

きわ子は電車から降りると、粉石鹸が入っていた小さなバケツほどもある缶に針金の手提げをつけたのを提げ、教会のある丘へのぼって行った。昨夜、徹夜で治療してくれた薬局主人の温灸器の故か、痔の痛みは全くなかった。

今朝になってみると、昨夜の昂奮もやや治まり、いくらかは自分で自分の姿を見ることも出来たのだが、しかし、今朝出がけに伊藤薬局の主人が言ってくれたことを、きわ子は小鼻に汗をかきながら、足を運びつつ、胸にかみしめていた。

「ねえ九万田さん。あんたが、もし今朝になって、こんなことをやりたくないという気持に変ったのなら、私もおすすめしませんよ。私も何です、昨夜は一寸昂奮してたもんですからね……そりゃ、その、つまり相手をやっつけるってことは、自分をやっつけることになるんですからネ」

「ええ。自分の馬鹿だってことを自分から世の中に大きな声で、わざわざ知らせるようなものですものね」

「そこまで私は言いたかアありません。ありませんよ決して……けど九万田さん。この場合ですね。泣寝入りに、じいっと我慢するか、または思い切ってやっつけるか、二つのうち一つを選ぶことによってですね、私や、あなたの今後ってものが違って来ると、まあ、そんなことも考えてみるんです。——私、私だったら、勿論やらない。いえやれませんよ私って奴はね——だから、今もって五十面下げて、商売ひとつ満足に出来やしない……」

主人は深い深い溜息をついた。
ややあって、きわ子は、しっかりと眼を上げて言ったのだ。
「やります、私。やってみますわ」
「そ、そう……やりますか？」
「はい」
「後のことは及ばずながら……私も一生懸命に、あなたがどんなことになろうとも……」
「済みません。いろいろごめんどうおかけしちゃって……」
「いいえ、あなた、私は、私はねえ九万田さん……いえ、よござんす」と、主人は悲壮に瞑目して、
「門出の朝だ。余計なことは言いません。御成功をお祈りしてます」と言ったのである。
午後の陽射しにも一点の蔭すらなかった。
きわ子は教会の門の前の道をへだてた宏大な邸の石塀によりかかり、ぼんやりと時の来るのを待った。
オルガンの音が聞えている。
あたりは静かな住宅地だが、それでも式を終えて出て来る花嫁を見ようとして、子供達や、細君連の姿が十人ほど教会の門のあたりに見えている。
やがて、ざわめきが起った。出て来た。高村が、真白なウェディング・ドレスに包まれた花嫁の腕を抱えて現われた。

顔を見知っている文盛堂夫妻の他に、二十人ほどの参列者が取巻いている。埼玉のA市で小さな旅館をやっているとか聞いた高村の両親もその中に交じっているのだろう。

みんな、どの顔も幸福そうに笑っている。

高村はまるで人が違ったようだ。モーニングを長身にまとって眼を輝やかせ、誠実の典型みたいな表情をしている。

花嫁も立派な体だ。グラマーである。乳房が突出していて、絹のドレスの胸のあたりが揺れている。

今夜は、あの乳房に、高村の指や唇が……と、そう思ったとき、きわ子の蒼ざめた頬のあたりが痙攣しはじめた。

今までの、まだ残っていた躊躇が再発した怒りに吹飛んだ。

電車の通過を知らせるベルが丘の下の踏切で遠く鳴っている。

みんなが門外の道へ出て来た。見物の花嫁花聟を嘆賞する声が起り、新婦が新郎を見上げて花のように笑った。

そのとたんに、高村へ向けていたきわ子の復讐の、緊張に据わった白い眼が、さっと花嫁に向けられた。

(口惜しい！　あの女め！)

計画には勿論ふくまれていなかったことだ。

あッという間もなかった。

叫び声をあげる高村には一瞥もくれず、殺到したきわ子は、いきなり缶の中にヒタヒタとたたえられた墨汁を花嫁の頭から浴びせかけた。「きゃッ」と花嫁の悲鳴が起る。

一瞬の異様な沈黙！　それにつづく人々の叫喚！

黒んぼの花嫁と化した文盛堂令嬢は驚愕のあまり卒倒した。

きわ子に誰かが飛びついて来た。きわ子は狂人のような力で缶を振り廻した。

まだ残っていた墨汁が飛散った。人々が叫び声をあげて飛退いた。

きわ子は屹と高村を見た。

高村は全身をおこりのように震わせ、虚脱したように唇を開けている。人形のように無力で赤ン坊よりも意気地のない高村の狼狽ぶりは弱々しかった。これが、思うままに自分を征服したあの男なのか。

（決行してよかったわ！）

よかったかどうか、これから先のきわ子の人生については何もわからない。彼女だってわかる筈はないのだが……しかし、こんな高村を見たとき、きわ子は、この男への執着がスパリと断ち切られ得体の知れない爽快な風が体内を吹き貫けるのを感じた。咄嗟に湧上った嫉妬から罪のない花嫁に与えた侮蔑は、いずれ何かの形で、きわ子が償わなくてはなるまい。

と、今度は彼女、高村に迫った。

高村は動けない。生ツバを呑み込む度びに、純白のカラーから突出した喉ぼとけが、ゴクリゴクリと動いた。

きわ子は、また缶の底に残っていた墨汁を、たっぷりと右掌に掬い上げ、ものも言わずに、その高村の喉ぼとけへ叩きつけてやった。

ひとのふんどし

1

大阪公演中の歌舞伎俳優、市川扇十郎から贈物が届いた。英国製の洋服生地だった。

この生地を見せられたとたん、貴君を思い出しました。そして、何としても、このツウィードの上衣を貴君に着せてみたくなりました……と、扇十郎の手紙が添えられている。

（扇十郎も抜目がなくなったもんだ）

だが、悪い気持はしなかった。

扇十郎は実も人気もあるだけに我儘も強く、何度も興行会社と紛擾も起して、一時は東京の舞台から閉め出された形だったが、今年になると有望な若手俳優と一座を組み、東京へも出られるようになってきている。

扇十郎の態度は、がらりと変った。上京すると必ず一度は安部を食事に誘うようになった。

前には、劇場の廊下などで擦れ違っても、安部のような若い劇評家には見向きもしなかったも

のだ。インターヴューに楽屋へ行っても小僧同然にあしらわれる。安部は大いに自負心を傷つけられ、当時は夢中になって、新聞や週刊誌で扇十郎をたたいた。好色だと噂される彼の私生活にまで首を突込み、ゴシップを捏造しては、それをふり撒いて歩いたものである。

「扇十郎も変ったねえ、大人になったよ」

安部は、遅い朝飯の卓で茶を飲みながら、妻の良子に言った。三十五歳の安部が、五十に近い扇十郎を子供扱いにしている口調なのだが、良子には、それが頼母しく聞える。夫の職業がもつ〔文化的権威〕の匂いを、良子は誇らしげに吸い込んでいた。

「あなたのおっしゃること、今になって扇十郎さんもわかってきたようね」

「向うが、こういう気持になれば、こっちも考えるしねえ。俳優というものにはさ、何よりも謙虚な精神が自信の裏づけになってなきゃア、演技の向上なんかないわけだからね」

「そうね、ほんとだわ。ほんとに、その通りよ」

女は、自分の夫と子供が誰よりも頭がよく、立派な人間だと信じて疑わない。良子の前でなら、安部も安心して自分の権威を誇示出来る。

「でも、すてきな生地だわ。扇十郎さんのこと、よく書いておあげなさいね」

「まあね」

ツウィードの洋服地は、自分のところだけに贈られたものだと安部は思っている。

またそのように思い込ませるやり方で、扇十郎は効目があるところへ贈物をするのだった。贈物に添えた手紙を書くのが実にうまい。誰でも扇十郎の手紙には酔った。手紙を書くときの扇十

郎の眼は冷たく笑っている。あまりに効果がありすぎるので可笑しくてたまらないのだ。

来月の東京公演に、扇十郎は野心的な新作を出し、初役で「勧進帳」の弁慶をつとめる。肚の中では安部を軽蔑しきっている扇十郎だが、安部の機嫌をとろうという狙いは、むしろ安部の大先輩に当る柳井にある。

〔ベー公（安部）のボス〕と仲間からよばれている劇評家の柳井には著書も多くあるし、芸能界での勢力も大きい。あることないことを、安部から柳井に告げ口されては、扇十郎も一寸困るのだった。

柳井は安部を可愛がっている。安部にとって妻の良子がそうであるように、柳井の言動一切に安部が無条件の尊敬と共鳴を捧げてくれるからだ。柳井の取巻きの中でも、安部は最も忠実であり便利な男である。柳井自身では言いにくい、やりにくいことも、安部を通してやってのけることが出来る。

安部にしても、一流紙を舞台に活躍している柳井の庇護がなくては、食べて行くだけの仕事を獲得することは難しい。

「扇十郎も、ぼくには一目おいているらしいね」

著名俳優が自分に向けてくる媚情（びじょう）は、何よりも安部を快適にさせてくれた。

安部は煙草をつけ、小さな庭いっぱいに充ちている温い冬の陽射しに眼を細めた。

縁側で、ミノルが積木遊びをしている。

今年四歳になる息子を見やった安部の眼は、とろんとうるんでいた。

「あなた。今朝のB紙ごらんになった？」
良子が茶をいれかえたとき、突然言った。
「……見た」
「どうして、今月から、あなたの劇評が載らなくなったの？」
安部は黙った。安部の唇が微かに痙攣しはじめた。
「ねえ、どうなすったのよ？」
「あんな、三流のスポーツ紙になんか、もう書かないことにした。やめたよ」
やめたのではない、やめさせられたのだ。今月から新人が劇評欄を受持つことになった。その新人の方が安部よりもB紙に於ては有力な背景をもっているか、または安部の書くものが嫌われたのか、そのどっちかだ。
扇十郎からの贈物で気分を持ち直し、忘れかけていた不快を良子がまた突つき出してしまった。
安部は食卓にあったB紙を摑み、引き裂いた。良子が眼を瞠った。
「ふん。芝居のしの字もわからん奴に何が書けるっていうんだ」
「あなた……」
「出かける」
そこへ電話が鳴った。〔週刊M〕誌の編集長からだった。今日中に社へ寄ってくれないかというのだ。

「ええ。承知しました。はあ。大丈夫、行けます」

安部は、卑屈に電話へ笑いかけながら応対した。懸命にB紙への不快感を押えつけている。〔週刊M〕は大切にしなくてはならない。今のところ、まとまった枚数で安部に芸能記事を書かせてくれるところは〔週刊M〕誌しかないのだ。少し前まではエロ専門の三流誌だったのが、現在はいくらか品もよくなり、売行きも悪くない。

安部は演劇欄ばかりでなく、テレビ、ラジオ、映画など、すべての芸能欄を一手に引受けさせられている。ゴシップも書きまくる。自分の名前を出さずに毒舌をふるうのは気持が良いのだが、安っぽく重宝に酷使されるのがたまらなかった。しかし〔週刊M〕から入る稿料は、ばかにならない。

電話を切っても、安部の不快は募るばかりだった。

安部への編集長の態度は、近頃、目に見えて変ってきている。おれのところに書かせてやっているんだぞというところを、むしろ、はっきりと見せさえもする。これは、もう少しで安部が必要でなくなるということでもある。

着替えにかかった安部に不安が衝きあげてきた。安部は、着替えを手伝う良子を意味もなく苛ら立って叱りつけた。

「お帰りは、何時になるの？」

「わからないよ、そんなこと」

また電話だ。E出版社からだった。

電話を聞く安部の目が輝いてきた。

安部幸男著「忘れ得ぬ面影」の豪華出版の見本が、今日出来るというのだった。印税も半分お渡ししたいという。

「忘れ得ぬ面影」は、戦後に没した舞台俳優の写真に解説を付したものである。定価三千円の限定本で千部を刷ったというから、税を引いても二十六万円ほどの印税が安部の手に入る。

良心的な出版で知られている出版社だし、この出版で、安部幸男の株も、ぐっと上ろうというものだ。

何も不安になることはない、何も苛ら立つことはない。

安部は上機嫌になって、荻窪の家を出た。

2

ルイ・アームストロングの濁み声が〔揺り椅子〕を唄っている。その声はステレオの豊かな音量となって店内いっぱいに流れ、コーヒーと煙草の香りと人びとの話声の中に溶け込んできた。

安部はコーヒーを飲みながら、今月入る稿料と「忘れ得ぬ面影」の印税の計算をやってみて、満足した。久しぶりに入るまとまった金だった。今年の歳末は楽しいものとなるだろう。

ルイの唄声も、安部の聴覚をとらえてはいなかった。

十年前の安部だったら、小鼻を脹らませ、眼を閉じ、ひたむきに、あの濁み声に聞き入ったこ

とだろう。

終戦から間もない或年に、ルイ・アームストロングが一党を率いて来日したことがある。あまり人気も湧かず、入りも悪かった。安部は浅草のK劇場で、彼の公演を見た。だだっぴろいK劇場内の疎らな見物を前にして、トランペット奏者であり歌手でもあるルイは、終始懸命の熱演を弛むことなく続けきった。

安部は、強烈な感動に身が痺れた。

デキシー・ジャズの王様とうたわれる彼の、謙虚で、しかも熱情があふれた舞台に涙ぐみさえもした。

汗に濡れた黒い肌。魔物のような魅惑を発散する厚い唇。ジャズの情熱がそのまま眼玉になったかのような大眼玉。あの寒ざむしい見物を前に、少しも屈しなかった芸魂。安部は興奮して柳井にしつこく頼み、情熱的な文章で、ほとんど一頁を書かせてもらったものだった。

ルイ・アームストロングの声がペリー・コモに変った。早くも〔ジングル・ベル〕だ。

ルイの〔揺り椅子〕は、黙々と手帳を睨んでいる安部の、嘗ては瑞々しかった青春を揺り動かし、揺り戻してはくれなかったようだ。

「安部さん、しばらく。ちっともお見えにならないのね」

「やあ。ごぶさた」

この近くの路地にある酒場「シュガー」のマダムの延江と、延江の妹の洋子が、安部に笑いかけながら、前の席へ坐った。

「お邪魔じゃない？」
「いいんだ。週刊Mの用事をすまして銀座へ出たばかりさ。どうも忙しくってね」
「結構ねえ」
「今度、ぼくの本が出る」
「結構だわ」
「忙しくってね」
延江が声をたてて笑った。安部は厭な顔をした。
延江の笑いは安部の鬼門だった。その笑い声が腹の底まで突き刺さってきて、自分が被っている何枚もの皮を一ぺんに引剝がされる思いがする。いくら威張ってみても駄目だった。
「安部さんの商売って、いい商売だわ」
と、何年も前に延江が言ったことがある。
「冗談言うなよ。あくびを噛み殺しながら愚作揃いの舞台を毎日見つづけなきゃならないときの辛さ。察してくれよ」
「贅沢言ってるわ。あなた達はね、ペン一本でもってさ、役者も作者も演出家もよ、思う存分にやっつけられるんだもの。それでいて、他の誰も自分達をたたくことは出来ないんだっていう……そういう安定感があるんじゃない？」
「冗談言っちゃ困るよ、君」
「もちろん無意識的にだろうけどさ。は、はは……そういう安定感の上に立って、縦横無尽にペ

ンをふるって、たたきもすれば撲りもする、殺しもする」
「よせよ」
「みんなの恨みが積ってるわよ、きっと」
「フン」
こんな延江の毒舌も此頃は聞かれなくなった。
彼女は豹変した。安部が延江の店で飲む酒は原価なみにしてくれるし、勘定をとらないこともある。理由は明白だ。
いま安部の目の前にいる延江の妹は、この春に或る劇団の養成所を出てから、ラジオやテレビで、かなり売れてきている。秋の劇団公演にも良い役がつき、安部は某紙に讃辞をつらねてやった。
細面だが眉の濃い、瞳の大きな……十年前の延江は、この妹の面影をまだ残していたものだった。今のマダムの顎は二重にくくれている。
ともかく、妹の洋子がデビューしてからは、安部に対する延江の態度は変った。
延江は、安部が在学中に仲間とよく出かけた新宿の酒場で働いていた。パトロンがついて現在の店のマダムにおさまるずっと前のことだ。
安部は一度手を出して、ピシャリと撥ねつけられたことがある。それ以来、延江には頭が上らない。手の出し方が汚かったからだ。
自分の書いたものが活字になるようになってから、安部は、遠ざかっていた延江の店を、また

訪れるようになった。劇評家という〔文化的権威〕を延江が認識してくれることを期待していたのだが、それは冷笑によって報いられた。

一時は、安部も閉口して寄りつかなかった。

延江の妹がデビューしたことを知り、思いきりやっつけた。

間もなく延江から、ぜひ一度店へ来てくれという鄭重な手紙と共に、贈物が届けられた。

(ざまア見ろ!!)と、安部は勝ち誇った。

以来、酒がなくてはいられない安部にとって〔シュガー〕は、なくてならない店のひとつになったわけだ。

「いま買ってきたばかりなんだけど、いかが?」

延江が外国煙草の包みを安部の前へ出した。〔ゲルベゾルテ〕が十箱だ。延江も扇十郎と同じになったわけか……。

「悪いなあ」

早速に、安部は細く長い指で器用にパラフィン紙と銀紙をめくり、平べったい特有の型をしたドイツ煙草を摘みとった。

延江の目配せを受け、洋子がマッチをすってくれる。

「日本の煙草も、これだけデザインに手間をかけりゃアいいんだがね。味は負けないんだから……」

「あら。煙草の批評は的確だわ。けど……」

と言いかけて、延江は口を噤み、黙って笑った。
「ふん。また何か言いたいんだろ」
「いいえ、そんな大それた……とにかく、これからも洋子のことお願いするわね。お正月にはF劇のミュージカルにも出るし……洋子、お願いしなさい」
「ハイ。安部先生、よろしくお願いします」
薔薇色の唇から、にっこりと白い歯がのぞくのを見やりながら、安部は（畜生。ぼくが洋子をモノにしたら、延江のやつ、どんな面をするだろうかな）と思った。でも延江は妹に、安部のことは何と言って吹込んでいるか知れたものではなかった。
「はい、はい。出来るだけお力になりますよ」
冗談めかして言って、安部は腰をあげた。とにかくまだ〔シュガー〕を利用する価値はある。これからどちらへ、と訊く延江に——招待日に下痢をして見損なったのでG座を見て今日中に原稿を書かなきゃならないんだ、何しろ忙がしくてね、と答え、安部は二人に別れた。

G座には〔現代座〕が公演している。
〔現代座〕は、大女優とも名女優ともいわれる萩原千恵子と若手の人気男優が主軸となり、次々に人気作家の小説を劇化するので入りも悪くない。団体客を割引きで詰め込むより手段が無くなった商業劇団の中にあって、若い観客層が三階席へ詰めかけるのは〔現代座〕の特徴だと言ってよい。

安部は楽屋口から入った。頭取部屋の傍で電話をかけ終えたばかりの若い女優が「あら、安部先生」と叫んだ。とたんに、その女優の全身は媚態をつくった。

「先生。御相談したいことが出来ちゃったんです。お忙しいでしょうけど、お暇つくって下さいません？　ね、お願い」

顔がくっつきそうに擦り寄って来てささやく。悪い気持はしなかった。〔批評家の先生〕ことに安部のような若い〔先生〕には、女優の相談が一番効くのだ。演技的に行き詰ったとか、テレビに移りたいとか、誰々が意地悪をするとか……彼女達は思いきって甘ったれる。〔先生〕を良い気持にさせておいて、〔先生〕に、自分の何かを一行でもいいから書いてもらいたいからだった。

「いいよ。明日じゃ、どう？」

「よろしいですわ。こちらからお宅へでもお電話かけます？」

「いや、ぼくの方から、かけるよ」

「あ、嬉しい。助かったわ」

と言う拍子に、女優の、しめっぽい手が安部の手をギュッと握り、はなれていった。これも悪くない気持だ。劇評家として、若い女優の指導をしてやる義務もあるべきだ。

安部は、萩原千恵子の部屋へ挨拶に行った。

「今日、見ます。今度はすばらしいそうですね。このところ凄く好調じゃありませんか」

「よろしく」

すでに四十を越えた萩原は、くどくどと喋らない。大スタアの貫禄を見せ、豊満な肢体を鏡台の前にゆったりと寛がせて、紅茶を飲んでいる。そして鏡に映る安部の顔にだけは絶えず微笑を送ってくる。これが安部を酔わせる。

自分の得にならない人間には視線を与えるのも惜しがる萩原千恵子なのである。

（萩原も、ぼくには一目置いてる）と、今日も意識外の安心が、安部を幸福にした。

萩原が安部に何かくれた。外国煙草だ。またも〔ゲルベゾルテ〕十箱だった。外国煙草が堂々と市販されるようになってからの、これは一現象にすぎない。しかし、劇場やテレビ局や新聞社で、外国煙草を吸ったり人にすすめたりすることは、安部の虚栄心を、かなり満足させてくれるだろう。

萩原の部屋を出ると文芸部長が待っていた。わざわざ客席へ案内してくれようというのだった。

そこへ、人気スタアの秋元圭吉が扮装して通りかかった。安部を認めていながら、秋元は若々しい精悍な一瞥を、じろりと安部へくれただけで、さっさと行ってしまった。まるで安部なんかは、奈落に漂うゴミか埃にしか思っていないような一瞥だった。

安部は、秋元の後姿を白い眼で睨んだ。堪え難い侮辱である。これに気づいた文芸部長が歯を剝き出して愛想笑いをした。

「秋元君、何しろまだ若いもんだから」

「あれじゃ困るね。ぼくを何だと思ってるの、挨拶もしないで……」

と、思わず忿懣が出た。

「そりゃね、秋元君てのは才能もあるし人気もあるよ。萩原さんに抜擢されて、ここ二年ほどのうちに、ぐんぐん伸し上った、これは認めるよ。将来、大スタアになるっていう下馬評も頷けないこともない。けど、彼、ジャーナリズムに対し少し無礼じゃない。損だよ、大損だ。言っておやりなさいよ」

「え、注意しときます」

奈落を通り劇場の廊下へ出ても、まだ安部はプリプリ怒っていた。一昨日出たばかりの〔週刊M〕へ、秋元圭吉について辛辣な一文を書いたばかりなのに……。

（あいつも読んだろうに、まだわからないのか）

つまり、つまりおれに屈服しなくてはならんということが、まだわからないのか、ということだった。

3

安部の父は、戦前の兜町で、かなり羽振りのきいた仲買店の主人だった。戦後、株式界が再出発したのを契機にして、店を、支配人に乗っ取られた。

安部の二人の兄は戦死していたし、母も戦争中に病没し、老い果てた父も八年前に死んだ。だが、とにかく安部は、多勢の女中にかしずかれて少年時代を送り、大学を出るまでは父が何とか

贅沢を続けさせてくれた。

父の友人がK座の支配人をしていて、それに頼んでもらい、ライカを持っては舞台の俳優達を撮影することに熱中したのも其頃だった。

学友で、これは苦学をしながら文科にいた斯波も歌舞伎ファンだった。斯波も、新聞記者だったとかいう叔父の形見のライカを持って、一緒に劇場へ出入りしたものだった。父母もなく独りぼっちの斯波を、当時は下落合にあった父の家へ同居させてやることも出来たほどに、安部の学生生活は恵まれていたのだ。

斯波や他の仲間達と、新宿の延江がいた酒場へ、よく通ったものだった。

父が死ぬと、意外にも、あとには何も残っていなかった。結婚するときに下落合の家を売り、その費用をつくり、荻窪へ小さな家を建てるのがやっとだった。

安部の生涯をかけての念願は、自分の創作戯曲を舞台にのせることだ。しかし、他人の厳しい苛酷な批判に堪え、ものを創り出すという強い仕事で自分を仕上げて行くという道程には、まだ安部も踏み入ってはいない。

自分を甘やかしたままで大人になってしまった安部の捩じくれたプライドは、他人にやっつけられることを極度に嫌った。だから、表面だけでも自分の誇りを傷つけられず他人を傷つけることが出来る側に廻ったのかも知れない。むろん、このことは意識していない。今でも安部は劇作家への夢を捨ててはいないのだ。自分の創作戯曲が脚光と拍手を浴びる日が、何時かはやって来るかも知れないと、絶望しながらも縋りついている。

席へ着くと、秋元圭吉が主演する二本目の芝居の幕が開いた。昼夜二本ずつの並べ方で、夜の部は昨日見ていた。

その芝居は新人の作品だった。現代座が採り上げた彼の二本目の戯曲だ。小品だったが、見ているうちに、我知らず安部は引き込まれている自分に気づいて舌打ちをした。

若い作家への強烈な嫉妬と羨望が安部を苦しめ、そしてまた戯曲に精彩を与えている秋元の演技に感動した。感動しつつも、怒りをおぼえた。

見終ると廊下へ出て、たてつづけに煙草をふかした。文芸部長が寄ってきた。

「いかがでした？」

安部は、自分の感能が正直に汲みとったものを放り捨てて、苦々しく言った。

「本も子供っぽいし、秋元君の演技も子供っぽい」

「まだねえ、何てっても、若いから」

文芸部長が相槌をうつ。彼は萩原千恵子の懐刀だとか言われている。秋元圭吉がやっつけられることを彼はむしろ喜ぶ。自分が所属する劇団の秋元の不評が嬉しいというのは不思議だが、萩原だって相手役の秋元が褒められると良い顔はしない。能なしの文芸部長としては、萩原が現代座の一枚看板だという讃辞に取巻かれていれば、自分の責任が果せるのだった。

食堂でビールと食事が出た。

文芸部長が去ると、安部は鞄から原稿紙を出し、鉛筆をグイグイ動かした。三本目の萩原千恵子の出し物は見なくてもよい。再演ものだし、褒めて褒めて褒め抜いてやればいいのだ。

秋元の演技と新人作家への弾劾に、安部は夢中になっていた。
（おれにだって、あの位のものは書ける。書けるとも）
〔スポーツ紙H〕の明日の紙面に載せる劇評だった。安部は唇をわなわなと震わせ、けだもののように、眼を剝いて鉛筆を走らせた。
次の幕が開いて人気のなくなった食堂の片隅で、給仕の少女が三人、不審そうに囁き合っては、テーブルにしがみついている安部を見守っている。
書き終えた原稿を鞄に突込み、廊下へ出ると、客席からどッと見物があふれてきた。一幕目の休憩時間らしい。
「安部君――」
と、呼びとめられた。
振り向くと、太縁の眼鏡をかけた温顔と肥軀が近寄って来た。柳井でさえ一目置いている劇評界のベテランだった。安部の挨拶を穏やかに受け、三井老人は言った。
「週刊Mの、君が書いたもの読んだけど、どうして君は、秋元圭吉を眼の敵にするの？」
「ぼく、思った通りを書いただけなんですが……」
「そうか。それならいいけど……でもなあ、君。悪意のない批評なら、いくら酷評されても厭な気にはならないけど、読むものは敏感だからね。こっちの本体は絶えず露呈されてるんだよ、君」
「ぼくは、別に悪意があって、あれを書いたわけじゃありません」

ちらりと三井老を睨んでやったが、それ以上は安部も刃向えない。口惜しかった。

「安部君ねえ。君はまだ先が永いんだものね。この仕事で食べて行くつもりなら、よっぽど自分と闘って、しっかりやらないとねえ。この仕事やってると、若いときの無垢な情熱ってものが、年をとるに従って何だか変なものになりがちなんだ。わかる？」

何が自分と闘うだ、何がわかる？　だ……気をつけますと一礼して、安部は、さっさと表へ飛出した。

（畜生!!　早く、くたばっちまえ、くそったれ爺い）

空になったゲルベゾルテの箱を、安部は力一杯、舗道へ叩きつけた。

4

銀座に灯がついた。〔忘れ得ぬ面影〕の見本二冊を抱えた安部は、酒場〔シュガー〕のある路地へ入って行った。

本は、装幀もレイアウトも申し分がなかった。布装A5判函入の美本で、菊五郎、幸四郎、延若、吉右衛門、井上正夫など、戦後に没した名優達の舞台写真がギッシリ詰まっている。

安部のポケットには印税のうちの約十五万円が収まっていた。本も出来たし金も入ったのに、安部は浮かない表情をしていた。写真に添えた解説の文章が、校正のときよりも、また半分ほど削りとられてしまっていたからだ。

「レイアウトの関係もありましたし、それに……」
と、出版社の部長は遠慮会釈もなく言った。
「それにどうも、写真のすばらしさに比べると、あまり余計な解説を盛り込むのは反って効果を殺ぐようにも思えましたし……」
安部は蒼白となった。また唇が痙攣をはじめた。それを見て、部長が執成するように、
「しかし写真は実に立派なもんですなあ。近頃はおやりにならないとか、柳井先生にうかがいましたが、是非もう一度カメラを持って頂きたいものです。やはり演劇をよく知った方の眼でないと、これだけの舞台写真は撮れません。失礼ですけど、私の方で企画をたててみますから、カメラをもう一度……」
「いえ。もうカメラは絶ったんです、思うことありましてね」
「そうですか。残念ですな、それは」
何かまとまったものが書けたら、写真を売り物にしない評論だけの本を出版して貰いたい考えもあり、部長を夕飯に誘って部長との関係を深めておきたいと思っていたのだが、こうも鮮やかに自分の書くものをやっつけられては、安部も二の句がつげなかった。
本と印税を受け取った瞬間に、G座を出たときからの鬱憤が消え、満面を笑みくずしていた安部も、神田から銀座へ出て車を捨て、爪を噛み噛み酒を求めて歩き出したときには、重い体をのろのろと運ぶ自分の足どりに唾を吐きつけてやりたいほどだった。
重苦しい劣等感にさいなまれている自分を何処へ解放したらいいものか……安部は〔シュ

ガー」の扉を押した。

まだ宵の口なので女達も揃ってはいず、レコードも鳴ってはいない。

マダムの延江が、向うからニヤリと笑いかけた。安部は、奥まった椅子にかけた。

「何時もので、よろしいの？」

「うん」

女達は、安部が来ると寄りつかない。酔うと胸に溜った忿懣をみんなぶちまけてしまうし、暴れるし、喚き出すし……とにかく安部の酒癖は悪かった。

延江が酒を運んできた。

「何だか御機嫌ななめなのね」

「冗談じゃない」

安部は、ぐっと酒を呷り、抱えていた本の包みを開いた。延江が眼で、酒のおかわりをバアテンに言った。バアテンは安部を顎でしゃくって（厭な奴ですね）と、マダムに眼で話しかけた。

延江は片眼をつぶって見せ、頷いた。

「出来たよ、これさ」

勢込んで、安部は〔忘れ得ぬ面影〕を延江の眼の前に突出した。マダムも今度はびっくりすることだろう。

「へえ。すてきじゃない」

安部は小鼻をうごめかした。

「一冊あげるよ」
「ほんと？　いいの？」
「いいさ」
安部は大きく胸を張り、大様に頷いて見せた。悪い気持ではなかった。
「どうも有難う」
「どういたしまして」
おかわりが来た。すぐに安部は手を伸ばしてグラスを摑んだ。延江は、ゆっくりとページを繰っていった。
名優達の舞台が見事に再現された作品ばかりである。ライカの小さなマスクぎりぎり一杯に、トリミングもなしに構図をとったものばかりだった。その舞台の精神と名優達の演技とが渾然と溶け合ったシーンが、ズバリと切ってとられてある。
撮影者の、舞台への的確な解釈が寸分の狂いもなく、その一枚一枚に表現されているのだった。
「あなた、文章よりも写真の方がうまいわ」
「ふん」
「あなたが、亡くなった斯波クンと一緒に、まるで物に憑かれたみたいに劇場へ通ってた頃の、これが結晶ね」
「まあね」

「斯波クン、生きてたら、きっと、よろこんでくれるわね」
「まあね」
延江の指が、また緩慢にページを繰りはじめた。何時の間にか中年の客が一人入って来て、女を抱え、しずかに踊っている。
延江が、急に首をあげて言った。
「渋谷ちゃん、マジック持ってきて」
安部は三杯目を飲んでいた。
バアテンがマジック・インクを持って来ると延江はそれを摑み、バアテンが去ったのを見すましてから〔忘れ得ぬ面影〕の函と表紙に——安部幸男著——と刷られてあるところへもっていった。
「何すんだい、マダム——」
答えず、延江は、ビューッと安部の名前をマジック・インクの黒で消し飛ばした。
「何すんだッ。失礼じゃないか!!」
延江は答えなかった。安部の名を消し飛ばしたその上部へインクを走らせ、一気に——斯波進——と書いた。
安部は、胃袋のあたりを何かで力一杯撲りつけられたような気がした。呼吸が詰り、体中に脂汗が吹き出してきた。
「どっちが失礼よ」

と、延江は安部を見上げた。
妹のことも考えて頭も下げ、ただで飲ませもし、押えに押えていたものが一度に爆発したといった眼の光だった。
「この写真、見るまでは、半信半疑だったわ」
「何がだ。な、何が？」
「一体あんた、斯波クンと私とが、何だったと思ってたのよ。知らなかったんでしょう」
「……？」
「斯波が生きてたら、私、こんな商売してやしないわよ」
女達もバアテンも客も、息をころして二人を見詰めている。レコードも止った。
「この中の写真全部、斯波が私に見せてくれたものだわ。斯波は、ただもう芝居が好きで好きでたまらなかっただけよ。撮した写真を自分で眺めて、そして私に見せるだけで、満足していたのよ」
延江は起った。安部に向い合って睨みつけた。安部の両足は震えていた。
「あんた、言ったわね。斯波の写真は、みんな田舎の叔父さんが持って行っちまったって」
「黙れ!!　これは、みんな、ぼくが撮ったもんだ。お前なんか知ってやしないじゃないか、お前なんか……」
「何言ってんのよ」
と、延江は軽く撥ねつけた。両眼が涙でキラキラしていた。

「斯波が死んで十年もたってるから誰も知らないと思ってたの？　図々しいわね」
「何……」
「人の褌で相撲とるって言葉、あんた知ってる？　知らないんでしょう」
延江の顔に凄じい笑いが浮んだ。
「あんたなんか、何時でも、ひとのふんどしだ。他人が書いたもの、他人が演ったもの、他人が創ったものを横から掻っぱらって悪口言って、それで御飯食べてるんじゃないのさ」
いきなり、安部が延江の頬を撲った。
延江はグラスを摑み、罠にかかった野狐のように歪みきった安部の面上へ、彼が飲み残した酒をぶっかけた。女達が叫び、バアテンと客が割って入り、わけのわからぬことを喚きつづける安部と延江を引き離した。
「どんな商売のやり方にも、ピンからキリがあるものよ。あんた、ピンの方になんなさい、そしたら許したげる」
こう言った延江の声も耳へ入ったかどうか。安部は中年の客に胸倉をとられ、路地へ突き出されていた。
夜更けて、泥酔した安部は帰宅すると、妻の良子を撲りつけ、大荒れに荒れた。
良子が出した茶も飲まず、ものも食べず、よろよろしながら書斎にしている四畳半へ入った安部は、机に突伏してしまった。良子が、おろおろして部屋へ入って来ると、また撲った。

どの位たったろう。痛む頭を抱え、安部は、引出しから原稿用紙を取り出し、机の上へ置いてみた。

〔断崖〕第一幕……とのみ書かれたその原稿用紙を見つめているうちに、安部は悲鳴に似た泣声をあげはじめた。

〔断崖〕第一幕……と書いてから、何年たってしまったことだろう。

解説

常盤新平

池波先生が小説を書かれるようになったのは、昭和二十九年、三十一歳のときである。年譜によると、小説の処女作は「大衆文芸」に発表された「厨房(キッチン)にて」という。残念ながら、私はこの短編を読んでいないが、後年の先生を予想させるような、『食卓の情景』などを暗示するような題名だと思った。

もしかしたら、先生はそれ以前からひそかに小説を書かれていたかもしれない。昭和二十一年、二十三歳の若さで、読売新聞の演劇文化賞に入選した劇作「雪晴れ」が新協劇団によって上演され、昭和二十六年から新国劇で毎年、先生の戯曲が上演されるようになって、劇作家としての地位をかためつつあったとき、小説を書いてみようと思われたのも不思議ではない。

昭和二十九年は「厨房(キッチン)にて」の一編だけだったが、翌三十年にはサラリーマンをやめて、執筆に専念されるようになり、短編小説を三編、いずれも「大衆文芸」に発表している。昭和三十一年にはやはり「大衆文芸」は先生の作品を五編掲載していて、そのうちの「恩田木工」は二回にわたって載り、直木賞の候補になった。

昭和三十二年は短編の数が十一編に増え、発表の舞台も「大衆文芸」だけではなく、「小説倶

楽部」、「面白倶楽部」とひろがっている。その一編が『緑のオリンピア』に収められた「眼」（「大衆文芸」六月号）である。この年、「眼」と「信濃大名記」で直木賞上、下期の候補となった。

先生が直木賞を受賞されたのは昭和三十五年である。『緑のオリンピア』の五編は、一編を除いて、受賞前に書かれた。「木葉微塵」、「緑のオリンピア」の二編は共に昭和三十六年の作品で、「大衆文芸」に掲載された。「のどぼとけ」はいつの作品であるかは、年譜には出ていないが、単行本に収録するにあたって改題されたのかもしれない。

この文庫のもととなった単行本は『眼』という書名で昭和三十六年に東方社より出版された。先生の創作集としては六冊目にあたり、うち四冊は東方社刊である。「大衆文芸」も東方社もいまはないが、池波正太郎という作家に賭けた雑誌であり、出版社だったといってよい。

いま、池波先生の読者は圧倒的に多い。『鬼平犯科帳』や『仕掛人・藤枝梅安』や『剣客商売』の読者はつねにその新作を待ちかねている。しかし、あるインタビューが終ったあとで、先生は、作家は三千部、四千部から出発するものだと言われたことがある。人気作家は一夜にして生れるものではないと暗に言われたような気がした。

『緑のオリンピア』を読めば、池波先生がじつに丹念な取材ののちに書く作家であることがわかる。それは「眼」の一編を読んでも明らかだろうし、娼婦シリーズともいうべき現代小説の『娼婦の眼』（講談社文庫）によっても一目瞭然である。

「眼」は力作である。小説になりにくい素材をよくぞ小説にしたと思われる一編である。異色作

といってもいいが、この文庫の前書の言葉を借りるなら、「自分に合った文体を探りつつあった」若い作家の血と汗が行間からふきこぼれてくるような、しかしそれでいてすがすがしい小説である。

大作家の若い日の作品をはじめて読むのは楽しいエクサイティングな経験だ。そこには、作家が持っていた可能性のすべてがある。『梅安』や『鬼平』は、池波先生がいかにも楽々と書いているように思わせる。だからこそ読んでおもしろいのだが、「眼」を読んでみれば、この作者がいまも人知れず苦心していることが推測できる。

表題作の「緑のオリンピア」は池波ファンにとっては意外な小説かもしれない。これはすぐれたスポーツ小説であり、処女のようにういういしいSFである。これもまたすがすがしい小説であって、その作者は池波先生というより池波青年である。先生の若さがこの一編に凝縮しているようで、読みながら微笑ましく思った。

「緑のオリンピア」が書かれたころ、先生はおそらくまだ模索の時代にあったのだが、そこからまもなく脱しようともしていた。このような小説が昭和三十三年に書かれたというのは驚くべきことだと思う。SFという言葉はまだほとんど聞かれなかったし、先生もSFを書こうなどと思われていなかったにちがいない。

「緑のオリンピア」は先生の豊かな想像力の産物である。それに周到な取材が加わって、みずみずしい青春小説が生れた。考えてみれば、『鬼平犯科帳』につぎつぎと登場する個性豊かな盗賊たちも先生の想像力から生れてきたのである。

「緑のオリンピア」の妖精セリナ・マネットは、池波先生が描く女たちの一人の原型ではないかとも思われた。たとえば、『剣客商売』で秋山大次郎の妻となる佐々木三冬にセリナは似ているようだ。もっとも、こんなことを書くと、先生に笑われるかもしれないが、そのような空想を楽しむのは、愛読者に許された一つの特権であると思う。男装の麗人、佐々木三冬は、はじめは妖精のような女である。

「木葉微塵」はきわめて興味深い短編だった。この作品に登場する木内留次郎は「閻魔爺」と噂されている老人で、息子夫婦や孫にまで口うるさい。晩酌の二合は欠かしたことがなく、息子夫婦としては別居したいところだが、この「マッチ箱のような」家を出てゆけば、家などの財産がはいってこないかもしれないので、じっと辛抱している。このじいさんが荒れ狂うと、手当りしだいに器物を投げこわし、羽目板に躰をぶつけて、悪態のかぎりをつくす。

やがて、木内留次郎は死ぬのであるが、このじいさんこそ、あの鬼熊酒屋の亭主の原型ではないかと大発見をしたような気になった。『剣客商売』二冊目の『辻斬り』（新潮文庫）にはいっている「鬼熊酒屋」を読んでみるといい。時代は江戸と現代のちがいはあるけれども、木内留次郎と鬼熊の亭主は瓜二つである。

「鬼熊酒屋」では、老剣客、秋山小兵衛がこの居酒屋の亭主の行動を探るのであるが、「木葉微塵」では、木内留次郎に興味を抱くのは、「八室ほどの小さなアパートを建てて、ひとり呑気に暮している」梶敬三という老人である。しかし、「鬼熊酒屋」は円熟した作家が書いたものであり、「木葉微塵」は新進作家の小説である。そこに、おのずからちがいがあって、読みくらべる

と楽しい。そして、椚敬三は「原っぱ」の主人公に似ている。

初出がわからない「のどぼとけ」はフランス風のコントといったらいいだろうか。先生はオチのある短編を書こうと意図したように思われる。先生がサラリーマン時代に見聞したことを小説にしたてたのかもしれない。

最後の「ひとのふんどし」は劇作家としての体験から生れたらしい。もっとも、体験といっても、先生ご自身のことではない。ただ、先生の周囲に当時、このような劇評家がいたのではないかと思わせる。先生がろくでもない劇評家に筆誅を加えた作品である。

五つの短編はそれぞれ舞台も人物もちがう。盲人や三段跳びの選手や偏屈な老人や男に捨てられた女や劇評家が各編に登場する。先生はそのころさまざまの人物を描いてみようと「懸命」だったのだろう。「ひとのふんどし」は受賞後の昭和三十六年、「文芸春秋」二月号に発表されているが、直木賞を受賞したからといって、「懸命」であることをやめてはいない。

「眼」には主人公の支持者となる力士が出てくる。角力の世界について、どうして先生はこんなに詳しいのだろうと若い読者は不思議に思われるかもしれない。先生は昭和三十年、「名寄岩」という戯曲を「大衆文芸」に発表し、新国劇で自ら演出されているのである。「眼」を書かれる前には、「三根山」という短編を「小説倶楽部」に執筆している。

『娼婦の眼』もまだ三十代の池波先生を知る上で貴重な短編集だったが、『緑のオリンピア』は先生の小説家としての出発を理解するのに欠かせない一冊である。

これはいわば読者が作家の誕生に立ちあうような短編集だ。先生がどのようにして小説を書か

れていたかを知ることができる。作家の秘密を知る一冊である。

先生は五回目で直木賞を受賞された。受賞作である「錯乱」を最も強く推したのは故川口松太郎だったということを『新・私の歳月』（講談社）のなかのエッセーで書いておられる。川口氏は池波先生の将来に賭けられたそうである。先生の大成を早くも見抜いていたのである。

池波先生は現代小説のかたわら、時代小説も書かれた。やがて、現代小説を捨てて、時代小説に専念されるようになったのであるが、いままた現代小説にかえってこられた。「波」という雑誌に連載がはじまった「原っぱ」はじつに久しぶりの現代小説である。二回目までを読んだばかりだが、先生の若いころとはもちろんちがった、しみじみとしたものがある。けれども、若いときには見られなかったモダーンなところもある。

そして、池波正太郎という作家はつねに前進しようとしているように思われる。いまでも、たえず「自分に合った文体を探りつつ」あるようだ。なればこそ、先生は新しい読者を獲得してゆくのである。名声に安住しない作家である。それが作家としての若さを保つ秘訣ではないか。

『緑のオリンピア』には、将来、作家として大きく飛躍する、その可能性が芽生えている。この新人、只者ではないぞという凄味が一編一編に感じられた。鬱勃としたものがこの短編集にはある。これは若い日の作家の肖像といってもいい。

本書は、昭和五十八年八月に、東京文藝社より刊行された「ひとのふんどし」を改題したものです。収録作品はそのままです。

緑のオリンピア
池波正太郎
© Shotaro Ikenami 1987

講談社文庫
定価340円

昭和62年4月15日第1刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183956-X (O)

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の頃末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫 最新刊

司馬遼太郎	箱根の坂 (上)	応仁の乱に荒れる京都。激動の予兆の中、野望を胸に生きる若き日の北条早雲。全三巻。	440円
池波正太郎	緑のオリンピア	オリンピック出場をめざす若者のみずみずしい青春の香気。著者の記念碑的初期秀作集。	340円
西村京太郎	寝台特急「北陸」殺人事件	深夜のブルートレインで金沢に旧友を訪ねるOLを襲う魔の手。旅行ミステリー会心作。	380円
山村美紗	三十三間堂の矢殺人事件	通し矢の儀式のさなか、一本の矢がOLの背を貫いた! 絶妙のトリックを駆使した七編。	400円
森村誠一	青春の源流 (四)	戦争に引き裂かれた青春の幻。時代のうねりに翻弄された若者たちを描く大河小説完結。	440円
逢坂剛	幻のマドリード通信	マドリードの日本大使館から黒コゲの死体! 新直木賞作家が放つ鮮烈なスペイン小説集。	380円
梶山季之	わが鎮魂歌	小説家への野心を胸に上京した青年の鬱屈の日々。鬼才が青春を書き遺した自伝的長編。	400円
太田蘭三	破牢の人	無実の罪で服役中に妻が殺害された。犯人は俺の手で裁く! 凄絶な脱獄行を描く長編。	420円
田中光二	アッシュと地球の緑の森	灰から甦った宇宙戦士アッシュの新たなる使命は……。「アッシュ・サーガ」待望の第四巻。	440円

表示価格はすべて定価です。

日本推理作家協会編	とっておきの殺人	ミステリー傑作選17	西村京太郎、胡桃沢耕史等々、内容多彩、品質保証つきの年間ベスト・ミステリー17編。	720円
高柳芳夫	モスクワから来たスパイ		プラハの日本大使墜死に端を発する事件の連続。現代史の謎に迫る国際スパイミステリー。	400円
笹子勝哉	頭取敗れたり	小説銀行合併	金融再編劇の陰の政治の策謀と銀行マンの闘い。財界ジャーナリストが抉る長編経済小説。	400円
鎌田慧	アジア絶望工場		進出日本企業の実態を徹底取材し、アジアと日本のかかわりを考える最新海外レポート。	480円
塩沢茂	ドキュメント資生堂国際部		日本の化粧品がパリの女性の心を捉えたのは何故か。他企業も注目する国際戦略の全容。	360円
森祇晶	勝つための参謀学		最強の戦闘集団はいかにして作られたか。球界一の頭脳が明かすリーダーと参謀の条件。	360円
室伏哲郎	高級官僚	"霞が関帝国"の舞台裏	"霞が関帝国"の覇権と利権の動きを綿密な調査で抉り、エリート集団の実像を明かす力作。	360円
能見俊賢	血液型しつけ学		血液型で子どもの個性はこんなに違う！保育園の実践報告をもとに幼児教育を考える。	340円
川瀬一馬校注	枕草子	(上)(下)	優美な宮中サロンの実態を綴る永遠の古典文学。鋭く巧みな原文を生かした現代語訳付。	300円

表示価格はすべて定価です。 各500円

い
4
14

スポーツ好きの妖精に見守られて、一人の若者が、心身のエネルギーの全てで、三段跳びの練習に打ち込んでいた。尊敬する大先輩にコーチを受け、オリンピック出場をめざす鋭い緊張の日々に、若者は、スポーツの何たるかを深く自覚して行く。繊細で男らしい青春を爽やかに描く表題作他、瑞々しい初期作品集。

ISBN4-06-183956-X C0193 ¥340E (O)